

---

# BackStage The Hero

あ s k

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Back Stage The Hero

### 【Nコード】

N8838U

### 【作者名】

ask

### 【あらすじ】

少年は、不思議な力を手に入れた。  
前世の記憶と共に。

少女は、不思議な力を受け継いだ。  
勇者の名と共に。

二人は、同じ目的を目指しながら、違う道を進んだ。

少女は、栄光ある表の道へ。

もう一人は・・・真つ暗な、闇の道へ。

これは、鬼神と呼ばれた、世界から恐れられたもう一人の勇者の物語。

Step・i 燃えるのは少年の故郷（前書き）

処女作です！

完結できるようがんばります！

## Step・i 燃えるのは少年の故郷

「な、なんでこんなことに・・・」

月夜の中、10歳弱の灰色の少年は、崩れるように膝をついた。

服装は、グレーのマントに少しゆったりした茶色の“ウープランドウ”という表着で、ボトムは紐を通す穴が大量に開いている“ジポン”というもの。この格好は、この辺の都市に近めな村では一般的な衣装だ。

ただ・・・一般的ではない点がひとつ・・・彼のその手には、半分折れた、真っ黒な血が付着したブロードソードが握られていること。

彼の名前はハルバード。家名はない。愛称は“ハル”だ。自警団に所属している、剣士見習い。

その彼の真っ黒な瞳の視線は、真っ赤に燃える炎。そこには、彼が育った村でもあった。

「だ、誰か・・・生き残ってるかも・・・？」

ハルバードは、自分に鞭を打って立ち上がる。そして、炎上している村へと駆け出していく。

淡い希望を抱いて。

しかし、村は想像以上に酷かった。

燃えてしまったのは、家だけではない。道に転がっている“黒い塊”に、ハルバードは嘔吐する。

それでも、前に進んだ。

希望が無いと知りながら。

「……お前だけは……赦さなねえ！」

「別に、赦さなくても構わないぜ……どうせ死ぬんだからな」

声が聞こえた。しかも、片方の声は見知った声だ。

声の聞こえた方向は、村から少し外れた場所。

急いでハルバードは走る。折れた剣を手にしていた右手は、緊張のためかいつも以上に強く握り締めた。

声の聞こえた場所へたどり着くと、水をぶちまける音。そして、なにか質量がある柔らかいものが地面に落ちる音が聞こえる。

一瞬、何かわからなかった。だが、すぐにそれを理解した。

目の前には、黒い液体まみれの……ナニカ。そして、その傍には……闇よりも深いフードに深く被ったローブの者。

「……誰だ？」

「声からして、男性だとハルバードはわかった……といっても、彼は別のことで頭がいっぱいだったが。」

「あ……あ……」

ハルバードは、黒い液体まみれのナニカを見て絶句する。金髪で凛々しい顔立ちをしたハルバードと同一年の者。格好も、ハルバードと同じくウープレンドウにジポン。そして、腰には黒い装飾が施されている剣がベルトに引っかかっていた。

横たわっている人物は、ハルバードが唯一心のそこから信頼し、いつもくだらない事ばかり話していた、唯一の友達だった。

「キ、キース……」

「なんだ……“従者候補”の知り合いか」

ため息を吐く黒ローブの男。そして、殺気をハルバードに向けて放出し……

「なら……お前も死ぬ」

黒ローブの男は、ハルバードに向かって手のひらを向ける。

ハルバードは、動けなかった。黒ローブの男が放つ殺気に対しての恐怖ではなく、血まみれの親友を見て目が離せなかった。

「に、逃げるハル……」

だが足元から聞こえた怒号に、思わずはっとするハルバード。すぐ上半身だけを反転させると、氷の塊がハルバードの頬を掠めた。それでも怯まず、ハルバードは黒ローブの男に突っ込んでいく。

「グッ!？」

折れた剣を投げ、黒ローブの男が怯んだ隙に黒ローブの男の懐へ。そして、ハルバードは握りこぶしを作り・・・

「ぶつとへ!...!!」

## Step・2 すべてを失った少女

「なんで・・・どうして・・・？」

木々のせいで空が見えず・・・真つ暗な暗闇の中で、うねうねと曲がりくねった木々に囲まれた場所にいる10歳弱の金髪の少女は、倒れている甲冑の人物に問いかける。

少女の周りには、甲冑の騎士達が倒れていた。

ただ倒れているわけではない・・・体が欠けていたり、へし折れていたり・・・生きているものは、ほぼいないだろう。

そんな中、華奢な身体に少し装飾が施されたケープを羽織り、その下には綺麗な布で織られたワンピースを着ている金髪の少女は、その場所にいるのは相応しくないと、誰もが思うだろう。

その姿は、どこかの貴族かご令嬢かと思える服装。ただ、唯一戦場に立っている者として確認できる光の魔法で模られた剣を握っている以外は、本当に幼い少女だ。

甲冑の人物はというと、メットがすでに脱げていて、茶髪の単発に頬に斜めに傷がある男性。豪傑とまでは言わないが、たくましい体つき。

しかし、いくら身体を鍛えていようが・・・背中から、生えているように刺さっていた槍を見ると、いつもは頼もしく思えてた彼が、少女には小さく見えた。

その彼はというと、泣いている少女に微笑み、ふぐつと肺の空気を吐き出し・・・そのまま、動かなくなった。

甲冑の人物は、少女のお世話役兼護衛のレクサという男性。近衛隊の副隊長だったが、“勇者”として彼女が辺境の騎士団に入団してから・・・ずっと彼女の護衛をしている。

遠征中も、勇者と呼ばれ、崇められていた・・・幼き少女を、常日頃気を使っていたレクサに、少女は心を許していた。

その彼が動かなくなり、少女は下を俯いたまま肩を震わせる。

「・・・もう・・・嫌っ!!」

少女がその言葉を叫ぶのは、一度二度ではない。

彼女の母親は、彼女を生んで二年後に死んだ。彼女の母親は“勇者”だった。

彼女の名前は、スフィア・ソード・ブレイブ。“勇者”の娘であり、現在の“勇者”でもある。

彼女の母親の名前は、セリカ・コード。彼女の母親は大魔王ルシファーと戦い、かなり深い傷をつけて魔界に追いやった・・・しかし、そのときの傷のせいで死んでしまったと、スフィアは父親から聞いている。

彼女の父親は、ガリウス・ソード・ブレイブ。王国騎士団“迅”の団長。小規模ながら、精鋭と名高いアルド王国の騎士だ。

スファイアは、唯一の肉親である父親にここ何年も会っていない。なぜなら、彼女が在籍している騎士団があわせてくれないからだ。

しかし、それが裏目に出て・・・“勇者”がもつ特殊な力のせいで、王国の上層部から目をつけられた。次の“勇者”という名の生贄として。

幼い頃から家族から引き離され、剣や魔法を徹底的にたたき覚えさせる。そして、数年の厳しい修行の後に、辺境の騎士団に士分として入れられ、度重なる討伐の命により戦に最前線で戦わせられた。死を間近で見てきた幼い少女は、そのせいで、すでに心身共に弱っていた。

そんな中でも、彼女は心の拠り所をたくさんあった。辺境騎士の団長は酷い人物だが・・・辺境騎士団の団員達は彼女に気さくに話しかけてくれた。そのお陰で、寂しくは無かった。

一時だけ・・・

戦に出ると、必ず彼女の親しい騎士は死んでしまった。落ち込んでいると、その姿をみて彼女を慰めようと話しかけ・・・仲良くなくなってしまふ。そして、次の戦でまたその者は命を落とす。

そのうち、自分は死神か、疫病神ではないかと思いはじめ。そして、だれも話さなくなつた。

レクサという人物以外は・・・。彼は強く、そして死ななかつた。今日までは・・・

そして、唯一の心の拠り所を失った彼女は……。

「だれか……助けてよ……!!」

叫んでも、誰も答える者はその場にはいなかった。

代わりに応えたのは、醜悪な豚の顔を持つ妖魔……オークが、二体現れた。二体とも、剣と槍を装備した重装備の兵士の格好。

妖魔とは、本来自然で暮らす妖精の一種。だが、天使や悪魔が使役や契約、捕まえて調教をすることにより、このように人間に刃を向ける兵士になる妖魔もいる。このように兵士となった妖魔は……非常に恐ろしい戦士へと変貌する。

「……っ!!」

スフィアは、二体の妖魔を睨む……。

オークも、少女に対して威嚇するかのようには得物を地面に叩きつけ、徐々に近づいてくる。力なく、ゆっくりと立ち上がると……スフィアは、消えかけていた光の剣を構える。

そして……

「……《光の剣よ、私に再び力を貸してください》」

スフィアが不思議な“呪文”を唱えると、徐々に光が弱くなっていった魔法の剣に、再び眩い光が発せられる。

一瞬だけ目を瞑ると、カッと見開き、また新たに“呪文”を唱え

る。

「《原始の光よ・・・邪悪なる存在を聖なる光にて討ち払え》」

魔法の剣を妖魔に向ける。その剣は、勢いがとまることなく光が強くなり・・・

「《光の矢》」

魔法の剣から放たれた光の線は、瞬く間に二体の妖魔の身体を貫いた。光に焼かれた妖魔は、断末魔を上げて崩れ落ちた。嫌な臭いがその場を支配したのを、スフィアは気にもしなかった。

いつものことだと。

二体が動かなくなると、ふらふらと行く当ても無く歩き始めた少女。

「私は・・・私は・・・」

彼女の目は、すでに絶望を見たような・・・そんな目をしてた。

親しい人が死ぬのは、一度や二度ではない。慣れている。だから、今回も大丈夫。

そう自分に言い聞かせて、彼女は歩き続けた。

ただ、今まで異常に辛そうに・・・体が重く感じたのを、スフィアは気付きながらも気付かない振りをした。



### Step・3 親友の頼み

「キース！大丈夫か！？」

黒ローブの男を殴り飛ばし、すぐにハルバードはキースの様子を見るため、傍に駆け寄る。

しかし、ハルバードは顔をしかめた。思った以上に、酷い傷を負っているのを見て、生きているのが不思議にまで思った。

（は、早く治療しなくちゃ！！）

急いで、彼を治療するために魔法の陣を体内で整え、呪文を唱えようとした。

「や、やめる・・・もう無理だ・・・」

手をキースの胸に置こうとしたとき、手をつかまれた。

驚くハルバードに、キースは苦しそうにしながらも腰に差し掛かった剣をベルトからはずし、ハルバードに向けて差し出す。

鞘も剣も黒い剣で、所々金の装飾が施されている・・・綺麗な剣だ。

不思議な力を感じ取ったハルバードだが、触れた瞬間にそれと同じに力が少し奪われるようか感覚もあった。

（たぶん、正しい持ち主でないと力を奪われるのだろう・・・）

キースを見るハルバード。血にまみれ、死に対して恐怖をしているが・・・それ以上に、何かをしなくてはならない使命のために、必死に、懸命に何かを伝えようとしていた。

「た、頼む・・・勇者に・・・渡してくれ・・・」

「勇者？誰に渡せばいいんだ！？名前は!？」

キースの手をつかみ、必死に聞き取ろうとする。だが、徐々に目の光が失われていくのを見て、ハルバードは焦る。

治療がもう間に合わないことは気付いている。だが、彼を助けるために何かできないか・・・。そんな思いの中、必死でキースの声を聞き取ろうとする。

「今の勇者は・・・徐々に・・・力が・・・助け・・・」

「勇者の名前は!？特徴は!？」

血を吐き、嘔せ返るキース。もう、虫の息だった。

「金の・・・髪・・・金の魔ほ・・・使・・・」

息絶え絶えに、だが、最後に一言だけ、ハルバードははっきりと聞こえた。

「・・・スフィア。頼む、彼女を守ってく・・・」

「ぶっ、と血を吐く。それをみて、もうこれ以上話すのは見ても

れなくなったハルバードは、親友から剣を黙って受け取る。

すると、親友は最後に彼に微笑み・・・永遠の眠りについた。

「・・・よくもやってくれたな。不死身だからといって、痛みはあるんだぞ」

黒ローブの男は、ハルバードを睨みつける。その手には、とてつもなく長い真っ黒の杖。

先端には鴉が杭で両翼と胸に打たれ、死んでいる気味の悪い装飾に、所々小さな闇の翡翠玉が詰められた杖。

“死の魔術”専用の杖だということは、ハルバードは知っていた。独学で学んだ“魔法”と、自警団においてあった魔法書と魔術書を読み漁っていたからだ。

「・・・それはこっちの台詞だ！！何故殺した！！」

鞘から剣を抜こうとしたのだが、抜けなかった。まるで、錆びてしまっただけになっていくように。ハルバードは、すぐに諦めてそのまま剣を握り、構える。

「ふん・・・まあいいや。死にたくなかったらその剣を寄こしな」

面倒は嫌いなんだ、と呟いて、手のひらをハルバードに差し出す。

しかし、ギツとハルバードは睨み続けると、黒ローブの男はため息を吐き……

「まあいいや。“死にな”」

魔力が籠った、一言。ハルバードが少しでも魔法の知識が無かつたら、殺られていた。瞬時に、屈みこむと、先ほどの頭の位置に地面から生えた剣が空を貫いた。

黒ローブの男の舌打ちが聞こえたが、次々と地面から現れる気配を察して、身体を捻る。三本の剣が次々とハルバードの足元から現れ、空を斬る。

その一本が手を掠め、ハルバードは冷汗を掻いた。

(錬金の魔法か！？なら！！)

錬金の魔法は、物質を自由自在に操れるという厄介な属性……だが、陣が複雑でどうしても組み上げるのに時間がかかるという弱点もある。

だから

「な！？」

再び足元から気配を感じたが、上手くギリギリで避けた後、すかさず黒ローブの男へ走りこむ。驚く黒ローブの男。近づかせないように、ハルバードに迎撃のための剣を複数生み出した。

だが、それも察知して瞬時に避ける体制をとり、隙間の中を掻い

潜って再び黒ローブの男の懐へ入り込もうとする。

「チイツ!!」

鴉の装飾がある杖を振り下ろすが、それを黒い剣で防ぎ、懐へ入り込むと・・・

チイン、という鈴のような音と共に、ナイフを抜く。魔法で鍛えられたナイフだが、頑丈以外は何も力は無い。・・・だが、異常なほど頑丈で、通常では砕けることは勿論、刃こぼれも通常ではありえないといわれたもの。

それを、黒ローブの男へと突き出した。

グズツと肉じゃないなにかが刺さる音が聞こえた。その瞬間、ハルバードは嫌な予感がした。すぐに離れようにも、ナイフが抜けずに一瞬戸惑った。だが、その一瞬が命取りだった。

目の前で、剣が現れた。・・・いや、剣の柄から切っ先へと徐々に生成されていく。

「残念だったな。俺は“錬金”の属性ではないんだよっ!」

黒いローブの男は、手を振り払う動作をする。目の前にあったその剣は、そのままハルバードの胸を貫いた。

悲鳴もあげられなかった。

無言で膝を突くハルバード。その顔は絶望ではなく、怒りに満ちていた。胸を抱えながら睨むハルバードを見て、にやりと笑う黒口

ローブの男。

「惜しかったな。だが、“従者”のほうがもっと上手く立ち回ったぞ？」

黒ローブの男に刺さっていた魔法のナイフが、ガラスが割れたような軽い音をたて、粉々に砕けた。本来砕けるはずが無い、魔法で鍛え上げられたナイフなのに、砕けた。その異様な様子に、ハルバードは怒りから徐々に恐怖に変わる。だが、それでもプライドが許さず、睨み続ける。

その様子を見て、面白いと思っただのか・・・さらに口元を歪ませて、ハルバードに近づいた。

そして、ハルバードを貫いていた剣を無理やり引き抜く。痛みで気を失いそうになったが、それでも睨み続けるハルバード。

「ま、“従者”のように苦しませる必要はないからな。すぐに楽にしてやるよ」

剣の切っ先を天に向ける。その黒ローブの男の仕草を見て、睨みながらも徐々に意識がなくなっていくハルバード。

(ここで・・・死ぬのか・・・?)

そう思うと、走馬灯のように何かが画像として頭に流れる。それは、今まで生きていた時代や風習ではなかった。

(なんだ・・・これ・・・?記憶をなくす前の記憶か?)

ハルバードは、5歳前の記憶は無い。この村が故郷といっても、実際は森で彷徨っているところを彼の親となる者に保護され、そのまま養子となった。

一瞬、それがよみがえったかと思った。

だが・・・

「・・・違う・・・」

今の年齢よりも高い、17〜18歳くらいの自分の人生が、断片的ではあるがそのまま記憶として流れてくるような感覚。

いや、今まで封じられていた記憶が、一気によみがえる感覚をハルバードは感じていた。

「これは・・・どういう・・・?」

「ああ?なんだ?」

彼を取り巻く雰囲気が一瞬変わり、警戒する黒ローブの男。異常なほど高く、黒い魔力がハルバードを包み込む。

じゅう、と何かが焼ける音と共に、ハルバードは胸の痛みが激しくなるのを感じた。

それは、傷が酷くなっているわけではない。傷が癒されて、感覚を徐々に取り戻しているということ。

「があっつはあ!」

闇の回復魔法にて、身体の傷を癒す。そして、今まで出来なかった呼吸をこの一瞬でしたため、肺が悲鳴を上げた。

肺が潰れそうな感覚を覚えながらも、ふらふらとしながらも立ち上がり……再び、剣を構えた。

「……お前、面白れえな！」

杖を構える黒ローブの男。それをハルバードはギツをにらむと、鞘の腹の部分に手をかける。力を振り絞り、鞘から剣を引き抜いた。

ぶちぶちぶち、と封印が引きちぎられる音が聞こえた。魔法や魔術ではなく、物理的に封印を破ったための音だ。

それを聞いて、黒ローブの男は一層警戒を強めた。通常、物理的に封印を破ける者など、“この世界の者”ならありえないのだ。

「……おめえ、何者だ？」

からん、と鞘が転がる音がした。ハルバードは鞘を投げ捨て、剣を構えている。

「すまんね、それは俺が聞きたい」

記憶が流れてきたのだが、それは断片的であってすべてではない。よくわからない記憶に振り回されながらも、力がなぜか湧き上がってくる感覚に、嫌な感じはしなかった。

剣はより一層、ハルバードの力を奪う。しかし、それ以上にハル

バードの力は凄まじかった。

「お遊びしている暇はなさそうだな・・・行くぞ！」

360度から出現する複数の剣。百本以上はある剣に囲まれながらも、黒ローブの男から目を離さず、睨み続けるハルバード。

そして、剣が動き出すと同時に、ハルバードは駆け出した。

Step 3 親友の頼み（後書き）

戦闘描写・・・難しい。

## Step・4 灰色の少年

「キシヤーツ！」

「ッ！」

急に現れたオークの足を光の剣で切り払い、倒れたところにトドメとして喉元を突き刺す。先ほどのエンカウントのせいで、徐々に体力と魔力を失っていくスフィア。

そして、自分がどこに向かっているのかもわかっていないこの状況では、精神的な疲労が凄まじかった。彼女は都会の人間であって、戦いのやり方は叩き覚えさせられたものの、森の中で迷ったときの対処法などまったく知らないのだ。

いつ、襲われるかわからない状況で、さらにどこへ向かえばいいのかわからない・・・それでも、歩みを止まれば敵に囲まれる。

だから、歩き続けなくてはいけなかった。

（・・・なんで、私歩いてるんだっけ？）

でも、彼女はすでに限界だった。信頼してきた人たちを、すべて失った。なのに、生きる意味なんてあるのだろうか。

そんな思考を、彼女の頭の中をぐるぐると巡った。

（・・・もういいかな。疲れたよ私・・・）

歩みをとめようと思ったとき、焦臭いなか鼻をついた。それは、様々なものが燃えたような臭いと、肉が焼けた臭い。

一瞬、吐き気を催したが、ここ数年まともに食べた覚えが無いため、吐くに吐けず胸焼けしそうになった。

そこから、自分の意思ではなく・・・体が勝手に動いた。目指す場所は、この臭いの原因。

歩いているとき、彼女は何かを考える余裕すらなかった。何故歩いているのかも、自分では気付いていない。だが、彼女を歩かせている原因は、彼女自身に下されていた命のせいだった。

彼女の今回の遠征の目的。一番の目的は“妖魔”の討伐だったが、それ以外でも近隣の村の護衛も含めていた。今まで討伐以外で動いたことは無かった。だから、今度こそ人の役に立てると思って、いつも以上に気を張っていた。

だが、それも守れなかった。それ以上に、大切なものを失ってばかりだった。

ふと、彼女は足を止める。彼女の視線の先には、激しく炎上している村があった。結構離れているにもかかわらず、熱風により火傷しそうになり、身を縮めて着ていたケープに隠れる。

(酷い・・・)

焦臭さはより一層酷くなるが、なにより酷く臭う肉の焼けた臭い。それに混じって、鉄の臭いもする。ここで何が行われたかは、一目

同然だった。

「い、いかなきゃ・・・」

何故そう思ったのかは、彼女自身もわかっていなかった。

燃え行く村に入ろうとしたが、入り口付近でとまる。目の前にある、黒い塊のせいだ。それは、自分より小さい大きさの塊。死体だということとは、すぐにわかった。

今までの彼女なら、目を背けて進むはずだった。だが、背けられなかった。

なぜなら、燃え残っている頭についている装飾品を目にしてしまったからだ。

花の装飾品。少し前に、彼女がつけていたもの。それを、とある少女に譲った。

「あ・・・ああああ!」

『お姉ちゃん・・・』

頭によぎるのは、討伐に向かう前によったこの村で、懐いてくれた少女。その少女にお世話になったため、お礼として贈った花飾り。都市によく売っている安物なのだが、この辺境では持っているものはほとんどいないはず。



・・・ふと、近くで真っ黒な影が近づいてくるのにスフィアは気付いた。それは、かなり深い闇の魔力を持つ者。一瞬、恐怖を覚えたが・・・それは、“悪”ではなくあくまで純粋な“闇”だということに気付き、安堵した。

気配の元に目を向けると、そこにいたのは灰色の髪の少年がいた。真っ黒な剣を抜き手で右手に携え、少女を真っ直ぐ見ていた。

その様子に、もしかしたら・・・と、スフィアは聞いてみることにした。

「・・・もしかして、死者の国の案内人ですか？」

そう聞くと、少年は一瞬だけ驚いた顔をする。だが、すぐにスッと微笑む少年。

「残念、ハズレ」

スフィアの額に手を置くと、ズンツと深い闇に覆われるような感覚に襲われた。一瞬抵抗しようと思ったが、それも悪意や害がまったく無いことに気付くと、身を任せるようにした。

すると、先ほどの疲れや傷・・・火傷の痕が、徐々に消え去っていることに、スフィアは驚いた。スフィアの知識では、闇の魔法は闇を物質に侵食して腐らせたり、精神的に弱らせることを得意とする。だから、回復させることは本来出来ないはずだった。

実際は、闇は物質を構成する魔力のひとつであり、闇を物質に侵食させることで変質させること。精神異常は闇を恐れる者達が多い

ための副産物であり、本当は幻を見せることが出来るのみ。光の幻術とは違って、対象にのみ幻を見せるというもの。そして灰色の少年は、物質を変質させる能力によって、彼女の身体を癒すことができた訳だ。

「安心して。君を守るよう、頼まれた者だよ」

傷を治し終えると、彼女に向かってやさしく微笑む少年。

なぜか、レクサに似た感覚を覚え・・・その安堵から、少女は今まで溜まった心身の疲労に急に襲われ、意識を失うように眠りに落ちてしまった。

## Step・5 金髪の少女

湧き上がる闇の力で、自身に迫る剣をなぎ払い、そのまま黒ロブの男に一閃。それを容易に回避され、ハルバードは舌打ちしながらも扱いきれない自身の魔力に戸惑った。

少し前は、初級の魔法くらいしか扱えなかったはずだが・・・今では、中級レベルなら自由自在に操れる。

(もしかしたら、この剣の力なのか?)

剣を握り締め。色々思考をめぐらせていたが・・・すぐにそれをやめて、黒ロブの男を睨む。

「お前、面白えな!」

黒ロブの男の声で、思い出す。そうだ、今は戦闘中だったと。

黒ロブの男は、手の平の上で炎を生成すると、なぎ払う動作をする。炎はそれに合わせて、大きく膨れ上がり、ハルバードを包み込んだ。

その一瞬手前で闇の魔力を身体に纏わせて防ぐ。熱風すら通さない闇の力に、黒ロブの男は少し顔をしかめたが、ハルバードも今の村を焼いた魔法だと思い、怒りがこみ上げてくる。

「その魔法で、村を焼いたのか?」

ハルバードが問う。すると、にやりと笑う黒ロブの男。

「なんだ、そんなこと気にしてたのか・・・いや、違っぜ？」

黒ローブの男は、今まで使っていた鴉の杖を放り、手を前に掲げる。そして、今までのどす黒い力とはまったく違う、聞き覚えのある呪文を唱える。

「・・・《我の名の下に姿を現せ 炎王の剣》レヴァンティン！」

その刹那、凄まじい光とともに熱に炙られ、気を失いそうになった。気がつけば、闇の魔力で身体を覆っているのに、身体の近くまで炎が迫ってきているのに驚いた。

そして、気付いた。あの炎は先ほどまで黒いローブの男が使っていた、邪悪な炎ではなく・・・世界を作ったと言われる“原始の炎”だということ。世界を作った聖なる炎に、ただの“闇”で対抗できるものではなく、徐々に聖なる炎は闇の魔力を削ぎ落とし、ハルバードの身体を焼く。

「・・・つぐう!?!?」

熱いではなく、体が徐々に融けてしまうような感覚に襲われ、嫌悪感よりもむしろ心地よさを感じてしまったことに、物凄く恐怖を感じた。

目一杯力を放出し、闇の力を放出させて抵抗する。徐々に押し返す力が強くなり、原始の炎を押し返すのに成功した。ハルバードの身体を包んでいた炎は弾けとび、傍では歓喜の声が上がる。

「すげえお前！ここまで防いだ奴は“従者”以外の人間ではお前

が初だ！」

勝手に喜ぶ黒ローブの男を無視して、自身の身体が無事かどうかを確かめる。所々焼けてはいるが、身体は思ったよりも無事なことに安堵した。村は今まで以上に焼け、もう人間が入れる状況ではなくなっていた。

黒ローブの男を見ると、右手には剣にも杖にも見える炎の塊を手に携えていた。ただ、その右手は焼け爛れ、骨が見えている部位もあり、痛々しかった。当の本人は平然としているが……。

「真の使用者でないヤツが扱った“炎王の剣”<sup>レヴァンティン</sup>だが、防ぐにはそれ相応の力が必要な筈。どんな力であれ、お前は防ぎきった！」

（あれだけの威力なのに、まだ力を出せるのか……！？）

目の前の、炎の固まりに見える剣は、徐々に本来の形に戻ってきた。柄の末端に大きな白い玉がつけられ、鍔が無くまっすぐ白い刃。陶芸品のような、美しい刃に目を奪われそうになるのを堪えて、黒ローブの男を睨む。

「お前っ！見込みあるぞ！俺のところにはこないか？最凶の魔法使いにしてやるっ！」

なにやら楽しそうに色々呟いているが、ハルバードの意思はひとつだった。

（あの危険な武器を、あの男の所有物のままにしては置けない！）

闇の魔力を身体に包み、突撃。気配も闇に紛れ込ませ、黒ローブの男がハルバードの突撃に気付くのは、すでに剣の間合いに入ってしまった時だった。

「うおっ!?!」

黒ローブの男が持つ炎の剣を右手ごと斬り払う。鮮血が体を染めるが、そのまま気にせず黒ローブの男を黒い剣にて貫く。

黒ローブの男は驚いた様子で、特に呻きも悲鳴もあげずハルバードを見ている。しかし、ハルバードから見れば少し喜んでいるように見えた。

(・・・だが、これで!)

黒ローブの男の手を蹴飛ばし、落ちている炎の剣を左手で拾って構える。異常なほどの魔力がハルバードから吸われていくが、そこはあまり気にしなかった。むしろ、二刀流はやったことが無いため、どこかぎこちない姿に、黒ローブの男は苦笑いをする。

「やれやれ・・・まあ、いつか」

左手でぱちんつと指を鳴らす。すると、いつの間にか鴉の杖が手に握られていて、右手がぐちゃりぐちゃりと音を立てながら生えていく。あまりにも気持ち悪いものをみたとハルバードは顔をしかめるが、すぐに警戒のために睨みつける。

「その剣は“貸してやる”。“絶対王の剣”<sup>カレットウルフ</sup>を扱えるなら、たぶんそれも扱えるだろ。呼ぶ呪文はすでに知っているよな？ 還すときは魔力を与えなければ勝手に消える」

手を振って、修行の一環だと呟く。その様子に、ハルバードは奇立ちを覚える。

「あと先に言っとく。今回は“俺が許した”から触れられたが・  
・今後は下手に他人の“神の祭具”に触れるなよ？ 本来なら身体が吹き飛ばさず。奪いたいなら、相手から譲る意思の下受け取るか、相手を殺すと“無所持者”の状態で死体の傍に現れる。それに魔力を食わせれば、お前なら“所持者”になれるだろ。他の奴は知らんがな」

「どうしてそんなこと教える!？」

剣を黒ローブの男に向けて、一閃。鴉の杖でそれを防ぐと、激しい鏝迫り合い。だが、余裕そうに黒ローブの男は、ハルバードに向けて口元を歪ませる。

「それは“お前が気に入った”からだよ!」

ガチンツと鏝迫り合いから弾かれると、鴉の杖を大きく振りかぶり、一閃。ぎりぎりですれを避けると、間合いを取るためにバツクステップをする。

「俺の名前は“ベルゼブル” 悪魔の一味なり……じゃあな!」

黒ローブの音紺声が聞こえたと思った瞬間、“存在”が消えた。隠れているわけではない。その場から消えうせたのだ。

空間の魔法で“転移”を使ったとしても、それなりに術を使う前置きがあるし、痕跡も残る。だが、今のは突然消えた。

「……逃げられた」

呆然と立ち尽くすハルバード。怒りと憎しみにより、身体がブルブルと震えた。

そして。

「次は必ず、“お前を殺す”！」

親友の仇である敵の名前を覚え、ハルバードは叫んだ。

やってみろ、とどこかで笑っているような気がして、ハルバードは少しだけ苛立った。

“レヴァンティン炎王の剣”に魔力を一切通さないようにすると、こちらも存在がなくなるように消えた。だが、あの悪魔が消えた時と違い、気配は自分の近くにあるので、名前を呼べばたぶん現れるだろうとハルバードは考えた。“自分を含めた、周囲を焦土にして”現れるのは厄介だが……それさえ何とかすれば、かなり使える武器だ。

(貸すということは……いつかとりに来るということか？とすれば、またアイツが来るかもしれない)

望むところだっ！と叫びたいが、正直あの悪魔“ベルゼブル”に

勝てる自信は、今は全く無い。どうすれば勝てるか、または自身が危機に扮する状況で現れたときはどう対処すべきか・・・そんな思いがハルバードの思考を支配する。

(・・・“神の祭具”)

“神の祭具”というのには、ハルバードは聞いたことがあった。というのも、全ておとぎ話。義母から聞いた話で、神がどこかの世界に落とした剣だと聞いている。全部で“67本”もの剣が神の国から紛失していて、それを巡って世界が滅んでいる場所もあるらしい。

おとぎ話として聞いていたため、全部の剣の名前を覚えてはいないが・・・“レヴァンティン炎王の剣”のことは印象的だから覚えていた。

その剣の一振りには、世界の幕を一瞬で終わらせる

びくりつと身体を震わせ、とんでもない物を手に入れてしまったと驚愕する。だが、もし使いこなせればあの悪魔に対抗する力のひとつになるかもしれない。

(とりあえずは“神の祭具”とやらを集めよう。そうすれば、いざという時に使えるかもしれない。それと・・・)

ハルバードは、黒い剣を眺めた。魔力を流すのをとめても、魔力を吸う力は衰えず・・・いまだに魔力を吸い続ける。これも、ベルゼブルが呟いていたことを当てはめれば、“カレトウルフ絶対王の剣”という“神の祭具”のひとつだ。詳しく知らないが、これも力を持つ剣なの

だろうとハルバードは考える。

(今の俺のやることは、“勇者”にこの剣を渡し、勇者を守ることに。それと“神の祭具”を集めること。勇者を見つげる前に、あと一つか二つは“神の祭具”が欲しいかな・・・)

燃える村から少し離れながら、自分がやらなくてはいけない使命を確認する。そこで、ふと違和感に気付いた。

村の入り口にある黒い塊の傍に、なにかがあること。

(なんだ・・・?)

黒い塊は、村に入る際にみた。大きさから、村にいる唯一の女の子。レーファという名の少女だということは、ハルバードはすでに村に入ったときに知っていた。小柄でいつもにこにこしていた女の子だが、父親が魔獣に殺されてから、伏せ気味だったことを覚えている。そんな彼女の死体の傍に、仰向けに眠るように倒れている影が見えたのだ。

(だれか・・・傍に誰がいる?)

燃え上がる炎の粉や強い光に反して出来た濃い影により、よく見えなかったが・・・それは、金髪の少女だということがすぐにわかった。

ハルバードは、先ほどよりも激しく炎上する村の熱風から身体を守るために、闇の魔力で身体を包み込み、徐々にその影に近づいていく。

近づいたことによりわかったのは、体格は華奢ですぐに折れてしまいそうな身体に、服装は少し装飾が施された黒と金のケープを羽織り、その下には綺麗な布で織られたワンピースを着ている。手には、うっすら消えかかっている光の剣。魔力で模られた剣は、結構レベルが高い魔法のはずだと、ハルバードは記憶していた。

あと二歩で少女に手が伸びるところまで近づくと、少女は怯えたような顔で一瞬だけハルバードを見た。だが、敵ではないと気付いた少女の顔は、すぐに安堵の色に戻り……

「……もしかして、死者の国の案内人ですか？」

鈴が鳴るような、とても心地よい声で彼女は呟いた。

ハルバードは一瞬だけ驚いたと同時に、少しだけ落ち込んだ。確かに、今の彼の服装は先ほどの戦闘でボロボロで、真っ黒な剣を抜き身で携えているのだから、仕方ないのだろうけど……

それよりも、一番に驚いたことがあった。彼女を見たことはある。レーファの命の恩人だ。レーファの母親が病気で伏せってしまい、薬草を一人でとりに行ったのだが……魔物に襲われて、怪我をしなければ。そこで助けてくれた騎士団の中に、確か彼女がいた。光の治療でレーファを治療してくれたのを見て“治療士”だと思ったが、レーファが「勇者さまっ！」と慕っていたのを思い出した。

前までは、ただ単純にレーファの中の“勇者”なのだろう……と解釈していたが、今のハルバードは感じていた。

生粋な光の魔力と共に、不思議な力を感じる。その不思議な力は、光と混ざって強くハルバードの心突き抜けた。その優しい光は、

闇の彼には眩しすぎて・・・優しい光にて、今まで心に溜まっていた怒りや憎しみ、悲しみなどの負の要素全てが、蒸発してしまいうだった。

その力を目の前で感じ取ったハルバードは、確信を持った。

・・・この少女こそが、勇者なのだ。

## Step・5 金髪の少女(後書き)

レヴァーティンについて

北欧神話に登場する剣。

“諸説ありますが”神界のとある場所に、炎の国がある。過酷な場所、神様でも行くことはできない場所。そこには炎の民が住んでいて、炎の国を統治する王“スルト”が持つのがレヴァーティンだ。

実は北欧神話の中で最強の武器であり、“ラグナロク”を起こせる武器である。

一応、形は“剣”とする説が多いが、他にも杖やら槍やら色々形があるらしい。炎だから、形すらないのかもしれないんだけど・・・

因みに、(この小説での扱いでは)この剣は非常に扱いが難しく、呼び出ただけで全てを焼き尽くす。そして使用者は、多大なる火傷を負ってしまう。真の使用者なら、“ラグナロク”をも起こせるのだが・・・それは、だいぶ後のお話。

レヴァーティン レヴァンティンにしたのは、なんか見栄えがいいからです。

## Step・6 闇の中での脱出劇

「軽っ！？ ちゃんと飯食ってるのかコイツ！？」

意識が無い少女を抱きかかえると、異常な軽さにハルバードは呟いた。

だが、そんな彼女に気を使っている暇は無く・・・ハルバードはすぐに燃えゆく故郷を後にした。

本当は、遺体を埋葬したい気持ちがあったが・・・今はそれどころではなかったのだ。

“記憶”が断片的によみがえった今、感覚も今までより遥かに鋭くなっている。そのため、身近にいる人や獣・・・気配が強い魔物や魔獣は、比較的簡単に読めてしまう。

今、あの村の近くには・・・およそ、100体以上の魔物が辺りを取り囲んでいる。それも、武器と鎧を装備したオークやゴブリンなどの妖魔だけではなく、悪魔が使役する使い魔・・・魔獣が大量にウロウロしていた。

魔獣は妖魔とは違い、独自の魔法を扱う。身体は魔法でコーティングされているためか、非常に強固で通常の剣では傷一つつかない。魔法の体性もあるが、唯一ダメージを与えられる方法で、大人数の魔法使いで取り囲み、少しずつダメージを与えるしかないといわれている。

ハルバードも、新米自警団員であることから、その知識はあった。そのため、特に気をつけていた存在だ。

今はあの悪魔との戦闘のために、かなりの体力と魔力を失い・・・おまけに、気を失っている少女を抱えている状態では、満身に戦うことだけではなく、逃げ切れる自身すらなかった。

(さて・・・どうしようか)

道から少し外れ、様子を見ながら徐々に妖魔たちの囲いから抜けようとする。だが、歩けば歩くほど妖魔の数は増えていき・・・その多さから、動くことも出来なくなってしまう。

(どこか・・・抜け道はないかな・・・?)

周りを見回しても、近くには隠れる場所は無かった。あるのは、曲がりくねった細い樹と、先日の雨で急流と化している川だ。

目の前には、すでに5体のオークが斧や槍を携え、重装備の鎧を着て迫りつつある。

けど) (・・・こうなったら、仕方がないな。この娘の体力が持てばいい)

息を思いっきり吸い込み、そして吐き出す。この動作にて、妖魔には確実に存在が知られた。威嚇した声とともに、わらわらと妖魔が集まってくる気配を、ハルバードは感じていた。

だが、見つかることはすでにどうでも良かった。

走る。目的は、川だ。あの川は、ハルバードの記憶では都市の近くまで流れているはず。村の人は船などで都市へ向かったことは無いが、先ほど地図で確認したから間違いは無い。あとは上手く流れに乗れば、たどり着けるだろう。

船など用意している暇は無かった。幸い、闇の属性だけだが・・・魔法に目覚めた。闇の力を上手く使えば、溺れ死ぬことは無いはずだろうと楽観視していた。

「はッ！」

少女を肩に抱えるように持ち直し、近づいてきた槍を持ったオークを斬り伏せる。川まであと一歩。一度オークたちをけん制に剣を空に一閃。一瞬だけオークたちが怯むと、その瞬間を狙って闇の魔力を少女ごと身体に纏わせて、川に飛び込んだ。

「ぷはっ！」

再び少女を後ろから抱きかかえる形で抱える。今は花の季節より少し早いため、本来なら水は非常に冷たいはずなのだが、闇の魔力のお陰で体温は奪われない。あとは、溺れなければこのままの勢いで流れて、都市の近くまでたどり着けるはずだった。

オークたちは、一瞬追いかけてようと川沿いでわたわたしている。だが、もう間に合わないとなると、遠ざかるハルバードたちに雄たけびを揚げている。

もうこれで大丈夫だと、ふうとため息をついて安堵する。だが、彼は一つ“間違い”を起こしていた。それは地図上だけでこの川に

流れることを決めたこと。

この川は反対際まで10メートルはあり、比較的大きめな川。船など上手く使えば、都市の付近に繋がる川なので色々と便利なはずだ。だが、今までそれを使ってこなかった。なぜか？

ハルバードは、流される速度が徐々に早くなっているのに気付いた。最初は、天候のせいかと思ったが・・・違った。それに気付いたときは、もう遅かった。

目の前で、川が途切れているのをみて、絶句。

「ちよっ！！まてまてまて！！！」

日頃から呪文を使っていれば、もしかしたら変わっていたかもしれない。だが、魔法の知識はあっても経験が足りなかった。素人魔法使いの彼は、何一つこの場で使える呪文を知識から取り出せなかった。

徐々に早くなっていく流れに、闇の魔力をより一層纏わせるくらいしか・・・何も出来なかった。そのまま彼らは、滝の入り口に飲まれていき・・・姿を消していった。

朝日の光を浴びて、スフィアが目を覚ましたのは、どこかの洞穴だった。洞穴といっても、大人三人から四人くらい入れれば目一杯になるくらいのも、小さなくぼみ程度のもの。多少奥まで続いてはいたが、身をかがめて入れるほどのスペースもない。

(ここは……どこだろ?)

入り口のすぐ傍で寝かされていたため、外の様子がすぐにわかった。近くに川があり、先日の雨のためか少し水が淀んでいた。洞穴の近くには、ロープで引つ掛けられた“男女の服が一式”干されていた。

(………ん?)

スフィアは、女性の服装に見覚えがあった。黒に金の装飾が施されたケープに、綺麗な布で作られている白と黒の冬用の長袖ワンピース。袖の部分に綺麗なボタンがついていたのだが……どこかに落ちてしまったようだ。白色が少し土色に染まっているが、明らかにそれは自分のものだというのがわかった。

では、自分は?

(………なにこれ?)

大きなはっぱの毛布に大きなはっぱのベット。結構な枚数のため、花の季節手前なのに寒さは感じなかった。だが、その下は……真っ裸。

スフィアの思考が、起きてからまだ時間が経ってなかったために追いつかなかった。なぜ自分が裸なのか、どうして自分はここで寝かされているのか。

(と、とりあえず服を着よっ！)

慌てて洞穴から這い出て、自分の服に駆け寄る。ちょっと土色に染まってしまったワンピースをみて落ち込んだが、今はそんなこと気にしてられなかった。

(ど、どうして湿ってるのよっ！？)

ぶつぶつとぶつける相手がない文句を呟き、ロープから服をはずそうとする。

だがその時、乱暴に草木を掻き分けるような物音が聞こえた。その音に警戒して、振り向いてしまったのが彼女の失敗だった。

目の前にいたのは、炎上している村で出会った灰色の髪の少年。彼もまたほぼ裸の状態で、腰に上衣の服を巻きつけて、一応大事なものを隠している。スフィアよりも大事にはならないが・・・自分が大変な状態のため、顔が真っ赤になる。

そんな彼女を見て、ずいっと歩み寄ってきて、少年は純粋な笑顔を見せた。そして、裸の彼女を気にもせず。

「よかった〜元気そうでっ！一時期凄く体温が下がったときがあったから、結構心配したんだよね」



「理不尽じゃね？」

「う、ごめん・・・」

湿ったワンピースを着て、焚き火の前で足を抱える形で座るスフィア。少年はというと、紅く晴らした頬をさすりながら、不機嫌そうに魚を焼いていた。

雨で濁った川でよく取れたなーと感心していると、スフィアが意識を失っている間に罾を仕掛けておいたと少年は教えてくれた。樹の蔓と針金で作った罾を複数作り、虫を捕まえて引っ掛ける。後は川に流しておけば、勝手につかまるらしい。彼に教えてもらったことは、都会の人間にとっては凄く新鮮な感じを受けた。

他にも、果物や野草、野菜などかき集めてくれたらしく、ここには大量の食料があった。いろいろ食べるよう少年は勧めた。「体重が軽すぎる！」と、微妙に母親っぽいことを言っている。

「そ、そういえば名前を聞いてなかったね。私の名前はスフィア。貴方は？」

「ハルバード。皆からハルって呼ばれているよ。ほい。焼けたよ」

焼けたのを確認し、魚を手渡す。紅い頬はすぐに通常の色に戻り、彼の機嫌もまた戻っていたことにスフィアは安堵した。

「んじゃあ、ハルって呼ぶね。なんか、こついつことに慣れている感じがするね」

焚き火やら、魚を捕まえる罾を指差すスフィア。「ああ」と相槌

を打って、ハルバードは魚を頬張る。

「これでも自警団の一員だからね。・・・ま、まだ新米だけど」

「自警団！？凄いな！“私と同年くらいなのに”」

自警団。妖魔や盗賊、山賊など村の脅威となる者たちから自分達で村を守るため、近隣の村と合同で作った組織。ハルバードが住んでいた村を含めて、十数もの村がこれに参加している。

自警団員になるには、それ相応の実力が必要なのである。

「・・・俺一応今年で12歳だけど、そんなに幼く見える？」

その一言で、スフィアの眉間に力が入る。

「・・・えっと、それどういう意味かな？私も今年で12歳なんだけどっ！」

「本当か！？てつきり10歳いってないくらいの娘だと・・・い！？」

ジト目で睨まれ、ハルバードは即座に「ごめん！」と謝る。その姿に、スフィアは少し笑ってしまった。

「まあいいよ。それよりも、あの燃えていた村の近くにいたってことは・・・あの村が故郷？」

うん、とハルバードは頷く。ハルバードが頷くと、先ほどの笑顔が徐々に申し訳なさそうな、泣きそうな顔になる。

「ごめんね・・・私がもう少ししっかりしていれば、あの村も燃えずに済んだのに・・・」

「ん？どづいこと？」

いまいち理解できてないハルバードは、ぼかんと口を開いた。

「私・・・“勇者”なの・・・」

「知ってる」

一瞬何を言われたかわからず呆然とするスフィアだったが、すぐに「えっ？えっ！？」と戸惑い始める。

「ついでに、騎士団と一緒に“辺境の村を妖魔から守る”ということも聞いてた。一応、自警団だからな。騎士団と合同で妖魔退治をするはずだったんだ。俺も戦ってたし・・・君だけのせいじゃないよ」

「でもっ！一隊を任された身なのにつ！」

「関係ないよ。そもそも君みたいな女の子一人がどう頑張っても結果は変わらなかったと思うよ？それに・・・」

薪を火の中に焼くと、一呼吸。

「そんなこといたら、戦って死んでいった人たちに申し訳ないと思わない？」

「・・・っ！」

目尻一杯に涙を溜めて、堪えているスフィア。ハルバードはまた一つ薪を焼べて、一言。

「まあ、君だけのせいじゃないから・・・あまり背負うなよ」

それからは、しばらく無言が続いた。スフィアは下を向きながら、肩を震わせ・・・色々な思考を巡らせる。今まで死んできた人の顔を思い浮かべながら、涙が頬を伝った。

ふと、ハルバードは周辺から妖魔の気配を感じた。

## Step 7 門までの道はまだ遠い

「スファイア、君ってどれだけ戦える？」

突然立ち上がったハルバードをみて、先ほどの泣き顔から一拭いすると、真剣な表情になる。もっとも、まだ目が潤っていたのだが……。

「前線で積極的につてのは無理だけど、足手まといにはならないくらいには……相手は？」

「たぶん、10〜20体以上は……いや、これは多分……」

ハルバードは話すのをやめてしまった。数え切れないほどの数を感じてしまったからだ。予想にして、百以上。それが自分達を困んでいる。

さらに悪いことに、先日使った川で逃げる方法は水系の妖魔で対処されてしまっている。おそらく、陸上で戦う以上に厳しいだろう。

「ごめん、くどいけど再度聞くな。剣と魔法はどのくらい？ 詳しくお願い」

「……剣術は一般の騎士見習いと同じくらいかな。よく近衛騎士に稽古してもらってるけど、極たまに勝てるくらい……。魔法は初級レベルはマスターしたけど、中級は少しだけ……。上級は“ルンソード魔法の剣”系の呪文くらいかな。属性は今のところまともに扱えるのが“光”だけ。少しだけなら“炎”もいけるかな。ハルはどう？」

「うん、それならまだ大丈夫そうか・・・俺は一応自警団で経験をつんでいたから、下級妖魔の3〜4匹は一片に対処できるくらいだね。魔法は“闇”で初級から中級まで一通りはね。上級は一個だけ知ってるけど、“無差別モノ”だから使えないかな。まあ、“辺境の魔法”だから時代遅れで、どれほど通用するかわからないけどね」

しかも、実践では使ったことないから、と付け加えるハルバード。若干、不安そうになるスフィアだが、彼が纏う強い魔力を感じて、その不安は一掃した。

お互いの自己紹介を終えて、すぐに装備を整え始めるスフィア。この辺りは訓練積んでるし、実戦経験も多いから大丈夫だろうとハルバードは思っていた。それよりも、まずは自分だ。

実はというと、過去の“従者”・・・勇者に付き添った旅の仲間  
に剣と魔法を教わり、その伝手で自警団に訓練生として入団。彼女  
ほどあまり“武装した相手の実戦経験”は多くは無い。“妖魔狩り”  
なら結構自身はあるのだが。

（“レヴァンティン炎王の剣”を上手く使えればこの場を凌げそうだけど・・・  
一緒にスフィアも黒焦げにしちやいそうだし・・・あ、忘れてた！）

「スフィア、ちょっといい？」

親友のキースに頼まれていたものを渡す。彼女は魔法の剣ルーンソードを扱うらしいけど、真の所有者ならもっていたほうが良いだろう。

「俺の親友に渡して欲しいって頼まれていたんだ」

「ハルの親友に？名前は？」

「“キース”っていうんだけど・・・知ってる？」

うん、と頷くスフィア。聞くと、幼い頃からの学友だという。現代の“従者候補”つてのに選ばれていたため、魔法学校の入学まで“過去の従者”の下で訓練を受けていたという。

「頼まれたってコトは・・・」

「うん、殺されて死んだ」

少しだけ瞳が揺らいだ。だが、すぐに目元を拭う。ハルバードは心配そうに顔を覗くが、無理やり作った顔で応えた。

「大丈夫、それよりも今の状況をなんとかしないと」

装備を整え終わったスフィア。すでに着替え終わっているハルバードから黒の剣を受け取るうとするが・・・

「っ！？なにこれ!？」

近づくだけで異常なほど魔力を吸われる感覚。差し出した手を引っ込めて、その剣をまじまじと見つめたが、あることに気付く。

「これ、お母さんの剣だ！なんでこんなことに・・・」

「お母さん？前の勇者のことだよ。どうしたの？」

「詳しい話は後です。君は持っても大丈夫なの？」

「・・・？ま、ガンガン魔力吸われてるけど・・・今のところ大丈夫かな」

不思議そうな顔をするスフィアに、首を傾げるハル。正直、ハルバードは今までそんなに魔力を持っていなかったのだが・・・記憶の欠片が蘇り、なぜか魔力が増えた。

「とりあえず・・・ごめん、私じゃ扱えない。今はハルが持つて」

「わかった。ここを切り抜けたら、再度渡すよ」

ハルバードとスフィアは、上手く隠れながらもなんとか囲いを突破する場所を探していた。

しかし、昨夜と同様・・・どうしても、警備が薄い箇所が見つからない。それどころか、動くたびに徐々に追いつめられている気がしていた。

実際は、焦りや緊張による“気のせい”なのだが。だが、だからといって焦って強行突破を出ようとするほど二人は無知でもなかった。

徐々にわかったこと。それはここに陣を張っている妖魔の種類だ。醜悪な顔の小人の“ゴブリン”や豚顔人間っぽい身体だが異臭を放つ不潔さの“オーク”などの妖魔が主要部隊として森の中に陣を張っている。川には半人半魚のマーマンなど水系の魔物が三又の槍を装備して川の警備をしているようだ。厄介なのが樹がたまに動いていることから・・・本来使役が難しい樹の妖魔“エント”や本来住処の樹木から離れないはずだが、異質化してしまったためにフラフラと動き回る精霊“ドリアド”も磯かに動き回っている。ハルバードが気付かなかつたら、真っ先に見つかっていただろう。

とりあえず、ハルバードは呟いた。「抜け道が見つからない！」

本当に強行突破してやろうと思っていたところをスファイアに窺められた。だが、スファイアも心身ともに限界が近いことがわかっていし、なんとかかしたいとハルバードは焦る。

「・・・少し薄暗いな。また雨でも降りそうかな」

乾季でもある雪の季節に、大雨は珍しかった。だが、同時に体力をかなり消耗する雨は厄介で・・・。

「でも、チャンスだ」

スファイアに作戦を話し、それをスファイアは応じてくれた。あとは決行のみだ。

チャンスをうかがう。出来れば、少し雨が降り・・・視界が悪くなってくれるとありがたかった。

そのハルバードの願いが通じたのか、微量ながら雨が降ってきた。近くでゴロゴロツと雷鳴が聞こえたので、大雨になるのも時間の問題だろうが。

「スファイア、いくよっ！・・・《魔力被覆》<sup>コージェンク</sup>」

闇の力を自身とスファイアに纏わせる。この魔法は彼がもつとも得意とする魔法で、ただ単純に魔力を物質に纏わせるだけ。だが、属性によってそれぞれの力を付加させることができる。闇の場合は、“影”に隠れること。他にも物質を変質させることも出来るのだが、今回は逃げるためのもの。

影に隠れるといっても、絶対に見つからないというわけではなく、  
・少しだけ見えにくくするだけなのだが。

だが、雨が降ってきたためにその少しも結構効力がある。流石に近くに行けば見つかってしまうが、少しはなれたところならオークだろうがゴブリンだろうがエントだろうが見つからないはずだ。

大通りが見えた。この道を真っ直ぐ進めば都市があるが、堂々と進むわけには行かないので少し外れたところで道のりに進んでいく道でない道を進むため、疲労がより一層溜まるが・・・文句は言っ  
てられなれなかった。

どうしても通れない道は、ハルバードが妖魔たちを切り伏せた。今の状態での光魔法は目立ちすぎるので使えない・・・おまけに、  
得物も“魔法の剣”<sup>ルーンソード</sup>なため今は戦力にならない。

申し訳なさそうな顔をしていたスファイアに、いざというときには  
任せたから、温存しておいてと声をかけておく。

そして、数刻ほど歩いていた頃だ。雨がより一層酷くなる中、森が大きく空けて、そこに聳え立つ大きな城砦に囲まれた都市が見えてきた。

### 要塞都市ベルネーゼ

ガル・スフェイル王国東部の中心で、今まで幾度と無く戦争の舞台となった都市。

人間だけではなく、武装した妖魔や魔獣、聖獣を従えた天使達をも退けたこともある堅牢な都市だ。

戦の経験が王国随一の都市であり、剣術の学び舎や魔法学校、騎士養成所などが盛んで、そこを卒業した学生や門下生、訓練生はスカウトを受けて王国の軍団や貴族の私兵に入る。

勿論、冒険者組合や傭兵組合も盛んであり、独立する者も多い。しかし商人組合などは支部があるのだが、他の都市に比べるとそこまで栄えてはいないのだが……。

ハルバードも自警団の仕事で一度だけ来た事があるのだが、その大きく堅牢な城壁に少しだけ見ほれてしまった。

だが、そんなことをしている暇でもないので、すぐに壁門へ進もうと思ったが……

「キシャーアッ！」

「っ!?!」

ふと飛び出してきたのは、先ほどの豚の顔を持つ妖魔……オー

くだ。

三匹がそれぞれ剣、槍、戦斧を所持し、威嚇をしながら不恰好に構える。

ハルバードも黒い剣を鞘から抜き、いつでも応戦できるよう警戒する。

「スファイア！」

その一声でわかったのか、詠唱を始める。見つかってしまったから、光魔法を使わない理由は無くなった。

「……《原始の光よ、邪悪なる存在を打ち滅ぼす聖なる剣を作りたまえ》っ！」

詠唱の途中で切りかかってきた剣のオークを斬り伏せ、ついでに槍を持っているオークを叩き斬る。

「《ライトソード光の剣》っ！！！」

斧のオークを切り伏せ、新たに現れた五体の妖魔に対抗しようとしたとき、眩い光がスファイアの手から発せられた。光が若干収まったと思うと、その手にはブロードソードのような形の剣が現れる。

「はっ！」

ハルバードを囲んでいた妖魔のうち二体を一閃。怯んだ隙に、すばやく足元から剣にて掬い上げると、少し浮いていたオークの身体を思いっきり叩ききった。

その隙にハルバードはオークが装着している粗悪な鎧の隙間から剣を突き、オークの呻き声をあげる中そのまま投げた。二体が巻き込まれて、動けなくなっているところにまた再度二対の妖魔が現れる。

「逃げるぞ！」

その声を聞いて、スフィアは頷いて駆け出した。

要塞都市ベルネーゼの門は、まだまだ遠い。

## Step・8 非常識

門へ走る二人の目の前に現れたのは、六対のオークとゴブリンの部隊。それぞれが槍や剣、弓を構えて、突進。

「シッ！」

ハルバードは一閃にて目の前のオークの頭を切り落とすと、そのままの勢いで突っ込んでいく。スフィアもそれに続く形で二体のオークの足元を切り裂く。

もう一体、ゴブリンが剣と盾を構えて突進してきたが、ゴブリンを屠るとハルバードの頬を何かが掠めた。

何かが飛んできた方向を見ると、弓を構えているオークがいる。

「《原始の光よ・・・邪悪なる存在を聖なる光にて討ち払え》」

剣を弓を持つオークに向け、呪文を唱える。オークも、矢弦を引いて弓を構える。その間に、ハルバードはもう一体オークを頭から縦にぶった切った。

「ライト・アロー  
《光の矢》」

双方が同時に発射。スフィアが放った魔法は光の速さで進むが、至近距離での弓も結構な速度がある。

なので、そのまま二人で戦えば同士討ちに近かった。

(あ、しまっ!?)

スフィアが気付いたときには、一つの影が飛び出していた。ハルバードが矢を上手い具合に剣にて吹き飛ばす。少し息が乱れながらも、スフィアをギツと睨みつける。

「馬鹿!少しは考えろ!」

「ご、ごめん!」

残りの妖魔もすばやく斬り伏せる。スフィアも再び魔法にてハルバードの援護を行い、なんとかその場を切り抜け、また走り出した。

追手はまだ後ろで30〜50もの大群が迫ってきている。自身の周りにも妖魔の気配があり、総勢100体はいるだろう。

その大群で襲われたら……いくら二人でも必死確定。

二人は走る。あと少し……もうあと2〜3歩で森が開け、目的の門へとたどり着く。

(助かった……?)

スフィアは少しだけ、安堵と共に緊張感が抜けた。だが

「スフィア!」

その声ではつと気付いた。森の茂みの奥で見えにくいのが、3体の妖魔が弓を構えている。

スフィアが気付いたときには遅かった。少し離れたといっても10〜20mくらい。結構な近距離でもあるため、

「ぐッ!？」

矢が発射され、矢上に迫ってくるのを感じて咄嗟に目を瞑り、身構える。

だが、衝撃は来ない。痛みも感じないことに、すぐに目を開ける。そこには、自分より少し体格がいいだけで、小柄な少年が目の前にいた。

剣で矢を叩き落としていたため、急所は免れたようだが・・・右の足・・・太もも辺りに、一本。矢が生えているように刺さっていた。

「ハルッ!？」

「チッ・・・スフィア、先に行け!」

無理やり矢を抜き、大量に血が流れる。ナイフに使っていたベルトをはずし、自分の右足の付け根を縛る。苦痛に歪ませた顔を迫りつつある敵に向けると、剣を構えた。

「ハ、ハルッ!？」

「この足じゃ逃げられない。だけど都市はもう目の前だ。何かしらの騎士団がいるだろうか、助けを呼んできてくれ!」

「で、でも……」

「いいから！早くしないと間に合わなくなる！」

それを聞いて、少しの間迷いがあつたが、ハルバートの目を見てスフィアは頷いた。今までは自分を真つ先に逃がして死んでいくような状況ばかりだったが、今回は違う。二人とも助かる術なのだ。自身にそう言い聞かせて、門へと走る。

「絶対、死なないですよ！」

走る間際に素晴らしい残し、ハルバートから視線を切った。

「……さてと」

黒の剣を鞘に戻し、足を押さえながら、闇の力で徐々に回復させる。徐々にとっても、通常ではありえないスピードで。

実際、少し時間を稼げばハルバートも逃げれた。それをしなかったのは、彼が取った策は“二人とも助かる”だけではなく……“目の前の敵を殲滅させる”ことでもあつた。

「あまり使いたくなかつたけど……これほどの数が都市にそのまま流れたら大変なことになるしね」

ハルバートの周りにはいる数。およそ200体。走り回るうちに、ずいぶん増えた。それ以上に、奥にはもつと数があることを予想した。

スフィアと共に来た討伐体……王宮からきた精鋭の騎士達で、

その数は300人。その者達は昔の天魔戦争という大戦で活躍した猛者でもあり、彼らは武装した妖魔を一人で6〜7体はいともたやすく屠れる。それを考えたら、簡単な計算でも千以上はいるだろうと予想した。

これが一気に攻めてこられたら・・・落城までは行かないが、被害は軽くはすまないだろう。

なら、ここで一気に相手の士気をそぎ落とすまで。目の前にいるのは先遣隊の一部。それでも、少年一人に壊滅させてしまえば士気は多少なり影響するだろう。

「《炎の国の剣よ、王なる我の名の下に姿を現せ》」

呼び寄せの呪文を唱える。ハルバードを取り囲み、奇声を発するのは凡そ50体の獲物。その姿を見て、にやりと笑う。

コーティング

魔力被覆にて自身の原始の炎の耐性を上げ、右手に魔力を流す。

そして、あの凶悪な剣の名を呼ぶ。

「《レヴァンティン炎王の剣》」

その瞬間、世界が真っ白になった。

スフィアは走った。今度こそ、死なせない・・・殺させないと。

門へたどり着く。本来は日頃から門は開放されているが、厳しそうな門番が通行する人たちをチェックする。だが、今日はなぜか硬く閉じられていて、門にいたのは門番ではなく……王国騎士団。旗には“迅”の刺繍が施されたもので、正式名称は“ダストデビル・ナイツ辻風騎士団”。

その騎士団は、スフィアは良く知っている。

先頭で指揮する体格がいい男。ガリウス・ソード・ブレイブ。王国騎士団“迅”の団長。小規模ながら、精鋭と名高いアルド王国の騎士。

スフィアの父親だ。

何年も見ていないが、すぐにわかった。少し疲れ気味なのか、顔色が少し悪い。

「お、お父さんっ！」

駆け寄ってく少女に、一瞬驚いた様子のガリウス。だが、すぐにそれはだれかわかると、馬から飛び降り、周りをお構いなく駆け寄ってその身体を抱く。

「スフィア……よく無事でいてくれた……」

二人とも、少しの間感傷に浸る。だが、すぐにそれど頃ではないと思出し、慌てた様子でガリウスに話す。

「お願い！向こうで私を助けてくれた男の子が妖魔と戦ってるの！足を怪我していて……早くしないと死んじゃう……！」

「規模は？妖魔の種類は？」

「ゴブリンとオークとか・・・武装した妖魔が50体以上！早くしないと・・・お願い！」

「わかった。アセロス！お前の隊でその少年を・・・」

その慌てたスフィアに落ち着けと窘め、隣にいた百人隊長に指示し、すぐに向かわせようとした。

そのときだった

カツと眩い光がその場を支配した。森の入り口で火柱が上がり、あちこちに火の手が上がる。

その炎を見て、スフィアも、騎士団も全く動けなかった。それは、あの炎が原始の炎である以外にも、最近“従者候補”の子供たちを殺しまわっている者が放つ炎でもあったからだ。

「ハ・・・ハル・・・」

ぺたんと腰が抜けるように座り込むスフィア。ガリウスも、その様子を見てどうしようかと迷っていた。

先ほどのスファイアが言っていた少年は、もう助からないだろう。“従者”を殺しまわっている者が放った炎のせいで焼かれ、死んでしまったと思っていた。

「アセロス、俺と共に現場を確認してきてくれ。チエーサとルイもだ。ベルツセはこのまま警備、カーセロナは上層部に報告してくれ。」

徐々に炎が治まり、それと同時にあちこちに火の手が上がっていた箇所も治まりつつあった。先ほどの炎の調査のために、それぞれ百人隊の隊長たちに指示。ガリウスは騎乗した。

「スファイア……お前も来るか？わかっていると思うが……」

期待はするなよ。無言の言葉がスファイアの胸に刺さり、自然と目に涙が溜まった。だが、それでも。

「行く……行くよ……」

目を背けてはダメだと思った。

ガリウスの前に乗り、先ほどハルバードと分かれた箇所までたどり着いた。だが、不思議なことに森は思ったよりも燃えていなかった。

なのに、先ほどから黒く燃え残っているモノをみて、先ほどの炎の勢いの凄まじさを物語っていた。

そして、ハルバードが先ほどいたである場所。そこには、50体以上の妖魔らしき死体が黒く燃えていた。

その中心に、以上にまで黒い塊を残して。

一瞬、誰もが燃えてしまった死体の一部かと思ったが・・・違った。それは、燃えカスではなく・・・純粹な闇の魔力。純度が非常に高く、触れば肉体が一瞬で腐り落ちると誰もが思っていた。一人を除いて・・・。

「これは・・・？」

「・・・もしかして・・・っ!!！」

その魔力の塊を抱きかかえるように手を入れるスフィア。その様子にガリウスはとめようと思ったが、遅かった。だが、不思議にもスフィアの身体は腐り落ちる様子は無かった。

「・・・っ!!！」

何か柔らかいものを掴み、引っ張り出す。そこには、ハルバードらしき姿が。

体中あちこち焼け爛れてしまい、誰か一瞬わからなかったが・・・残った服や腰に携えている剣を見てハルバードだと確信した。

「ハル・・・」

「これは・・・不味い、早く治療班を！」

「私がやるっ!!！」

治療専門の魔法使いを呼び出そうとしたが、スフィアがハルバードの治療に当たる。

都市で良く伝わる治療は、光の属性もしくは治癒の属性のみ。二つとも名は知れているが珍しい属性のため、基本的に数は少ない。

スフィアは光の魔法使いだったため・・・原始の炎で焼かれたハルバードの身体の治りは遅かった。

「なんでっ!？」

スフィアは驚く。だが、とにかく、専門の治療をしたほうがいいと判断したガリウスは、馬車を用意して、そのまま治療を施しながら病院に連れて行くことにする。

「ハル・・・」

焼け爛れた肉塊に心配そうに付き添うスフィアに、ガリウスはだいじょうぶだよと頭を撫でる。

「この都市の病院は優秀だ。必ず彼は良くなるはずだ」

その言葉に、スフィアは軽く頷いた。

その頃、ハルバードは夢を見ていた。

それは、記憶の断片。

アイスクリームといわれるおやつを自分の知らない……だが友達な者達と食べていたり、学校とよばれる施設でくだらない話をしていたり……。

そして、家に帰ると……今の自分と同じくらいの少女……いや、妹が笑顔で出迎えてくれる。

妹の名前は……星野瑠奈。

では……自分の名前は……？

「端琉……端琉！」

（だれかが……呼んでる？）

声が聞こえた。それは妹のモノでもなく、見知った友達のモノでもなく……

（だれだ……？）

そこで、ハルバードは目を覚ました。

身体は動かない。目も見えない。耳だけが生きていた。

傍には……すすり泣く声。……ともう一つ。いや、二つの声が聞こえた。

「手は尽くしましたが……たぶん、もう歩くことも見ることも……口を開くことも無理でしょう」

「そ、そんな……」

一つの声は全く知らない人のだ。薬品の臭いから、ここは病院でその人は病院の関係者だと推測した。

そしてもう一つの声は、ハルバードも知っている。スフィアだ。先ほどから震えそうな声で、医者とやり取りしている。

「なんとかならないのか？」

「無理ですね……目も根元からやられていますし、声帯も焼かれています。内臓系はなぜか無傷でそのお陰で生きていますので……もうまともな人生を送れないでしょう」

そしてもう一つ・・・これも全く知らないが、スフィアの近しい人だと推測する。スフィアの傍から声が聞こえたからだ。

しばらく、医者とのやり取りをしたあと、そのままスフィアを残して二人は出て行ってしまふ。この先の話をしようと、スフィアに配慮してだ。

「ハル・・・ごめんね、助けられなくて・・・」

スフィアが震える手でハルバードの手を掴む。その手になにかぽつぽつと液体がたれる感覚が伝わり、少し申し訳なくなる。

「・・・う、あーっ」

「ハルっ！気付いたの!？」

ハルバードはスフィアのほうへ手を伸ばす。目が見えていないはずなのにも思い、不思議に思いながらもスフィアは自然と今まで掴んでいた手を離して、その手を掴もうとする。だが

「えっ?」

「おー」

掴もうとする手を跳ね除け、スフィアを突き飛ばす。突然のハルバードの行動に、スフィアは呆然としていた。

近くに誰もいないことを意識を飛ばして確認した後、闇の魔力を体中に纏う。じわじわと治る感覚に、ムズ痒さを覚えるが、とりあえずガマン。

「えっ？えっ！？」

治るまではそこまで時間はかからない。矢傷を治したときと同じで、今回もそこまで時間はかからなかった。矢傷よりも大きく、全体的に焼けてしまったので少しだけ時間がかかったが・・・それでも、異常なその光景にスフィアは絶句する。

そして

「あーいーうーえーおーっ。おっし、声帯は異常なし」

身体を動かしたり、声を発したりして身体に異常が無いかテストする。その姿に目をぱちくりさせて、呆然と見ていた。

「えつと・・・ハル？」

「うん？ちよつとまってね・・・神経も大丈夫そうかな？内臓は無傷だからいいか。内臓とか脳はダメージ負ってたらやばいと思って障壁張ってたからね。うん、神経も内臓も大丈夫そう」

意味わからない独り言を一通り呟いて、改めてスフィアに身体を向ける。

「おまたせ。あ、おはようスフィア。大丈夫だった？怪我は無い？」

「えっ？あう？えっと？その・・・ええーっ！?!?!」

その絶叫を聞いて驚いたガリウスと医者が病室に飛んで入ってきたが・・・同じく絶叫したという。

先ほどまでほぼ丸焦げだった人間が、「よっ」と挨拶する姿は、  
礼儀も含めて非常識だった。

**S t e p ・ 8 非常識（後書き）**

ハルの名前、間違えてた^^；

直し。

## Step・9 大丈夫だよ

「しかし・・・大きくなったな、スフィア」

わしわしとガリウスはスフィアを撫でる。スフィアは目を細め、気持ちよさそうに身を父親に預けていた。

病室はハルバードの身体を検査するために追い出され、二人は病院のホールにいた。そこで、やっと6年ぶりにゆつくりと親子で話す機会が出来、今までの出来事などを話した。

今まで奪われた時間を、なんとか取り戻した気を二人は感じていた。だが、安易にそうも言ってられなかった。

王都の重臣が、スフィアが生きていることを知り、また再度兵を率いて出撃するよう指令が来ていたのだ。

今度は北部の最前線。東部は悪魔達の使役している妖魔が陣を張っているのに対して、北部は天界・・・天使達が使役している聖獣や変質した精霊、妖精が攻めてきている。さらに天使も戦列に参加しているため、激戦になることは必至。

(そんなところへ・・・娘を渡して溜まるかっ!!)

そこで考えるは、このまま国を捨てて二人で逃亡してしまうと思う。要塞都市ベルネーゼから南にあるウェンツ町に行けば、港がある。ガリウスのコネをフルで使えば、海外逃亡も不可能ではない。

だが、ガリウスは騎士団を預かる身。国はどうでもいいが、団員

達は家族のようなもの。簡単には捨てられなかった。

( どうすれば……どうすればいいっ!?!? )

「お、お父さん?」

怖い顔をしている父親を見て、少し怯えるように見つめるスフィア。

「あ……すまん」

身体に籠っていた力を抜き、小さな娘を抱きなおすがリウス。

そんな小さな身体を感じて、なにかを決心した。

「なあ……お前が望むなら、国を出てしまおうか……」

「……え?」

「何もかも捨ててさ、外国に行っちゃおうか。そこなら、お前のことを知っているやつもない。お前一人なら、俺の力だけでも守れる」

黙りこむスフィア。瞳が揺れ、長い時間迷う。そして、長い沈黙の後に口を開こうとしたとき……

「スフィア・ソード・ブレイブ部隊長はいるか!?!?」

低く威張ったような声が病院内に響く。現れたのは、肥満体系ではないが……恰幅の良い体に華美な装飾が施された杖を持ち、赤

に金の刺繍が施されているケープを羽織った中年男性。その後ろには、ガリウスの騎士団とはまた別の・・・王国騎士団の隊員が8人控えている。“龍”の印が入っている。

「・・・マールス宰相」

マールスという男を睨み、威嚇するように歯にギチギチと力を込める。その様子にマールスは片眉を吊り上げると、にやりと笑う。

「おお、ここにいましたか“勇者”殿。ダストデビル・ナイト“辻風騎士団”の団長もいましたか。ささ、勇者殿お迎えにきましたよ」

「娘を渡す気はない、さっさと帰れ！」

鬼気迫るガリウスのその表情に、マールスの後ろに控えていた騎士達は怯まなかった。マールス宰相直轄の“龍王騎士団”ローワン・ナイトは王国で一番大きい騎士団であり、実力も1〜2位を争うほどだ。億を越えるその騎士団は、王国でも主力の騎士団となっている。実力があるが、少数精鋭の“辻風騎士団”ダストデビル・ナイトでは政治的な力は弱い。

「ガリウス団長には聞いてもいないですし、用事も全くないですよ。精々辺境の村々をちゃんと守ってください」

そのため、辺境であるこの東部領に追いやられた身は、彼女を守る力は無い。

ガリウスはスフィアを見た。怯えるように。父親の後ろに隠れ、マントの裾を掴んでいる。10歳弱の少女をここまで追い込んだこの者は、スフィアを劣悪な辺境の騎士団へ無理やり入団させ、数年にわたり虐待・・・いや、拷問に近い訓練を受けさせた。

「ふん・・・まあいい。勇者殿、明日王都に出頭するように。もし出頭しない場合は・・・代わりの勇者に戦ってもらおう。そのときは、君の近しい人がなるかもしれないが・・・文句は言わないように」

そう脅し文句を最後に、踵を返して病院を後にする騎士団と宰相。

「・・・もう、近しい人なんか・・・お父さんくらいしかいないのに」

ぎゅっとマントの裾を握る手が強くなる。父親はその小さな少女の肩を、力強く抱きしめた。

「ん〜やっと検査が終わったか〜っ！」

「お疲れ様です。・・・本当に吃驚しますよ。あんなに焼け爛れた身体があの一瞬で治ってしまうなんて」

白の病人服を着て、伸びをするハルバード。その姿に半ば呆れたような顔をしながらも、赤い髪 of 綺麗な女性治療士は検査結果のメ

毛を取っていく。年齢は30歳後半。だが、20代にしか見えない美貌に、大人な雰囲気をちらちらと見せられ、ハルバードは少しやられてしまっていた。たぶん、マンガだったら目がハートになっているだろうと、自分でも意味のわからない例えが思考を巡る。

長い髪に白の治療士の制服。勲章が胸にいくつもついていることから、有名な治療士だってコトはハルバードは気付いていた。

「まー・・・ちよつと俺は魔力が多いただけけど、闇は物質を変質させる力がありますから。闇の属性を持っていれば誰でも出来ますよ」

「いや、その話なんだけど・・・確かに闇の属性には物質を変質させる能力があるけど、いくら魔力があっても君みたいに直せないんだよね」

「・・・へ？」

その話を聞いて、情けない声が出る。それもそのはず、彼はそういう風に教えられてきたから。過去に勇者と共にした“従者”といわれる者達。その中で、剣も魔法も王国最強と呼ばれた者から。

「肉体の性質を変質させて、回復しやすい身体に肉体を作り変える。確かに不可能ではないし、“旧魔法書”にはそんな回復魔法も確かに存在する。今じゃ昔みたいに心が純粋な人がいないから・・・危険すぎて、教えられてないけどね」

「出来るじゃないですか」

「いや、だからね・・・確かに回復ってことは出来るけど、君み

たいに回復・・・というよりか、“再生魔法”はたとえ治癒の属性を持っていても不可能なんだよ」

「へー・・・」

ハルバードは窓の外を見る。窓から見える木は葉っぱが落ちていて、まだ雪の季節だと思わせられる。

「あまり、興味なさそうだね」

ため息をついて、女性治療士は再び紙にペンを走らせる。治療の経過以外にも、研究の資料を書いているようにハルバードは見えた。

「それは？」

「ん？君についてのレポート。これでも私、“魔法学校”の教授だから。・・・でもまあ、たぶんこのレポートは提出せずに終わると思うけどね・・・結局、何もわかってないわけだし」

まあ、自分用にだよ、自分用。そう呟いて、治療士は席を立つ。

「勉強熱心ですね」

「人生とは勉強なの、覚えておきなさい若者よ。さき、スフィアちゃん達が待ってるわ。呼んでくるね」

ウインクを一つハルバードに送ると、病室を出ようとする・・・が、ドアノブを回し部屋を出ようとしたところで、前に進むのをためらった。

「……文句は言わないように」

半開きの状態でハルバードと女性治療士が覗くと、ガヤガヤと大勢で病院から出て行く騎士達が見えた。スフィア達を見ると、不安そうなの、それでいて相手に対しての怒りが、ひしひしと伝わってきた。

「どうしたん？」

「……なんでもないよ」

スフィアが今にも泣き出しそうなの、そんな弱々しい声で返事をする。ハルバードは首を傾げるが、なんとなく察しがついた。

「王都から？それとも所属している騎士団？」

「……王都から」

うつむきながら、返事をするスフィア。ふむ……と考え込むハルバード。その様子を見て、ガリウスは眉間が歪む。

「ハルバード君だったな……スフィアを助けてくれてありがとうな。だが、もう私達にかかわらないほうがいい。勇者と近い者として、有無を言わずに連れて行かれ、最前線に送られるぞ」

ガリウスのその言葉に、ハルバードは笑顔が無くなり、真剣な顔つきになる。

「……過去に、そんなことあったんですか？」

「一度だけあった。才能があつたために最前線に送られて、死に掛けて帰ってきた。その子はスフィアとは離れて暮らすようになってしまい・・・今ではどうなっているかわからんがな」

その話をしている最中、スフィアがどんどん俯いているのがわかった。一つため息をついて、スフィアの頭をつかみ、わしわしと撫でる。

「わっ!?!?」

「俺は大丈夫だよ」

くしゃくしゃになった髪を気にしながら、ハルバードを見つめるスフィア。にかつと笑顔で、ハルバードはスフィアの頭から手を離す。

「俺がめっちゃ強いつてこと知ってるだろ?簡単にはいなくならないよ」

「・・・うん」

よしよし、としばらく撫でているハルバードに、驚くガリウス。だが、少し安堵した表情を浮かべ、たまっていた力が抜けた。

(まったく・・・娘は人望に恵まれすぎてな)

しばらく二人のやり取りを見ていたが、ふとハルバードの検査を担当していた女性治療士が、ぷるぷると肩を揺らしていた。その身体には、明らかに怒りが溜まっていることがわかる。

「・・・こんな子供を、戦場に？・・・ゆるせない・・・！」

そういえば、とガリウスは思い出す。灰色の少年が全身火傷でこちらの病院に駆け込んできたときに、対応してくれた治療士でもある。原始の炎で焼かれたハルバードの身体は彼女の治療では何も効果がなかったのだが、それでも巷では有名な治療士だ。

「スフィアちゃんを匿う当てはあるのですか？」

「いや・・・外国に逃げるくらいしか考えがなくて、困っていたところだ」

「そうですか！なら、私にこの子を預けてくれませんか！？」

女性治療士は、力強く拳を握り、逆の手でハルバードに撫でられて猫状態だったスフィアを抱き寄せる。驚いたスフィアは、軽く悲鳴をあげ、ハルバードから玩具を取られて講義の視線を送るが、軽く無視。

「大丈夫です、悪いようにはしません！私、魔法学校の先生を務めています。その伝手でこの子を“私の親戚”ということで入学すれば、寮生活なので外部には滅多に見つからないし、魔法の勉強も出来る。それに、友達も出来るから一石三鳥です！」

「いや、でも・・・」

急に、今日初めてあつた者にそんなことを言われても困る。それを言おうとするが、彼女の説明はまだまだ続く。

「私が勤めている“魔法学校”は私立学校なので、王都も東都も

手出しはできませんし、しませんよ。校長は“冒険者組合”や“傭兵組合”などのマスターと繋がりがありませんし、賢者宮にも顔が利きますので、今戦争中の彼らは変なゴタゴタを作れないはずですよ。それに、昔から王様や重臣達のやり方が気に入らないと校長はいていたので、この話をすればきつと保護してくれるはずですよ」

「……すまないが、昔似たようなことを言っただけで娘を取り上げられた。信用できない」

スファイアが5〜6歳の頃だ。天界や魔界から狙われてるから、専用の施設で保護するといったガリウスの親友だと思っただけで信頼していた男。だが、気がつけば娘は戦場の最前線で戦わされていた。そのことを講義するも、辺境に追いやられ、さらに見張りとして常に他の王国騎士団の者が自分を見張り、ほぼ軟禁状態だった。

東都の門にいたのは、戦力が足りないという理由で前線に送られそうになったところでスファイアを見つけたということだ。まあ、前線は妖魔の大量進行のせいでボロボロに崩れ、東都の本軍は敗走してしまっただけだ。

「……そうですね、わかりました。なら、こうすればどうでしょう？」

腰に差していた業務用ナイフを手にし、ぱつぱつと長い髪を切り落とす。赤い髪はいくつかがゆらりと揺れ、地面に落ちる。手に残った髪にポケットから紙を取り出してまとめるようにひとくくりすると、そのまま手渡した。

「これだけあれば、もしこの子に何かあったとしても、呪術士に頼めば“私を殺すこと”はできるでしょう？」

につこりと笑う治療士。その様子に、ガリウスは呆然としていた。呪術士にかかれれば確かにこれだけあれば“殺せる”。だが、それは違法行為で、それをすれば国を負われることになるだろう。

だが、“魔法使い同士”の約束を破ったときは、それが実行されても罪にはならない。約束の言葉を綴った紙なので、約束を守った時点で呪術士に頼まなくても魔力を通すだけで相当な苦痛が相手に与えられる。

だから、それを渡すときは命がけなのだ。

「・・・わかった。スフィアを頼む」

「はい、命の代えてでもこの子を守りますよ」

にこつと笑う女性に、ガリウスはため息をつきながらもスフィアを見る。そこには、少し迷いがあるような、揺れた目でガリウスを見ている。

「スフィアはそれで大丈夫か？外国に逃げるよりかは断然安全だ。魔法も学べるし、なにより友達が出来る。今までとは断然いい環境だぞ？」

「うん・・・でも・・・お父さんは？」

「私は大丈夫だ。一応、王国騎士団“迅”の団長だ。辺境には送られるが、下手なことはされないだろう。それよりも、ハルバード君だが・・・君は？」

スフィアの目が、ガリウスからハルバードに移る。ハルバードの一度スフィアを助けたことにより、今後巻き込まれる可能性がある。そのことを思い、スフィアは申し訳なさそうにハルバードを見る。

「ハルバード君・・・だっけ？君も帰るところが無ければうちに来る？」

一度、ハルバードはスフィアに視線を合わせる。揺れた目が、何かを期待しているような・・・そんな目をしていた気がした。

少しため息を吐いた後、微笑みながらこう返した。

「ぜひお願いします。俺もこの娘を守ると、ある人に約束しましたので」

ハルバードの頭には、徐々に蘇っている記憶の欠片に掻き回されながらも、キースのことを思い出し・・・強く、拳を握る。



Step・9 大丈夫だよ（後書き）

やっと・・・学校編か・・・

## Step・10 裏だらけの魔法学校へようこそ

学校は、とても古そうな城のようだった。都市の真ん中に聳え立つ高い建物に、高い城壁。城壁の中では、寮や訓練場、競技場などの色々な施設がある。女性治療士曰く、昔の王城をそのまま使用しているということだ。現在では、学校より北部にある施設が領主の城となっている。

その魔法学校の城にて、ハルバードとスフィアは先ほどの女性治療士につれられて、学校の廊下を歩く。

二人の格好は、魔法学校の生徒の制服であるブレザーに厚手のコート。スフィアは膝元くらいのスカートで、二人とも初々しさを感じる。黒の剣は今ではガリウスが預かっていて、後で寮に届けてくれるという。

ふと、とある扉の前に止まる。“検査室”と書かれた札を見える。その部屋は、入学前の生徒に“魔力測定”を行い、その生徒にあわせたクラス分けを行う。

魔力測定は、主の属性と魔力量、魔力純度を測るものだ。主な属性は、生まれながらもつ魔属性。必ずだれしも一つだけ属性があるという。魔力量はその名のとおり、扱える魔力の量。純度は魔力の質だ。魔力量が多いから優秀とは言わない。純度が高ければ、量が少なくても高い威力の魔法が出せるのだ。

検査室に入ろうとして、「ああ・・・忘れてました」と呟き、その動作をやめる。そして、二人に向きなおした。

「自己紹介もまだでしたね。アンネローゼ・フィロソファーとい  
います。教授の地位を持っていて、治療部門の教師であり研究者で  
もあります。なにか相談があれば遠慮なく言ってくださいね」

「あ、えつと・・・スフィア・ソード・ブレイブです。よろしく  
お願いします」

「ハルバードです。お世話になります」

アンネローゼの自己紹介に、慌てて二人も自己紹介。そして女性  
に向かつて一礼した。アンネローゼは二人に微笑み、これからのこ  
とについて説明する。

「今から魔力検査を行います。中にいるのは、この学校の校長・  
・ マリー・ルーン・ノクターン・フュンゴ”校長が待っています。  
彼女にはすでにあなた方の事情は知っていたいただいているので、気軽  
に彼女に相談してください。優しい方ですが、礼儀にはうるさいの  
で気をつけてくださいね」

それを聞いて、少し不安そうな顔をしたスフィア。礼儀など、ま  
たく教わっていない。ハルバードは自警団の訓練生なので、それ  
なりの礼儀は叩き込まれたので、軽く頷いただけで平然としている。

「では、中に入りましょう」

不安そうなスフィアを余所に、扉を開けるアンネローゼ。中には、  
優しそうな顔つきの女性が待っていた。年齢は60歳くらい。白髪・  
・年齢のためではなく、マリーが持つ属性の影響のための綺麗  
で、真っ白な髪。赤いローブに黒のドレス。手には白の杖を携え、  
ハルバードとスフィアを見るとにこやかに笑った。

「ようこそいらつしゃいました、お二人とも。この学校の校長、マリー・ルーンです」

「スフィアといいます。よろしく願います」

「边境の自警団所属のハルバードと申します。このたびは・・・」

「あ、長つたらしい話はいらないから」

丁寧に挨拶しようとしたところ、マリーはハルバードの声をさえぎった。話が違つぞと、アンネローゼの方へ睨むと

「そこまで丁寧にとはいってないよ」

苦笑しながら、微笑んでいた。

「さて、さつそく魔力測定を行いたいと思いますが・・・その前に、伝えなくてはいけないことがあります」

アンネローゼに魔力測定の準備を行わせながら、マリーは二人に話す。

「本来はそれによりクラス分けをするのですが・・・お二人は一緒になつたほうがこちらとしては守りやすいのと、あまり上位のク

ラスでも下位のクラスでも目立ちますので、Bクラスになりますが大丈夫ですか？」

「はい」

「大丈夫です」

二人の返事に軽く頷いて、マリーも頷く。そして、話を続ける。

「それと、二人は力を隠してくださいね。スフィアちゃんは確か・・・炎の属性も扱えるのですよね？」

「苦手ですが・・・少しだけ」

「なら主属性を炎にしておきます。髪の色も、少し赤色に染めましょう。光の呪文は、私とアンネが教えますので、ガマンしてください。それと・・・ハルバード君は？」

「俺は・・・闇だけです。他の属性は使ったこと無いです」

「なら、まだ魔法は使ったことが無いということにします。お互い、主属性は使わないことをお願いしますね」

「はい」

「わかりました」

二人は軽く頷く。マリーはその二人を見て、またも軽く頷くと、アンネローゼの準備が終わったことを確認し、二人に魔力検査の魔具の前に進むように指示する。球体が腰の高さまで浮遊し、淡い光

を放ちながらふわふわと浮いている。

魔具は、魔法で鍛えた品のことを指す。剣だったり、盾だったり、このように魔力を測る道具だったりする。

「まずはスフィアちゃん、あの球体に触れてください」

それに応じて、スフィアは魔力検査用の魔具に触れる。すると、パーツと強く光った後に、魔力などの結果が数値として魔具の表面に浮かび上がる。

「うん、魔力量は魔力石6万個分、主属性は光、純度は良……だけど、魔力に乱れがあるから……精神・体調面が激悪ね。その歳でそこまであるのだから、将来楽しみだけど……しばらくは、精神・体調面を整えるようにしないとね」

「……ハイ」

少しうつむき加減に答えるスフィア。体調などもわかると思っていなく、少し恥ずかしくなっている。

因みに、一般学生の魔力量は1歳ごとに100石ずつ増えている。なので、12歳では1千と2百個が通常。それと比べると、スフィアの魔力量が非常に高いことがわかる。

マリーは、検査結果を用紙に書き込んでいく。検査結果の用紙ともう一つ、提出用にスフィアの検査結果を偽造したものも書いている。そこには、主属性が炎、魔力量が千と八百個と書かれている。

「では、次にハルバード君。この球体に触ってください」

「はい」

スファイアが魔具から手を離し、少し離れる。それからハルバードは緊張した趣でゆっくりと触れた。

球体は淡く光り始め、すぐに検査結果が数値として浮かび上がる。

「・・・魔力量は魔力石5千個分、純度はかなり良いね・・・だけど、これは・・・」

呟くマリィ。アンネローゼも魔具を覗き、そこで驚きの表情を見せる。

「確かに一般より量が多いけど・・・思ったよりも少ないですね。しかも、君、主属性が闇じゃないってどういうこと？」

「うん？闇じゃないんですか？」

今まで自分の主属性を闇だと思っていたハルバード。だが、その言葉を聴いて驚いた。

「うん・・・なんだろ。今まで見たこと無い属性ね。あ、ハルバード君は闇禁止ってことは変わらないから・・・そうだね、風なんだろう？」

「そうですね、風をお願いします」

ハルバードを少し見て、マリィは満足そうに微笑む。

「では風で。あと、先に言っておきますが・・・あなた方は私とアンネが責任もってお預かりします。少し窮屈な面もありますが、あなた方を守るためと思つてそれは我慢してください。基本的には学校もしくは学校施設と寮内以外は外出禁止。どうしても必要な場合は変装をした上で事情を知っている先生もしくは学校専属の傭兵・冒険者に付き添ってもらいます。たまに学校行事で学校施設外部へ研修に行きますが、その時は安全性を確認して、影で先生方が見守っています。安全が確認されない場合は、あなた方は仮病にて不参加にさせていただきます。よろしいでしょうか？」

「はい」

二人の元気な返答。それに満足し、アンネローゼに二人を教室まで案内するよう支持する。

「その前に・・・《神聖なる光よ、闇の者から隠れる衣となれ。  
ミラージュベール  
幻想の衣》」

呪文を唱えると、スフィアの髪の色が若干赤く染まる。金も混じった赤なので、綺麗な赤色の髪に染まった。

「染め粉を渡しますので、後で染めてください。一度染めれば、貴女の魔力を使って髪は自動的に染まり続けます。解除するときは専用の洗浄液を使うか、貴女の魔力が一切無くなったら・・・この場合は、魔力切れになってしまいか貴女が死ぬかですが・・・魔力切れだけには気をつけてください」

その言葉にスフィアは少し動揺したのをみて「死ぬことは考えなくても良いくらいに、安全性は私達が保証しますので」とマリーは付け加える。

「では、多少なり不安でしょうが・・・面倒ごとは全て私どもが抱えるので、あなた方は6年間、この魔法学校“マジック・ウィズ”にて楽しいスクールライフを満喫してください。ではアンネ、二人は任せましたよ」

「お任せください、マリー校長。では二人とも、行きましょう」  
アンネローゼが扉を開け、スフィアと共に出て行く。

だが、ハルバードはその場に残る。少しだけマリーを睨み、ハルバードはマリーに問う。

「・・・なんでここまでしてくれるのですか？」

今までの笑顔が一切消えて、マリーはため息をつく。

「慈善事業・・・では納得してくれなさそうですね」

少し苦笑いをしながら、メモ用紙にすらすらと書き込み、ハルバードに渡した。

「今日の夜に、この場所で会いましょう。スフィアちゃんには黙って一人で来るように」

「・・・それは、やっぱり裏があるということでしょうかね？」

「今、この場では何もいえません……が、あなた方にとっては悪いことではないはずですよ。良いことでもないでしょうが」

それだけ聞くと、少し満足したのか……扉の前で一礼し、部屋を去る。

「ふむ……あの子には色々察しられているようですし、一働きしてもらいましょうかね……本当は単純に楽しんでもらいたいだけだったんだけど」

マリーはそう呟き、再びため息をついた。

「何はなしてたの？」

「いや、お礼を言ったただだよ」

それを聞いて、「そう……」と不満げなスフィア。多少なり、彼女なりに感じたのだろう。

アンネローゼはわかっているらしく、ハルバードを少しみため息。

しばらく歩いていると、ファースト・クラスBと書かれた小さな部屋。

「ここがBクラスのメインルームです。ここで一般科目の授業とホームルームを行います。朝は必ずここに来るように。では、あなた方を呼んだら部屋に入って自己紹介をしてくださいね。因みに、魔力量と属性・・・それと名前も、家名はこちらで変えさせていたかったです。なので、もし名前や属性を名乗るときは、ここに書いてあることに合わせてくださいね。では、また後で」

今までとは打って変わって、丁寧な口調になるアンネローゼ。学生に礼儀を覚えさせるため、自主的に丁寧に話すようにしているとハルバードは聞いた。

両扉の扉を開け、中に入っていく。その様子を見ていたスフィアとハルバードは目を合わせた。

「なんか・・・不安。なにか、また裏がありそうな気がして」

スフィアは、父親と離されたことを思い出す。そのときの状況を思い出し、不安が過った。

「まあ、裏はありそうだね。今はなんともいえないけど・・・」

真剣な表情のハルバード。そのハルバードの言葉を聞いて、さらに俯く。だが、続けてハルバードは言葉を発した。

「でも、俺らを救いたって言葉は嘘ではないと思う。それに・・・」

真剣な表情から、柔らかい表情に変わってスフィアを見つめる。

「スフィアのことは絶対、何があっても守るから大丈夫だよ」

スフィアは少し呆然とハルバードを見つめ、突如顔が真っ赤になる。

「なにそこでいちやいちやしてるのですか！呼んだのですよ！」

背後でアンネローゼが二人にチョップ。なぜか、少し怒っているような気がした二人だが、そのまま書類を流し読み、頭に叩き込んだ後に教室に入る。

内部は、長机が4列に並び、部屋の最奥には大き目の教卓と黒板が設置されている。窓はその教卓の上になく、日光はそこしか入ってこない。だが、魔法の水晶みたいなものがあちこちに設置されていて、光源には困らなそうだ。

二人は、アンネローゼに連れられて奥まで進むと、そこで反転し教室にいた学生達と対面する。

「家庭の事情があつて、遅れて入学してきた子達です。自己紹介をお願いします」

「えっと・・・スフィア・レルヴィです。属性は“炎”です。よろしくお願いします」

「ハルバード・ロードスターです。一応“風”の属性らしいけど、使ったこと無いんで魔法初心者です。よろしく。」

クラスの全員の視線がスフィアへ行く。もっばれているのかと、スフィアは少し不安になる。ハルバードは違う理由だと知っているが。

「では、席に座ってください。席は自由なので、どこでもどうぞ」

それを聞いて、二人は一番後ろの端に座った。しばらくすると、あまり興味がなくなったのか・・・視線がアンネローゼの方へ向く。

「では、これからホームルームを始めます」

アンネローゼは、毅然とした態度で今日の授業予定、科目の説明をしていく。その後、近くの事件についてのニュースを伝えたり、上級生の就職活動だったりを話し、ホームルームが終わった。

## Step・11 ルームメイト

今日の授業が終わり、スフィアはメインルームから出ようとしたときだ。

一人のクラスメイトの女の子が、スフィアに話しかける。

「スフィアちゃんだよね？私はレティル・レイク・ダーウエス。

一応中級貴族だけど、気軽にレティって呼んでね！」

栗色の長い髪に、体系は細めで背は小さく、小柄で可愛い女の子だ。

「あ、うん。よろしくね、レティ」

少し警戒しながら、レティルに微笑むスフィア。そんな様子とはしらず、レティルはスフィアに思いつきり笑顔で離し続ける。

「実はさ、まだスフィアちゃん“グループ”に入っていないでしょう？どう？私達のところに来ない？」

「グループ？」

「そ。名前は“蓮ロウタス・フワワーズの花”。まだ女の子8人なんだけど、どうかな？」

困惑の表情を浮かべるスフィアに、もしかして……とレティルはスフィアに問う。

「グループが、なんだかわかってない？」

「うん」

その言葉に、少し驚きの表情を浮かべるも、「ま、一般出だから仕方ないか」と呟く。

「グループってのは、所謂冒険者のパーティのことだよ。そのまま冒険者組合に登録して依頼をしてくれるところもあるし、学校の依頼を受けてるところもあるし、いっぱいメンバーを集めて組合の真似事しているところもあるよ。たまにグループをつぶすためのグループなんてのもいるけど、目をつけられない限りは大丈夫かな。因みに私達“ロウタス・フラワーズ蓮の花”は冒険者組合に登録して、依頼を受けて稼いでるんだよ」

「ん〜・・・それって学校側に許可貰ってるの？」

「学校？別に授業と試験をしつかり受けて、それなりに実績が出れば問題ないはずだよ。むしろ良い魔法の練習になるしね」

「へえ〜・・・でもごめんね、私学校の敷地内から出れないんだ」

「出れない・・・え？どういうこと!？」

それを聞かれて、戸惑うスフィア。まさか自身が勇者で、王都から隠れているといえないので・・・

「出れないのは、コイツ親から逃げてるからなんだよ」

突如、レティルの後ろからハルバードが声をかける。一瞬、レティルが驚いていたが、スフィアと同じく遅れてきたもう一人の学生ということがわかり、レティルは挨拶する。

「ハルバード君だよ。私はレティル。よろしくね」

「ハルバードだ。さっきのグループつての俺ら入れないんだ。俺もコイツも親から逃げてる身だから、ここにいることがバレたら大変なことになる・・・」

首を傾げるレティルだが、何か思い立ったんか面白そうな顔をした。

「もしかして、駆け落ち!？」

「「違います!！」」

二人が同時にハモる。その様子から、興味が無くなり、つまらなそうな顔になる。

「・・・ま、今度ご飯食べましょうね。グループの件、諦めないから!じゃ!」

そういつて、ぱたぱたと走り去り、スフィア達から離れていく。

「グループかあ・・・」

「どうした?入りたい?」

「いや、そうじゃないけど・・・ね」

そういつて、レティルの方を遠い目で見つめるスフィア。

(・・・ああ、友達になりたかったのか)

その様子に、ハルバードは気付いた。だが、すぐに首を振って思いを断ち切る。

「早く寮に行こつ！」

急ぎ気味に走るスフィアの後ろから、ゆっくりとハルバードは歩いてついていった。

(たぶん、キースの件や前線に送られた子のことを引き摺ってるんだろうな・・・)

寮はビルのように高い。6階建てで、ここまで高い建物は城以外では珍しい。昔は兵舎として使われていたらしいが、現在では寮と化している。

「ハルバード君の部屋は223号室。スフィアちゃんは201号室ね。これがルームキー。ルームメイトとは仲良くしてね？」

60歳くらいの女性・・・寮長から鍵を受け取り、そのついでにスフィアは黒の剣を受け取る。今は鞘に収まっているせいなのか、異常なまでの魔力吸引がないので、スフィアでももてる。鞘から剣

は抜けなくなっていました。

「そういえば、この剣のこと話して無かったね。今夜大丈夫？」

「あー・・・ごめん、今夜は約束があるから。明日でも大丈夫？」

「大丈夫だよ・・・約束って？」

「んゝさっそく先生に呼び出されてね」

「ふゝん・・・」

苦笑いしながら、「メンドクセー」と呟く。その様子に、別に気にもしていなかったようなので、少し安堵。

二階上がり、短い廊下を進む。そこから突き当たると分岐し、長い廊下にくくつもの高開きの扉が両壁に交互にある。

「んじゃ、俺はこつちだから。何かあったら呼んでくれ。また明日な！」

「おやすみ」

スフィアと別れ、ハルバードは自分の部屋へと進んでいく。

ハルバードが部屋に着くと、そこには一人の学生が部屋の中央のソファで本を読みながら寛いでいた。

黒い髪に黒い目。背は高めだが、体つきは少し細めだ。

「えっと・・・俺は今日から入学したハルバードだ。よろしく！」  
そういつて握手を求めたが、少し睨まれた後に無視される。

行き場の失った握手は、わきわきと動かして、ため息をついて引  
つ込めた。

部屋はリビングのような場所に、中央にはソファと背の低い机  
が置いてある。リビングの奥は個別の部屋となっていて、そこには  
“ハルバード”と“レイス”と書かれている札が貼ってあった。

（レイスっていうんだな。ま、ルームメイトだからそれなりに仲  
良くしなくちゃいけないのはわかってるけど・・・）

どうも、向こう側が仲良くするという雰囲気ではない。だが、こ  
の雰囲気はどこかで感じたことがあった。

（・・・なんか、スフィアと似たような雰囲気を感じるな）

友達を作ろうとしなかったり、あんまり話そうとしなかったり・  
・そんな雰囲気をレイスにも感じた。

（んまあ、時間をかけて仲良くすればいいだろ）

自分の荷物（といっても、たいした量ではないが）を自分の部屋  
に放り投げ、部屋を出る身支度をする。そのまま私服でもいいのだ  
が、まだ汚したくないので私服に着替え、ついでにガリウスから貰  
ったショートソードをローブに隠す。

「んじゃ、俺少し用事があるから部屋でるから」

そうレイスに言うが、無視されていることがわかってるので返事は聞かなかった。

「ハルバードが扉を勢いよくあけ、飛び出していった。」

(・・・あいつ・・・)

レイスは、本を強く閉じると、そのまま自身の個室へ引っ込んでいった。

一方、スフィアの方もルームメイトに悩まされていた。

「えつと・・・スフィアです。今日からよろしくお願いします」

リビングのソファでナイフを研いでいる少女。小柄だがスフィアと同じくらいの背で、薄緑の髪に碧眼の少女。細い身体だが、引き締まった身体をしていて、目つきは非常に悪い。

釣りあがった目でスフィアを睨むと、「ふん・・・」とだけ呟いてまたナイフを研ぐ。

「えつと・・・」

「あたし、アンタみたいな“自分が世界で一番不幸です”って顔しているヤツ、嫌いなのよ！」

驚くスフィアに、「フンッ」と鼻を鳴らして自室へと入っていく。

どうしようと悩むも、今日は何も出来ないのととりあえず部屋に籠り、ハルバードから受け取った剣を調べることにした。

（まあ・・・仲良くなならないほうが、いざって時に巻き込まなくていいよね）

そんなことを考えながら、剣を調べるのに没頭し、次第に夜が更けていくのだった。



## Step・12 神の祭具 セイクリッド・ツール

ハルバードが今いる場所は、訓練場。

真夜中の訓練場は、昼間とは違って静かだ。本来は夕方から学生が入らないように封鎖している

（呼び出しておいて・・・鍵が閉まってやがる・・・）

このまま待とうかと思ったが、訓練場の中では人の気配があるので針金であけてしまった。

扉を開けると、静かに入る。中は真っ暗で、ほとんど何も見えな  
い。

だが、人の気配がする方向へ進む。すると、とある一角に暗闇の  
中で弱い灯りが見える。

そこにいたのは、校長のマリー。弱い灯りは、白の杖の先端から  
光が発せられるものようだ。

「・・・来ましたか。貴方ならあのくらいの鍵は開けると思い  
ましたよ。鍵穴に傷はつけてませんか？」

「全くではないですが、かなり抑えたつもりですよ。本業ではな  
いので全くは無理ですが」

「それだけ出来れば上出来ですよ」

ハルバードの応えに、満足気味になるマリィ。

「人は来ないように闇の力で人払いしますか？」

「いや、必要ないです。ここには滅多に人はこないですよ・・・  
まあ、一応やっておきますか」

マリィは白い杖を構えて、とんつ、と地面をつつく。軽い空気の音が聞こえ、閉鎖した環境が出来た。

「貴方の手を煩わせることは無いですし、寧ろ常日頃から使用するの控えてください。癖になりますから」

「・・・わかりました」

不満そうなハルバードに、くすくすと笑うマリィ。「日頃から訓練ですよ」と呟くと、一層ハルバードは不満そうな顔をする。

「・・・さあ、本題に移りましょう・・・さて、貴方たちを匿う理由ですね？」

「そうです。裏があるかって聞いたとき、否定はしませんでしたよね」

「誰しも、自分たちに利益が無ければ手助けなんてしませんよ。慈善事業だけでは私立学校はやっていけませんから」

「・・・俺たちに、何を求めるのです？」

「本当に何も求めてませんでしたよ、あなた方が卒業するまでは。」

卒業後にこちらの事情を話し、手伝わしてもらうか貰わないかをあなた方に決めてもらうだけでした。まあ、貴方には隠し事は不利益に繋がりそうですし……今からでも仕事を任せようと思います」

ふうとため息をはくと、ハルバードはマリーを睨み、警戒する。スフィアに危険が及ぶものなのか、それを見極めるために。

「事情とはなんでしょう？俺たちに関係あるんですか？」

「表面上は関係ありませんが、深いところで関係あります。ちょっと長くなるのですが……私が“賢者マリー”と呼ばれ、度々王都に召集がかかっていたときです。“セリカ・コード”の名を知っていますか？」

「……いや、ないです」

「なら、最初から話しましょう。セリカ・コード。スフィアちゃんの母親であり、勇者です。私は彼女の師匠です」

「スフィアのお母さん!？」

ハルバードは驚いた。なんでこんなところでスフィアの母親の話が出るのか。

「はい、そうです。彼女は類稀なる魔法の才能と、この世に存在しない属性を持ち、その属性によって魔界の王・ルシファーを追い込み、絶対王カレトヴルフの剣にて深い傷を負わせて魔界に押し込めることに成功しました。ですが、その傷で亡くなってしまったのです」

「それが……スフィアとどう関係あるのですか？」

「気付きませんか？スフィアちゃんの属性は今は光のみですが・  
・母親の血を受け継ぎ、特殊な属性をもてる可能性があること。そ  
して、セリカちゃ・スフィアちゃんの母親は特殊な属性にのみ  
ルシファーと対峙できること」

「・・・その特殊な属性をスフィアが開花させれば、ルシファー  
を倒せると？」

「そうですね。その属性のことやどうして必要なかはまだ教えら  
れませんが・・・スフィアちゃんが母親の属性を受け継いでいて、  
その才能を開花させれば・・・もしかしたらルシファーを倒せるか  
もしれないのです。だからスフィアちゃんを王都から匿い、成長さ  
せてから・・・“冒険者”として仲間たちと共に旅立つてもらっ  
つもりです」

「もし・・・開花しなかったら？」

「そのときは仕方ありません・・・スフィアちゃんにはお願いし  
て、“こちら側”の人間になっていただきます。まあ、開花しな  
かった“勇者”はそこまで重要ではないので、外国に行って逃げるの  
もよし、傭兵や冒険者になるのもいいし・・・どこかに嫁いでも文  
句はありません」

なるほど・・・とハルバードは呟く。その様子を見て、マリーは  
そのまま続ける。

「私はセリカちゃんの・・・“過去の勇者”の“従者”の一人で  
す。かつて、ルシファーと対峙したときにも私はいましたよ」

「……てことは、今俺らを匿っているのは過去の勇者に加担した者達ってことか。理由としては、勇者の遺志を受け継ぎ、確実にルシファーを倒すためにスフィアの力が必要だと」

「簡単に言えばそうですね。ですが、敵は悪魔や魔物だけではないですし、天使もいます。天使や悪魔を倒すには、天使や悪魔に傷を与えられる“セイクリッド・ツール神の祭具”と、それを所持し、扱える者……私たちは“適合者”を探さなくては行けないのです。それが過去に“従者”と呼ばれ、“勇者”と共に戦ってきました」

「なるほどねえ……“従者候補”ってことは、神の祭具が扱える可能性がある者だったわけですね」

「そうですね。“従者候補”も“勇者”も優先的に保護・教育することが私たちの仕事なのですが……王都の圧力により勇者の居場所がわからず、さらに隠れていた従者候補の居場所もばれてしまい、ほとんどが死んでしまいました」

その言葉をきいて、やっと思い出す。ベルゼブルがキースを殺したときに呟いた言葉を。

なんだ、従者候補の知り合いか……

(キースも……その一人だったのか。だからあの黒の剣を持っていたわけか)

「私が集めていた“セイクリッド・ツール神の祭具”もいくつか紛失しました。アロンド愛誓の

イト

剣や西北神の剣、そして過去の勇者が持っていた絶対王の剣……」

「あ、絶対王の剣なら今スフィアが持ってます」

「えっ!？」

ハルバードは、手に入れた経緯を話す。キースのことや、バルセブルと戦ったこと。記憶の欠片については面倒なので省いたが、封印を引き千切ったこともしっかりと話す。

最初は驚いていたマリーだったが、ハルバードの話を聞いて安堵している様子だった。

「よかった……絶対王の剣は絶対に相手にわたってはいけない代物なのです。かつての勇者ですら完全には扱えなかった代物……悪魔の手に渡ってしまえば、どうなることやら……あ、先ほどの話によると、もう一つ神の祭具をもっていますよね?」

「はい。悪魔から奪ったやつはありますよ。名前は確か……」

### レヴァンティン 炎王の剣

くらくらと倒れこむマリー。

そう、それは決してこの世に在ってはいけない祭具。世界の幕を

降ろす“ラグナロク”を発生させる祭具の中で最強で最凶の剣。

「ん？どうしました？」

「い、いえ・・・なんでもありませんよ。その悪魔って言うのは、先ほど話した“ベルゼブル”という悪魔からですか？」

「はい。まあ、向こうにとっては“貸してやる”扱いなので、いつか取り返しに来ると思います。それまでに、“自分もあと二つか三つ”欲しいところですが」

「なるほど・・・それなら、学校にいる“従者候補”の一人と話してみてください。彼もまた“適合者”なので」

「わかりました。それと、神の祭具の“真まことの使用者”ってわかります？さっきの悪魔が呟いてた言葉なんですけど」

「・・・たぶん、神の祭具と契約した者のことだと思っています。神セイの祭具は強き者なら所持できますが、真に力を扱うとなると神の祭具セイクリッド・ツールと契約しなくてはいけません。それには神の祭具セイクリッド・ツールに認められないと出来ませんが、それが出来れば本来の力を扱えることになるでしょう。・・・貴方の場合、しないようお願いしたいですが・・・」

笑顔で、だが顔がかなり引きつっている。炎王の剣レウアンティンと契約されれば、それは世界の幕を降ろせる一人になってしまう。敵味方関係なく、それは阻止したいとマリーは思う。

「いや、さすがに呼び出すごとに周囲を焦土にする剣なんていませんよ。とにかく、炎王の剣以外の武器が欲しいのです。とりあえず、その“従者候補”とは誰です？」

「貴方のルームメイト」

少しの間を持って、ふうとため息をつくハルバード。苛立ちを見せた顔つきで、マリーを睨む。

「……見張りですか？」

「ま、“勇者”につく悪い虫だったら事故に見せかけて排除しなくちゃいけませんからね」

楽しそうに笑うマリーに、さらに苛立つハルバード。

「それに、貴方を狙う者が来ても対処できるようにってね。ま、そっちがメインだから不満そうな顔しないで頂戴」

マリーの言葉に、若干まだ不機嫌そうな態度のハルバード。だが、なんとか納得しようと落ち着かせて、質問を続ける。

「スフィアにも見張りを？まさかスフィアのルームメイトも“従者候補”ですか？」

「スフィアちゃんには見張りではなく、教師が隠れて護衛してるわ。何かあるとしたら貴方よりもスフィアちゃんが心配だからね。ルームメイトはフィーネという女の子だけど、残念ながら一般人。空いている部屋がそこしかなかったのよ」

「……巻き込んだらどうするのですか？」

「そうならないようにあちこちで動いているから大丈夫。それに、

あの子をルームメイトにした意図はちゃんとあるの……あの子、結構“面倒見”がいいから、スフィアちゃんも心を開いてくれるかなってね。それに魔法の技術以外にも剣やナイフに長けているから、卒業後の仲間になるかもってね」

少しだけ、マリーが憎たらしく感じた。関係ない者をわざわざ巻き込んで、なにかあったら責任はとれるのだろうか。

「それに、全くの無関係者でもないんですよ」

ハルバードの思考が顔に出ていたのか、マリーは後でそう付け足すように言う。それでも言いたいことがあったが、そんなことを言える立場ではないし、もっと色々考えてのことだろうと思って、その言葉は飲み込んだ。

「では、俺のルームメイトとは今度話して見ますよ。それと、仕事のことですが……どんな仕事を任せるのですか？」

「うん、簡単なことですよ。“従者候補”もしくはスフィアちゃんの中の“冒険の仲間”になれそうな力のあるものを選定、守護すること。何かあったときに我々教員が出来るだけ守りますが、それでも守りきれない場合があります。貴方は“最後の壁”になって欲しいのです」

「……要するに、勇者御一行の“人選”を任せると？俺に任せていいのですか？」

「勿論、最終的な人選は旅をする“勇者”本人が決めますが、使えそうな者がいたら逐一私に報告に来て欲しいのですよ。そして、その者が殺されないように守護する。私たちはその報告に基づいて

調査し、報告の通りなら優先的に訓練・教育を行います。……ス  
フィアちゃんが世界を救う道筋と人材を、我々で作っていくのです  
！」

手を力強く握り、途中から徐々に台詞に熱が籠る。とりあえず、  
悪い人ではないことがわかったことに安堵し、ハルバードは先ほど  
からの警戒を解いた。

「勿論、私の人選ではその中に“貴方”も組み込まれています。  
簡単には死なないでくださいね？」

「任せてください。しぶとさだけは“ゴブリン”並ですから。他  
に、何か言いたいことはありますか？」

「今日はここまでですかね……。あ、一つだけ忠告します。闇の  
力で隠しているつもりですが、ローブのせいではあればですよ」

マリーの指を刺すその場所。本来は何も無いはずだが、ローブに  
くつきり形が出てしまっている剣に、マリーは苦笑い。

「本来は学校内は所持禁止です……。が、貴方には守護がありま  
すし、貴方自身も狙われていますので特に何も言いません。ですが、  
上手く隠すように努力だけしといてください」

「すみません……。以後気をつけます」

ハルバードが素直に謝ると、マリーは満面の笑みを浮かべた。そ  
して、「おやすみなさい」と一言言うと、マリーは消えてしまった。

「あ、鍵はちゃんと閉めてくださいね」

言葉だけ、聞こえると今度は完全に気配が消える。

はぁ、とため息を吐いた後、しっかりと鍵をかけて訓練場を後にするのだった。

### Step・13 月夜に忍ぶ死神

訓練場から出て、真っ直ぐ続いた長い道を歩くと、そこは学校の中庭となる。中庭の真ん中に小さな丘と大きな桜の木があり、それを中心に対照的になるように手入れされた植木や花が並んでいた。

桜も、あと少しで満開になりそうだ。この国では、桜が満開になれば花の季節としているので、花の季節までもう秒読みだろう。

ふと、ハルバードは上を見た。先日の大雨から打って変わって、綺麗な満月の月が見える。ここは花見にはちょうどいいと思っていた。だが、なぜか“ガル・スフェイル王国”では桜の木は薄汚い色といわれているため、花見どころか観賞用でもない。この世界では“神の木”と呼ばれ、花や葉っぱには解熱・解毒作用・抑うつ作用さらには下痢にも聞くとという万能薬として有名だ。その花びらの汁を絞ったエキ스는喘息を抑える薬ともされている。

ハルバードも、昔は薄汚い色だと思った。だが、なぜか今見ると綺麗な、“薄桃色”と感じられた。それ以外にも、なにか大切なモノと係わり合いがあるような・・・そんな感覚を感じていた。もしかしたら、あの記憶の断片のせいなのかもしれないと、ハルバードは思った。

(・・・あの記憶に、俺の意思は殺されたりしないだろうか)

そんなことを頭が過ぎり、不安になった心に渴を入れるために近くにあった池の水で顔を洗おうとした。

そのときだった。

池の水に浮かんだのは、黒いローブにフードを深くかぶった髑髏の仮面をつけた者が、水面に移った。背はハルバードより高く、その手には大きな真つ黒の大鎌を持ち、それを深く振りかぶって……ハルバード目掛けて振りぬいた。

「うわっ!？」

「チツ……やっぱ避けたか。だが、逃げるのが下手だな」

明らかに、頭を狙って振ってきた大鎌を伏せて避ける。腰に差し置いて剣を空かさず抜いて、バックステップをして距離を置く。この際、池の中に入ってもお構いなしだと判断した。人工の池なので膝元くらいしか水量が無いが、それでも水の中というのは動きが鈍る。相手が遠距離で攻撃してきた場合は、避けられない可能性が高い。

それでも池の中に入ったのは、それだけ余裕が無かったからだ。

「お前は……っ!！」

「名乗ったほうが良いか？俺の二つ名は“虚無の死神”と呼ばれてるんだ。その名の通り、生憎この世のモノ……カネだろうが、オナナだろうが……人のイノチだろうが、俺にとっては価値が無いのさっ!！」

“虚無の死神”と名乗った者は、腰に差してあるホルスターから一枚のカードを取り出す。円形の陣を添う形で書かれた赤い文字が

光り輝くと、その紙は真っ赤に燃え上がる。

「魔方陣かぁ・・・はじめてみたよ」

そう小さく呟き、警戒を強めるハルバード。それを見て“虚無の死神”はにやりと微笑む。

「さて、先ほどは上手く避けたが・・・これは防げるかな？」  
ジャッジメント・フレイム  
断罪の炎”」

手にしていたカードを高く振り上げると、一気に振り下ろす。その動作により、池を真っ二つにする勢いで炎の柱がハルバードに向かってきた。

その炎の柱に向かって、ハルバードは剣を肩に背負う形で構える。

「であああつ！！」

掛け声とともに一気に振り下ろすと、その炎に宿っていた魔力が飛散し、炎も融ける様に消えた。

「なっ！？」

驚いて動けない状態が好機と思い、すぐさま池から飛び出して、剣を振るう。ハルバードの剣勢は簡単に大鎌によっていなされ、すぐに二人は距離を置いた。

「お前・・・魔法学校に入ったくせに、なんでただの金属性の剣を持ってるんだ？それでは、おまえ自身魔法が使えないではないか！」

「今の俺では、魔法は使えないんでね」

通常の金属は、魔力と相性がとても悪い。そのため、相手が金属製の鎧を着込んでいたり金属の剣をもっているだけで、半減してしまふ。自身が持つていければ、全く魔力を練れない。

「……お前、舐めてるのか？それともよっぽど魔力なしでもやっていける自信があるのか……」

「どっちでもないんだけどなあ……ま、色々事情があるんだよ」

ふと、学校の本殿でもある城を見上げる。「あ」と、一瞬何かを見つけてしまった。そして、「はあ……」とため息をつくその姿に、苛立ちを覚え、“虚無の死神”はハルバードに向かっていった。

「ほざけ！」

大量の魔方陣のカードをばら撒く。そこには黒の紙に白で書かれた文字が同時に光ったと思った瞬間に、“虚無の死神”は大鎌をハルバードに向かって一閃。

剣にて大鎌を受け止める。ギリギリと、小さく悲鳴を上げた剣に遠慮し、徐々に押されつつあるハルバード。

(……ガリウスのおっちゃん、安物の剣なんか渡しやがって！)

心の中で、スフィアの父に悪態をつく。そしているうちに、鏝迫り合いに強く弾き飛ばされ、ふらふらと足元が浮ついていた。

「これで終わりだ！世界を終わらせる闇」  
シエント・ワールド

一斉にカードが輝き始めたとおもつと、真っ暗な闇がハルバードを襲った。

「これならその剣で伏せきれないだろ！」

真っ暗な闇に包まれる中、ハルバードはそんな声を聞き取った。

「さて、どうしようか」

突破するのは簡単だ。闇の魔法禁止令が出されているので、下手に使うてしまうとマリー校長に怒られる。なので、なるべく闇の魔力以外で突破したい。

悠長に考えているが、闇は今にもハルバードの身体を飲み込もうとしている。魔力の質から、身体を腐らせる闇のマイナーな魔法のため、上手く闇の魔力にて弾けばバレずに済むかもしれない。ただ、城の窓から見ていた人物には、確実にバレル。

「いつそ、闇の属性を込めないで突破してしまうか！」

“闇”と考えず、ただ単純に“自身”の魔力を掌に込める。ある程度溜まったところで、掌を自分を包んでいる闇の魔力の核に向ける。

そして・・・

「吹っ飛べ!!」

魔力を一気に放出する。すると、薄桃色の光線が闇を貫き、天へと駆け上る。

「んなあ!?!」

“虚無の死神”は自分の魔法が破られるよりも、突き破った魔法に驚愕した。見たことも無い大量の魔力に呆気に取られてしまった魔力の行使者は、すぐに自らの剣を握りなおし、驚いて惚けている“虚無の死神”に剣を突きつける。

「ま、こんなもんだな」

そついいながら、少し満足そうに言うが・・・

『こんなものじゃありません!今すぐ校長室に来なさい!』

頭に大音量で響くその声に、「あ・・・やっぱり?」と呟き、肩を落とす。

その姿にため息を吐く“虚無の死神”。やっちまっただな、目線が痛くハルバードに突き刺さり、突きつけていた剣を力なく降ろす。

「わざとじゃないんだよ・・・」

「そんなこと俺に言われてもねえ・・・ま、言い訳はあの人にいつてくれ」

肩をぼん、と慰めるように叩く“虚無の死神”。

「ああ……メンドイなあ……」

“虚無の死神”の後ろをゆっくりとハルバードは歩き、城の中へ入っていった。

「んで？言い訳は？」

「……わざとじゃないんです」

「釈明の余地もないですね。貴方は気付いてましたよね？これはテストだって……なのにアレはなんですか！？こちらとしては隠密に対処していれば、多少闇を使っても目をつぶったのに……てか、あれをどう“支局”に報告しろというのです？後で“私が”報告書たんまり書かなくてはいけなくなりませんが、それについてどう思っています？」

「……すいません」

冷たく言い放つマリーに、ハルバードは下をうつむく。

“虚無の死神”はすでに退席し、二人だけになっている。

静かに怒るマリー。

「まあ、隠密性はともかく・・・貴方に力があることはわかりましたよ。先ほどの魔力が主属性ですね。“勇者”とはまた違った不思議な感じなのは分かりましたが・・・」

「自分でも分かりませんよ。ただ、“少しだけ”魔力を放出しただけなのに、あんなになるとは思わなかったんですから」

「・・・あれで少し？」

睨むようにハルバードを見る。見たことが無い属性の魔力を放出したり、闇の力で“身体の再生”を行ったり、“レヴァンティン炎王の剣”を所持していたり・・・規格外の人間だ。

そんなことを考えていると思っておらず、ハルバードは睨まれてまた身体を小さくする。そんな様子に、思わず笑ってしまいそうになるが、マリーは我慢した。

「まあ、いいです。貴方の属性のことはこちらで調べておきます。うかつに、そんな力は使わないでください・・・ですが、スフィアちゃんと同様、主属性の研究と闇魔法の勉強を行いますので、スフィアちゃんと授業後に校長室にいらっしやい」

「わかりました」

返事をし、逃げるように退出するハルバードを見て、「大人っぽく振舞ってたけど・・・やっぱり子供ねえ」と笑う校長の姿が、そこにはあった。

「よう」

「んだよ死神・・・いや、“レイス”」

自分の部屋に入ると、レイスがソファアーの上から声をかける。先ほどとは打って変わって、積極的に声をかけてくる様子だ。

ハルバードも向かい合う形で腰を下ろした。

「アンネローゼがつれて来た“従者候補”っていうのはお前だったとはな。安物の剣を持って出かけたときは、どこの暗殺者かと思っただぞ」

「生憎、これはもらい物なんでね。・・・あゝあ、早めに新しい剣を探さないとなあ・・・」

そういつて、ハルバードは腰の剣を抜き、刃を撫でる。罅が入ってボロボロだった剣の刃を見て、ため息。

「弁償は出来ないが・・・代わりに魔具を作ってやるのか？」

「マジで！？レイスって魔具士だったの！？」

魔具士。魔具を作る職人のことで、魔方の知識だけではなく、魔術の知識も必要となる。そのため、非常に珍しい存在だ。

近年、魔術を扱うものが減ってきてしまい・・・今では辺境の村

々しか知らないものだ。特に東部辺境の村々では、サンフェンケル大森林の奥には白エルフや黒エルフが住んでいるので、そこと親密的なお陰で魔術を知っている者が多い。そのため、魔具士は辺境出が多いので、東部だが都で魔具士がいるのは珍しいのだ。

「独学だけだな。だが、その辺の武器よりマシだろ。これはそれまでの間、持っておけ」

そういつて渡してきたのは、銀色のブレスレット。細めで、装飾があまりないものだが、かすかに魔力を感じた。

「魔力を“少しだけ”流せば、ショートソードになるぞ。あまり込めなくても意味ないし、込めすぎると壊れるから気をつける」

「おっけー。さんきゅーな」

受け取り、軽く魔力を流すと、細めの剣になる。長さは60cmくらいの、一般のショートソードより細め。どちらかといえば、“レイピア”に近い。

「さてと・・・俺の名前は“レイス・フェン・ローグ・ダークネス”。一応“従者候補”だったが、ある事件を手前に候補から外れ、王都の連中からマリー校長に匿ってもらっている。だからここじゃあ、“レイス・ラーティス”と名乗ってるから、そう呼んでくれ。主属性は“無”だ。よろしくな」

「改めて、ハルバードだ。よろしく」

「さて、どこから聞きたい？・・・といっても、お前のことだから粗方察しているだろうがな。お前、最初から俺だと気付いてただ

る」

「まあ、そうだけど・・・確信持ったのは城でマリーさんっぽい人影を見かけてからかな。一瞬だったから核心って言ってもまだ予想に過ぎなかったけどね。ま、マジで殺される一歩手前くらいまで闇は使わないようにしようとしたただけだが・・・裏目に出ちまったな」

そういつて、遠い目をしながら貰った剣をブレスレットに戻す。銀のブレスレットを手の中で転がし、観察した。所謂現実逃避。

「襲ってきた理由は、やっぱり実力を測るため？その割には、殺気が籠っていたような・・・」

「それもあるし、ただ単純に俺の訓練のためもある。・・・てのは建前で、“勇者”を守る“従者”になる可能性があるんだから、それなりの実力が無いとダメだろう？だから俺がやるってマリー校長にお願いしたんだ。あっさりOKされたが・・・ま、あのくらいで怪我して病院送りになるなら、むしろ昔の俺のように単なる足かせにしかないからな」

「ふん・・・そうか」

その割には、マジの殺気が籠っていたことは・・・あえて言及はしない。

「話を聞いてると、お前が“前線に送られた子供”か？」

「知ってるのか。たぶんそれが俺だ。ただ仲良く遊んでたり、話してるだけだったんだが・・・攫われて、気づいたら戦争のど真ん

中に放り込まれた。お前も同じような目にあう可能性もある。学校はスフィアを守ることが最優先で、むしろお前のコトなんかどうでもいいんだからな？」

威圧的に、ハルバードを睨むレイス。これで臆したのなら、早めに離れたほうがいいぞ。そんな言葉が聞こえた気がした。

「俺は大丈夫だ。約束があるからな」

再びキースのことを思い出す。それと同時に、頭の中になにかがよぎる。

・・・のことは任せてください。その代わりに、スフィアちゃんのことには、任せましたよ

突然、激しい頭痛に襲われた。記憶の逆流のような感覚に戸惑うが、瞼が重くなったので、ベットが恋しくなる。

「眠い・・・寝る」

「突然だな・・・大丈夫か？急に体調が悪そうに見えたが・・・」

「大丈夫だ。最近、寝る前はいつもこうだ・・・悪いけど、話はまた今度で」

「わかった。だが、学校ではあまり話しかけるなよ？俺は関係者以外は誰にも話さないことにしてるんだからな」

その言葉に、手で合図してすぐさま自室に籠る。ベットに倒れこむように寝ると、すぐに意識が夢の中に入っていつてしまった。

(今日は・・・どんな夢を見るのだろうか)

記憶の欠片に振り回されながらも、最近では夢で見る記憶を楽しんでいる。まるで、“映画”を見ているかのようだ。・・・最近では、懐かしく感じるようにもなったし、知らない言葉が頭をよぎるようになったので、末期かなとハルバードは不安になった。

**Step・13 月夜に忍ぶ死神（後書き）**

ハルバードの属性ですが、魔力の色が彼の属性のヒントです。

さらに言うならば、ナニカのとある一部分であり、重要な役割を持つ部位が入ります。

## Step・14 始まりの力

「お兄ちゃん！」

黒にちょこつとだけ赤が混じった髪色の女の子が、「お兄ちゃん」と呼ぶ男の子を追いかける。

“このときの”女の子の年齢は14歳くらいだと覚えている。一方、男の子のほうは確か16歳だ。

二人とも学生服を着ていて、今は通学途中だ。

「どうした？瑠奈」

「今日お母さん仕事で帰り遅いって。今日はどうか食べにいこう」  
「！」

二人がしばらく歩くと、二股の道路に出る。そこで一旦とまり、男の子は女の子に向く。

「了解。どこいく？」

「どこでもいい！学校から帰ってから相談しようよっ」

手を振り、「後でねー」と言うと男の子とは反対の通路を進む。

男の子は、ため息交じりで「元気だな」と呟くと、男の子は自らが通う学校へ進むのだった。

「おはよーっ」

「おはよう、レティ……どうしたのそれ？」

学校の教室でレティルは机目一杯に広げる羊皮紙と本。羊皮紙には“Request”と書かれた紙が山のように散らばっていた。

「依頼書だよ、冒険者ギルドの。“妖魔討伐”や“賞金首”はフアーストの学生じゃさすがに出来ないけど、“収集”なら出来るからね。安いし大変だし、野宿するときもあるけど、仲間うちでやるから結構楽しいよ？スフィアちゃんも“駆け落ちした彼”といっしょにこない？」

「いや……てか、駆け落ちじゃないって」

「んじゃ、どっという仲なの？」

それを聞かれて、かなり戸惑うスフィア。正直、命の恩人だが……それだけでは言葉は足りない気がした。

そんな様子を見て、レティルは「ふふふふっ。いいな、私も恋し

たいな」と呟いていた。誤解したままだとまずいとスフィアは感じたが、言い訳できる事態ではないので慌てて話題を切り替える。

「そっぴゃさ、レティルがグループのリーダーなの？ 依頼書を見てるってコトは、グループのまとめ役なんだよねっ？」

「いや、リーダーは別にいるよ。今度紹介するね？ 私は“治療士”兼“お財布役”だよ。戦闘ではあまり役に立たないけど、薬草や木の実の選別も得意だし、“光”の属性を持つてるから怪我とかを治療できるんだ。この依頼書の山はリーダーが選んだ依頼書で、その地域の特色や魔物を調べて、メモしてるんだよ。最終的にどれ選ぶか判断材料になるようにね」

「へえ・・・凄いな。グループの参謀だね！」

「参謀ってわけでもないけどね」

苦笑いしながら「ただの雑用係だよ」と言うと、また作業に戻る。

スフィアは少しうらやましそうになりながらも、後ろ髪を引かれつつ適当な席に座る。

ハルバードは、まだ来ていない。

「スフィアちゃんだね、隣良いかい？」

後ろから声が聞こえた。ぐいつと横に座られ、身体を寄せる。小さく悲鳴を上げたスフィアにさらに追い込むように近づく。その姿をスフィアが良く見ると、そこには金髪の少年がいた。翡翠や金剛石などのアクセサリーに豪華な装飾の金色の杖。綺麗な顔立ちで、

いかにも上級の貴族に見える。

「僕はレセント・ギル・ソード・アーキテクト・グレジャーって  
いうんだ。こう見えてもSクラスなんだよ。よろしくね」

「……よろしくおねがいします」

かなり萎縮して縮こまっているスフィア。そのまま、都の面白い  
スポットやアクセサリーの質がいいお店など、楽しそうに話すレセ  
ント。特に、安くていいお店などを紹介して、「今度一緒に行かな  
い？」とお誘いする。

「……これはまずいわ！」

なにやら女の子の扱いにやりなれたレセントを見て、丸め込まれ  
ているスフィアに危機感を持つレティル。メインルームを勢いよく  
飛び出したその姿は、クラスメイト全員が釘付けだった。

「いや、その……私、学校の施設外は出れないから……」

「少しだけなら大丈夫だよ。帆馬車で君の姿を見えなくするし、  
僕の家を精鋭騎士を護衛につけるから心配ない！」

おろおろしているスフィア。その姿を見ていたスフィアのルーム  
メイト“フィーネ”は、「フンツ」と鼻を鳴らす。レセントは強引  
に話をつけて「んじゃ、今日の夕方に行こうよ」とまで言っていま  
う。

そのときだった。

「ちょっと待ちなさいレセント！」

強引につれてきた灰色の髪の少年を引きつれ、スフィアの下に駆け寄ってくる。一瞬、スフィアには救世主に見えたが・・・

「この子は、この男の子と“駆け落ち中”なんだから！！手を出しちゃダメ！！」

思わぬ爆弾を投下され、クラス中の視線がスフィアとハルバードに痛いほど刺さり、「ぎゃああああ！！」とスフィアは真っ赤になつて教室を飛び出した。

「ふむ・・・君がスフィアちゃんと恋仲のハルバードくんだね？  
僕の名前はレセントだ。君とは“長い付き合い”になりそうだと思うが、よろしくね」

そういつて、ギツと睨み、教室を出て行ってしまった。

「・・・何が起こつてるの？」

ぼけつと、まだ状況が飲み込めないハルバードは、呆然と呟いたのだった。その様子に、「先は長そう・・・」とレティルはため息を吐いた。

授業が始まる鐘が鳴り、真つ赤の顔の状態でアンネローゼに保護されて帰ってきたスフィア。なにやら、クラスメイト全員が空気を読み、席は“ハルバードの隣”しか開いていない。

「~~~~っ!!!」

「??」

クラスメイトを睨みつつ、スフィアは席に座る。クラスメイトのみんなは生暖かい目で二人を見送った。

そんな事情とは知らず、アンネローゼはホームルームをはじめた。

「さて、皆さん知っているとありますが、10日後に“模擬戦”をすることになりました。ハルバード君とスフィアちゃんは“模擬戦”のこと知らないと思うから、簡単に説明しますね。模擬戦とは、全クラス合同でトーナメント形式で行う“決闘”を模した試合です。主に“決闘”の礼儀作法を教えると共に、正々堂々と戦う“騎士道”を培うために年に数回行います。基本は魔法戦ですが、魔具の持ち込みを一つだけ許可します。それ以外は禁止です」

続けて、アンネローゼはルールのお話を続ける。

「勝敗はお互い所持しているこの“ダメージ・ネックレス”を破壊すること。また、故意であつてもなくても相手を“怪我”させたら失格。悪質な場合は罰則もあります。・・・あとは基本的にフリーです。思う存分力を使ってください。説明はこれくらいですかね」

そつといい終わると、アンネローゼはそのまま今日の予定を話し続

ける。その合間に、ハルバードはスフィアの耳元でこっそりと話す。

「スフィア、ちょっといいか」

「っ!?!?!? な、なに?」

異常なほど驚き、ハルバードの反対側へと腰をずらす。隣から男子生徒が悲鳴を上げているのを見て、ハルバードはため息を吐いた。

「そんなに驚くことでもないだろうに……マリー校長が、授業が終わったら校長室に来てさ。魔法の特別講習をしてくれるってさ」

「あ……うんわかった」

顔を真っ赤にして、うつむき加減で頷いた。ホームルームでの話によると、訓練場で魔法の実技訓練があるので、ホームルーム後にそのまま訓練場へ向かうとのことだった。二人はホームルームで話を聞いて、その後に訓練場へと向うが、並んだ二人の後ろから生暖かい視線が向けられていることを知っているのは、スフィアだけだった。

「さて、今回は昨日の授業で習った初級魔法……魔法の矢を実践してみようと思います。あの的に向かって、詠唱して呪文を唱え、撃ってみてください」

マジック・アロー

アンネローゼが指を指しているその場所には、ダイヤ型に真ん中が赤く丸い印がついている板だ。魔法がかかっているらしく、不思議な感覚をスフィアは感じた。

「皆さん、的に向かって一列に並んでください。準備が出来たら合図しますので、その声にあわせて魔法を放ってください」

その声を聞いて、皆がみんな魔法の詠唱を始める。詠唱が終わり、クラス全員の魔力が高まり……

「では……放て”！」

アンネローゼの声と共に、ただ一人を除いて生徒全員が魔法を放った。

「……あり？」

風の詠唱を繋ぎ、呪文を唱えたが何もおきない。掌にたまった魔力が行き場を失い、ちよろちよると漏れ出している。

「……《束縛無き自由な風よ、行く手を阻む彼の者をその身で貫け》……《風の矢》」  
ウインド・アロー

詠唱するが、何もおきず……クスクスと笑う者や、哀れむような視線を感じたハルバード。

「ううむ……どうしようか……」

「一応、“風の属性”の才能があったから“風”にしたのです。頑張れば使えますよ」

「そうですね……うん、“闇”なら全部一片に射貫ける自身がありますか……」

「馬鹿いつてないで、“風の属性”の勉強に励みなさい……ん？」

とある女子学生に目を向けた。ほかの学生も同じく、その女子学生に視線が向いている。薄緑の髪に碧眼の少女。確か、“フィーネ”という学生だと、ハルバードは思い出す。

「ウインド・アロー《風の矢》」

詠唱破棄で呪文を唱え、風の塊が的を貫く。ある程度の防御魔法が施されたはずだが、貫くことは“フォース・ナンバー四年目の学生”の特に優秀な者でなくては貫けないはずだった。

その視線に気付き、鼻を鳴らしてその視線を一瞥。自動修復しているのに何発も当てることにより、的は完全に砕けた。

「……《神聖なる光よ、邪悪なる者を打ち滅ぼす矢となり彼の者を貫け》……《光の矢》」

その隣では、的を的確に射貫く栗色の髪の少女……レティルの姿があった。フィーネに笑顔を向けると、フィーネは軽く頷きながら色々と話しているところを見ると、どうやら仲が良いらしい。

「あの二人は優秀ですよ。このBクラスにいるのが勿体無いくらいにね。属性が“単一”のみだからここにいるだけで、ほかの子とは才能が違いますよ！」

「へえ……ん？」

見知った魔力を感じて、そちらへ目を向ける。そこには、赤めの金髪に細い身体。真剣に詠唱をしながら、的に向かって掌を向ける。

「……《原始の炎よ、闇なる存在を焼き尽くす矢となりて》……  
ホーリ・ダーツ  
・《聖炎の弓矢》」

シュバツと風を切って勢い良く飛び出てきたのは、学生が放つレベルではない魔力量が籠った、細い炎の矢。その炎は、どこかで見たような……と頭の中の記憶を掘り起こす。

そして、詠唱で“原始”とスファイアがつかないでいたことを思い出し、顔が青くなるハルバード。

原始の炎。あの厄介モノと同じ属性の炎だ。  
レヴァンティン

「あ、あれはやばいぞ!？」

「へ？」

アンネローゼの情けない返事と同時に、爆音が学校内……いや、都市内に響き渡った。的に当たった瞬間、炎は5mくらいに立ち上

り、強く光ったと思った瞬間にはじけた。的には“防御魔法”と“自動回復”が備わっているため、滅多なことが無い限り“魔方阵”ごと破壊されることは無い。だが、一瞬で“蒸発”させてしまったその炎は、どう見ても普通の魔法ではなかった。

「あ、あれ？いつもはもっと弱いのに・・・」

スフィアを睨むアンネローゼに、ハルバードは頭を抱える。今の一発で、かなり目立ってしまったことは必須だろう。

呆然としている学生たちに、アンネローゼは「きよ、今日の實習はここまで！メインルームに全員戻りなさい！」と大声で指示し、なんとか気を取り戻した学生たちはぞろぞろとメインルームに戻っていった。

そのときに、フィーネはスフィアのことを睨むようにみていたことは、ハルバードは気付いたが。

「スフィアちゃん、“炎”も禁止ね」

「えっ!?!」

ま、当然の結果だろうとハルバードは思っていた。



## Step・15 それぞれの放課後

「はじまり原始の属性？」

スフィアが首をかしげると、マリーは頷く。

「そうです。はじまり“原始の魔力”とは神々が世界が作った時の力と同等の力をもつ属性です」

放課後、補習という名目で室内訓練場にマリー、スフィア、ハルバード、アンネローゼの四人が来ていた。ハルバードとアンネローゼは先ほどから風の魔法を特訓している。それまで、闇の魔法はお預けだ。

マリーは、頷いた後にそのまま話を続ける。

「原始は、天使と悪魔などの“異界の者”に対して有効で、この世界の“異物”を排除する役目もあります。過去の勇者が持つ力の一部で、ルーン・リネージュ魔法の系統は“ナチュラル・リネージュ天然系”に属します」

「系統？天然系？」

「・・・あら、ご存知ないのですか？」

スフィアの疑問の言葉に、マリーはため息を吐きながら呟く。

「ルーン・リネージュ魔法の系統とは、文字通り属性の系統ですね。主に“ネイチャー・リネージュ天然系”と“天然系”に分かれます。“自然系”は自然の力を借りて法を行  
使用する魔力のことを自然系といいます。この系統の特徴は、誰もが

サブ属性として付加できることですね。対して“天然系”とは、生まれながらに持つ特殊な属性のことを言います。誰でも付加できるわけではなく、血の繋がりを持っていないと付加できません。なので“ブラッド・リネージュ血の系統”とも呼ばれていて、これを持つ者は上位貴族か王族くらいとされています」

「上位貴族か・・・王族!？」

「それくらい珍しいのです。持っていればほぼ最強ですからね」

驚くスフィアに、ふふふっと笑うマリー。

だが、それは心から笑ってはいない。不安要素が増えただけだったのだ。魔力の扱い方を知らないうちに強い力を持つと、それだけ暴走してしまう恐れもある。それに、目を付けられる可能性も高まる。

だから

「とりあえず、スフィアちゃんにはこんなのを用意しました」

マリーの手には、控えめな装飾のネックレス。紐は金属製で凄く細く作られていて、薄紫の水晶が埋め込まれた枠を下げている。

「その薄紫の水晶は、“封魔石”といって凶人相手に使われるものですが・・・たまに自分の力を隠すのにも使われますね。魔力を抑え、法の威力を抑える効力があります。それを付けてください」

スフィアは頷いて、首にかける。そのネックレスに埋め込まれている封魔石が淡く光る。スフィアは少しだけ、例えようの無い気持

ち悪さにうずくまり、口元を押さえた。

「魔力量が多い分、抑える量も多いですから・・・慣れるまで我慢してください」

「・・・ハイ」

ふらふらと立ち上がると、ハルバード達を見る。

なんとか風の魔法を扱えるようになるうと、必死に詠唱を唱えている姿をみて、グツと拳を握る。

「マリーさん、早く私に“光の魔法”と“原始の魔法”を教えてくださいませんか？」

「焦らないの。教える前に、少し話しておかなくてはいけないことがあるから」

スフィアは首を傾げてマリーを見る。

「話すことって何ですか？」

「貴女の魔法のことよ。少し見せてもらったのだけど・・・どうやら合成魔法のようね。原始の魔法を交えて貴女は光と炎を扱っているようですが・・・誰に魔法を教わったの？」

「えっと・・・“アスモデウス”って名乗っていた白色の猫です。私のお母さんと知り合いといってました」

アスモデウスの名を聞いて、真っ青になるマリー。

アスモデウス・・・“色欲の罪”によって悪魔になった天使の名前だ。

「ロワン・ナイッ龍王騎士団に連れ去られてから剣の訓練をさせられていたときに、夜にふらっと現れて・・・魔法を教えてくれるようになったのですが・・・」

「・・・あの色欲悪魔め・・・何が目的なのです！！」

怒り狂うマリーに驚き、身を縮めて怯えるスフィア。それをみて、「しまった・・・」と呟いた跡に、頭を下げ謝る。

「・・・ごめんなさい。あれは“色欲の罪”によって墜とされた悪魔。一時期貴女のお母様と敵対関係だったのだけど、なぜかあの悪魔が貴女のお母様を気に入って付きまとうようになるのよね。最終的には“使い魔”として大魔王ルシファーと戦い、戦い途中で死んだはずだけど・・・」

考え込むマリー。その言葉を聞いて、かなり驚くスフィア。

「悪魔が・・・お母さんと一緒になって戦ったのですか・・・？」

「悪魔が考えていることなんて、わかりません・・・わかりたくもありませんが」

眉間に力が入り、少しの間考える動作をするマリー。だが、すぐに考えることをやめて、スフィアへ向く。

「まあ、考えてたって仕方ありませんね。本来の光の詠唱や呪文

を教えますので、原始を組み込むのは自分で考えて組み込んでみてください」

「わかりました・・・やってみます！」

その言葉に、マリーは軽く頷く。「では、まず初級の魔法を片っ端からやってみましょう」といって、分厚い教科書を開いた。

「《束縛無き自由な風よ、行く手を阻む彼の者をその身で貫け》  
・・・《<ruby><rb>風の矢</rb><rp>( </rp  
><rt>ウインド・アロー  
</rt><rp>)</rp></ruby>》!!」

二人の間に静寂が訪れ、アンネローゼがため息を吐く。一瞬、そのため息が少しでも風が起きたような錯覚を感じたハルバードだが、そんな自分に情けなく感じて彼もまたため息を吐いた。

「・・・本当に才能あるのですよね？」

「才能無くてもそよ風程度は放出できるはずだけど」

苦笑いのアンネローゼ。ハルバードはさらに落ち込むように膝を折って手をつく。

「くそう・・・こうなったら、闇の幻術で風を起こしているよう

にして  
「

「馬鹿。勘のいい人は気づくわよ」

「くそう……《ジェットブラック・ジャックスナイフ漆黒の小刀》！」

ハルバードは的に向かって掌を向けて、呪文を唱える。黒のナイフが放出されると、ズパンツとはじける音と共に的は粉碎した。粉碎した的は、少しずつ再生していく。

「ストレス溜まっているからって当たらないの！」

半分あきれながら、それでもハルバードの力に感心する。詠唱破棄での粉碎するその力。スイクス・ナンバー六年目の学生並の実力は、学校創立以来の才能だ。

まあ、一撃での魔法陣ごと蒸発させたヤツをスライア除いて、だが。

本当はそのままじっくりと育てたい衝動に駆られるアンネローゼだが、彼も彼女も追われている存在。実力を隠しながらでは、育成に時間がかかる。

「本当に……勿体無い」

その呟きを他所に、必死に風の魔法を唱えているハルバード。それをみて、ため息を吐いた。

「模擬戦に間に合うのかしら？」

そう思いながら、ふと思い出す。なんだか彼の闇の魔法を見せて

もらったが、彼は一度も詠唱をしたことがなかった。

もしかすると・・・と思って、ハルバードに近づいた。

「闇魔法のときは詠唱破棄してるけど・・・どうしてかしら？」

「ん？・・・そういえば、詠唱したことないですね」

その言葉に、アンネローゼは驚いた。どんなに才能があっても、誰でも一人は詠唱を覚えなくてはならない。詠唱を破棄することは、身体の中に詠唱を繋ぐことで一瞬で魔法を唱えることなのだ。だから、詠唱したことが無いということは、その詠唱を覚えていない・・・つまり、詠唱をつないでないということ。それでは、魔法を扱えることが出来ないはずだ。

では何故、ハルバードは魔法を扱えるのか？

「闇の魔法、もう一度使ってみてもらえますか？」

「いいですけど・・・《漆黒の小刀》！」  
ジエットブラック・ジャックスナイフ

掌を的に向けて、魔法を打ち出す。真っ黒な片刃のナイフが生成され、打ち出された闇のナイフは、的を貫き粉碎させる。その様子をみて、アンネローゼは考え込む。

そして、気付いた。

「風の魔法も詠唱破棄で唱えてみて。その際、しっかりと風の性質を思い浮かべて」

「いいですよ……えつと……」

目を瞑り、ハルバードは風を思い浮かべる。掌を再生しかけている的に向ける。

「ウィンド・アロー  
《風の矢》」

風を切る音。その音と共に風が勢い良く放出され、乾いた音と共に的が真つ二つに切れた。

「おお!？」

「やっぱり……」

一人頷くアンネローゼ。ハルバードは感動し、再生しかけているにまた何発を打ち込む。

一通り感動したハルバードに、アンネローゼは語りだす。

「君はたぶん、主属性に影響されちゃってるんだと思う。どんな影響か知らないし、どういう影響で魔法が扱えるのかは知らないけど……」

「そうですか……」

「それでも、一般の力よりも多すぎるくらいです。魔力を封じるネックレスを付けてもらいますね」

そういって、ポケットから一つのネックレスを取り出す。それは、先ほどマリーがスフィアに渡したネックレスと同じものだ。

ハルバードは軽く頷いて首にかける。特になんとも無いのか、平然としているハルバードに少し驚きながらも、アンネローゼは続ける。

「一応、詠唱はフリでいいからしなさいよ。ただ口ずさむだけでいいから」

「わかりました」

ネックレスをかけてから、何発か風の魔法を打ち込む。修復したのは放った魔法を弾き、傷一つつかなかった。その結果を見て満足したアンネローゼは、「では、これから主属性の魔法を調べましょう」とハルバードに言う。

頷き、ハルバードは的に向かって、あの薄桃色の魔法を放つため、力をこめた。

二人が魔法の訓練をしているとき、レイスは東都の王騎士団司令ローワン・ナイツ部にいた。宰相が勇者を探して東都・・・いや、国中に騎士団を放

った騎士の情報を聞くため、闇にまぎれて忍び込んだのだ。

騎士たちが行きかう中、自身も騎士の格好をする。鎧や剣はその辺の騎士から奪ったものだ。

慌しく走り回る騎士たち。そも仕方が無かった。勇者が消えたせいで、これからの作戦に支障がきたしているからだ。だから、早く見つけなくてはと“勇者”もしくは勇者をかくまっているダストデビル“辻風騎士団”の団長を探しているのだ。

ダストデビル・ナイト “辻風騎士団”は王国騎士団の任から外され、私兵団となつてしまっている。どっちかというところ、“外された”というよりもガリウス自ら“抜けた”という感じだが。

そのため、今は傭兵団として東都の軍に所属している。それに対して気に入っていないため、王国騎士団と東都軍はいがみ合っているらしいが。

“勇者搜索”に対しても、宰相は滞っていた。一緒にいた少年と外国に逃げたと噂が流れているため、外国にも搜索の手を伸ばすが、なかなか見つからない。

「はて……どうするべきか……」

「“勇者”と身近の存在が……こうもないとは、不覚でしたね」

宰相の声が聞こえた部屋。そこで足を止めたレイス。周りを見回し、聞き耳を立てる。

一人は宰相の声だとわかった。だが、もう一人……低い声が誰の者かはわからない。

「脅す材料として使いすぎてしまったのだろ。まあ、一人は残っているがな」

「父親ですか？彼は傭兵組合が上手く匿っているため、彼を材料にするのは厳しいですよ。それに、東都軍と我々は友好的でないために……彼を差し出せとはいえないですからね」

それはマリーが、傭兵組合に彼をかくまうよう頼んだからだ。そのため、騎士団の居場所は傭兵組合のマスターかマリーしか知らない。大体は学園の教師や警備員をしたり、東都軍関連の施設警備をしていたりする。傭兵組合と東都軍幹部が仲が良かったために出来る匿い方だ。ガリウスは東都軍幹部の警備兼秘書として活躍しているらしい。

「材料があっても、行使する相手がいなければ使えんよ。どこに言ったかさえわかれば……」

「……呼び出してみます？」

宰相の言葉に、もう一人の男が驚く。レイス自身も、彼女をおびき寄せる手立てがあるとは思えなかったからだ。

「東都内にいるのは確かですから、都内で呼び出しの布令を放てば必ず来るはずですよ」

「だが……どうやって？」

「簡単ですよ……“貴女の大事な友人”をお預かりしていると  
いえば、来るでしょうね……ねえ、……“レイス君”  
」

## Step・16 処刑と私刑

「スファイアちゃん、ちょっといい？」

「あ、はい・・・なんででしょうか？」

次の日の放課後、突然アンネローゼに呼ばれたスファイアは、そのまま歩き出したアンネローゼの後ろをついていくことにする。

黙ったままのアンネローゼに、少し恐怖を覚えながら。

どんどん階段を下りていくアンネローゼ。地下1階には、王城として使われていた時代には牢獄になっていたが、ガル・スフェイル王国が統治してからは学校のものとなっている。そのため、現在ではその牢獄は改装されていて、室内訓練場として扱われている。スファイア達が訓練していた箇所と異なり、ここは剣術や槍術、ナイフなどの武道訓練場となっている。

だが、もう地下2階の独房部屋はそのままになっている。そこは、犯罪を犯した生徒や教員、もしくはは侵入してきた犯罪者を一時的に閉じ込めておく箇所として使われている。

地下2階の最奥。比較的大きめな独房の扉を開けたアンネローゼ。

「スファイアちゃん、ここに入って」

その言葉に、言葉を失うスファイア。動けないスファイアの手を引っ張って独房へ入れると、ベッドの上に放り込んだ。

「　っ!？」

「《動くな》」

起き上がるうとしたところで、身体が動かなくなる。“縛り”の魔法をかけて動けなくした後に、スフィアへ近づき、足に何かを取り付ける。

かちりつと音がした後に、スフィアは気付いた。それは、スフィアが首からさげているネックレスと同等のもの・・・いや、“犯罪者”などを取り押さえるため”の封魔石が詰められた足枷だ。その枷の先端は壁にきつく結ぶと、怯えているスフィアの手を握る。

「な、なんで・・・」

「ごめんねスフィアちゃん。マリー校長が来るまで、少し待って」

半刻が過ぎた頃に、マリーはきた。それも、かなり申し訳なさそうに。

「アンネローゼ、ご苦労様・・・ごめんなさいね、貴女にこんな役目を負わせてしまって・・・」

「マリー校長も、ハルバード君のところへ行ってたのでしょうか？マリー校長のほうが厳しい役目を負っているのに、このくらい平気ですよ」

その言葉に、軽く頷くマリー。そして、怯えているスフィアに向かって歩く。

「大変申し訳ないです。こちらの者の失態のため、貴女に危険が及びそうなのです。少しの間、ここにいてください」

「どういう……ことなのですか？」

震える声で、ベットの角で怯えながらも言葉を発する。その姿を見て、本当に申し訳ない顔をしながらも、マリーは話を続ける。

「実は、私たちの仲間の一人が捕まりました。幸い、その場で殺されることはされていませんが……酷く拷問を受けた後、処刑されかかっているのです」

「しよ……処刑？」

「はい。今現在私の仲間が救出に向かって動いているのですが……助ける隙が無くて、どうすることもできません。もしかしたら貴女の情報が流れている可能性もありますので、しばらくここで身を隠してもらいます」

その言葉に、疑問が残る。なら、この枷はどんな意味があるのだろうか？

「なら……これは……？」

スフィアは足の枷に目を向けて、疑問を投げつけた。

「貴女自身が、この場を動かないようにです……」

「……意味がわかりません」

少しの間、沈黙が起きる。マリーが話すか迷っているのだが、今の現状では彼女は動くことは出来ない。

「……私が知っている人なのですね？」

その沈黙を破って、マリーに問い詰めるようにスフィアが口を開く。

「教えてください!!！」

鬼気迫るようなスフィアの言動。だが、目には一杯の涙。今まで知り合いを殺されてきた彼女にとっては、誰かが傷ついているのなら黙っておけないのだ。

(……黙っておくことは、無理ですね)

ため息を吐いて、観念したように口を開く。

「……レイス・フェン・ローグ・ダークネス。貴女が小さい頃に遊んでいた友達だったと本人から聞いてます」

「っ!!!!!!！」

ベットを飛び出し、独房から出る。だが、独房から出たところで足枷により激しく転倒した。足からは、痛々しいほどの傷が出る。

「お願い!!行かせて!!！」

「無理です!貴女を守ることが優先なのです!!！」

「でもー!!」

ギリギリツと足枷が軋み、傷が深まる。それをみてマリーは顔をしかめる。

我慢できず、スフィアの目の前に立ち・・・掌を彼女の頬に向けて放った。

パンツと乾いた音と共にスフィアは倒れる。頬を押さえ、マリーを睨むスフィア。

「貴女が動くと、それ以上に被害が出るのです！考えてください！」

そういつて、暴れるスフィアをつかんで独房へ再び放り込む。金属音と共に、独房の厚い扉が閉じられた。

「お願い!!!あけて!!!!!!」

独房の小さな窓から顔を出して叫ぶ。その声に対して、アンネローゼとマリーは無視した。

「お願い・・・開けてよお・・・」

力なく叫ぶが・・・すでに二人の姿は、見えなくなってしまっていた。

「マリー校長・・・」

「わかってます！」

校長室に戻ったマリーとアンネローゼ。ほかにもスフィア達の情報を知る数人の教員や警備員がその場にいた。

「皆さん、彼女のことを……お願いしますね」

その声に、頷く警備員と教員。校長室から退出して、各々の準備を行う。

「ハルバード君は……大丈夫でしょうか？」

「彼を信じるしかありません……彼しか、頼れる人がいませんから……」

手を組み、祈るように灰色の髪の少年のことを思う。

「貴方には大変な役を押し付けてしまいましたが……頼みましたよ……!!」

「わかってるよ、そんなこと」

ハルバードは呟いた。なんとなく、マリーがそんなこといっている気がして。

今は下水道を人知れず歩き、今回使用する衣装を着ている。仮面は暑苦しいため、まだ手に持っているままだ。

「さて、行きますか！」

思考を、今回の事件の回想に切り替えながら、ハルバードは闇に消えた。

今回の事件は、東都内全域に伝わった。ダークネス家の四男レイスが“虚無の死神”と名乗り悪魔側の人間のスパイとして疑われている。ダークネス家は元々レイスとは絶縁状態なため、今回のレイスの処遇に対しては“好きにしてい”と我関せずの状態。そのため、宰相側はなるべく情報を搾り取るためと尋問をし、翌日公開処刑を行うとしている。

だがもし、“彼を良く知る人物”が彼はスパイではないと申し出れば、処刑は行はないといっている。この場合は・・・スフィアだ。

そのため、スフィアがもし出て行けば再び王国騎士団に再び捕らえられてしまい、また前線に送られてしまう可能性がある。その場合、彼女が助かる見込みは0%だ。

だが、レイスほどの実力者を捨てるわけには行かないマリイは、あることをハルバードに頼む。

それは・・・

レイスが捕まったその翌日。

場所は騎士団の支部。そこには、公開処刑場に座らされているレイスの姿だ。

野次馬からは、罪人を罵る声はまったく聞こえない。最近の龍王ロウ騎士団ン・ナイトの動きを知っているからだ。

国民に厚く信頼されている者達を罪人として前線に送つたり、その“勇者”と呼ばれた子供を戦地に送つたり・・・

そして、明らかに無実の者を処刑したり・・・などだ。

だから、「可愛そうに・・・」「まだ子供じゃないか！」など、哀れみの声が微かに聞こえる。だが反対しないのは、自分にその矛先が向けられる可能性があるからだ。

「フン・・・来なかったか。お前も外れることがあるんだな」

少し太り気味の長身の男・・・ガル・スフェイル王国の第二王子ベネスケーラ・ルーン・ホワイツ・スフェイルだ。白の短髪に丸い顔。だが、厳しい顔つきに、脂肪も多いが、鍛え上げた筋肉も多く力強い身体つきだ。

「思ったよりもへたれな勇者でしたね。まあ出てこないなら、それはそれで色々と作戦はありますよ。それよりも、我らに何度も煮え湯を飲ませた“虚無の死神”を殺せるのだから、問題ないじゃないですか」

宰相はそういって、レイスを見る。うつろな目で俯いている少年

を見て、顔を歪めて笑った。

「私たちが侮るからいけないのですよ。ま、一度逃げた得物は逃がすつもりはないですよ」

準備が出来たようで、王国騎士団の団員が合図を宰相にする。宰相もその合図にこたえようと、槍を持った騎士二人が処刑台へと上がり、レイスの首に切っ先を当てる。

「これより、罪人である“虚無の死神”の処刑を行う！このような少年を処刑することは非常に遺憾だが、これ以上王国の威光を汚すことは許さん！そのため、これは“見せしめ”だ！これ以上、我々に対して逆らわぬことだ！」

騎士の言葉が終わり、続けて合図を行う。その騎士の合図を受け、レイスに向けて槍を持っていた手が挙がる。

「では・・・殺<sup>ヤ</sup>」

命令を下そうとしたときだった。カチャンと金属が落ちたような音がしたので、そちらへ目を向ける。

そこには、黒いローブに黒い髪の男。髑髏の仮面に真つ黒な大鎌を所持した者が、ふわりと舞い降りる。舞い降りた先は、レイスがいる処刑台だ。そこには、処刑台からふらふらと倒れ落ちる騎士の姿がある。

「な、何者だ!？」

「お前らが探していた人物だが・・・？」

ドス低い声で放った言葉。騎士団が慌てふためいて髑髏の仮面の者を囲む。

その姿を見て、レイスは驚いた顔をする。見知ったその目を見て、髑髏の仮面の男はにやりと笑う。そして髑髏の仮面の者は動揺せず、ゆっくりとした口調で騎士団に向けて言葉を発する。

「お前らが俺を呼んだのだろうか？・・・なあ、マールス宰相殿？」

「ま、まさか・・・いや、ありえません！！」

ぶつぶつと呟くマールスを睨むと、マールスは一步下がる。少し怯えが混じったようなその様子を見て愉快そうに顔を歪ませると、大鎌を強く握る。

「ま、今回は俺はオメエに用はねえよ。用事があるのはこっちだ」

指を刺すのは、レイス。鎌をレイスの首に当てる。驚くレイスを他所に、髑髏の仮面の男は強く鎌を握り、そして・・・

「俺の名を騙った罰だ。その命、俺が頂くぜ」

鎌を引く。瞬間、黒い血が処刑台から溢れ、その場にいた者に血の雨が降る。

「い……いやああああ!!！」

誰かの女性の叫び声。その声を聞いて、野次馬たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

残ったのは、腰を抜かして逃げられない者と、何かの意図があつて動かないもの。そして、騎士団だ。

「さて……いいぞ。どいつから死にたい？」

首を拾い、闇の力で一瞬で腐らせる。その姿に、騎士団員全員が怯える。

「お、お前……」

ベネスケーラは、腰を抜かして立てなくなり、地面へ腰が落ちる。マールスは、苦虫を噛んだような顔で王子のその姿を見たあと、髑髏の仮面の男に睨みつける。

「くそっ! 《深遠なる闇の瞳よ、彼の者の肉体を腐らし塵とせよ  
ラッタ・アイズ》! 《腐敗する瞳》」

闇の中に黄色の瞳が髑髏の仮面の者の前に現れ、目の前を飲み込もうとする腐敗の闇を吐き出す。

だが

「ふん、雑魚だな」

そういつて、大鎌を振るつ。すると、目の前にあつたはずの腐敗の闇は塵となつて消えうせた。

「なつ！？賢者の称号を持つ私の魔法が、ここまで・・・」

「さて、お遊びはここまでだな。俺は目的は終えたことだし、俺はずらかるとしようか」

掌を、レイスの死体に向ける。そして、闇が放出されると・・・レイスの身体は溶けるように消え去つた。その様子を見て、騎士団やマールス宰相は呆然とした。腐るのではなく、溶けるように消え去るのは闇の魔法ではありえないことだからだ。

その姿は、死の魔法を操る死の使い・・・そのものだった。

「では、御機嫌よう」

一礼して、彼もまた溶けるように消えた。その場には、骨となつた少年の首を残して・・・。

「礼はいわねえよ」

「いらぬよ。これは仕事だからね」

下水道を歩く二人の影。レイスとハルバードだ。レイスはハルバードに肩を借りて、ゆっくりと歩いている。

あの時、ハルバードはまず、“虚無の死神”の象徴である黒の大鎌を“魔法の剣”の原理で生成。あとは死神の服をまとい、その場にいた者に“闇の幻術”をかける。小道具はすでに用意していたので、“本物の首の骨”を転がし、蓄農業から盗んだ豚の血を撒き散らしておけば、死体の出来上がり。態と首の骨だけを残して溶けるように見せたのも、後で調べられてもわからないようにだ。下手に小細工すれば、後で調べられたらすぐにわかってしまう。

「しかし・・・あんな雑魚共に、なんで捕まったんだよ」

「・・・気配を消していたはずなんだが、見つかってしまったな・・・すぐに宰相の術に捕まってしまって、逃げられなくなったんだ」

「あゝ・・・情けないねえ・・・」

「あの宰相、賢者の称号を持つ魔法使いなんだぞ？お前こそ、良くそんな奴に幻術がかかったな」

悠長な声で発したレイスに、少しだけ厳しい目でハルバードは睨む。歩みを止めた後、レイスを壁に投げつけた。

「ガッ!？」

悲鳴を上げるレイスに、さらに押し付けるように蹴りを食らわせ

る。

「テメエ、なに悠長な態度でいるんだよ・・・スフィアを守るとか言っておきながら、捕まってるんじゃないよ!!一人でもスフィアに関係している奴が捕まったら、アイツが危ないことを一番テメエがわかってるんじゃないのかよ!!!」

その言葉に、スフィアに自分のことが耳に入ってしまったことを察した。そのために、彼女が嘆いていることも。それ以上に、もし自分からスフィアのことを漏れたら、彼女自身が危なかったことも知っている。ハルバードが怒るのも、当たり前だと思った。

彼は、自分を助けにきたわけじゃない。自分と同じ、あのか弱い勇者を守るために動いたのだと。

呼吸を整えた後に、小さく「すまん」とだけ答える。ハルバードは、その姿に大きなため息のあと、レイスに問いかける。

「情報は、一つも向こうに流してねえよな？」

「アイツの悪口しか喋ってない。それは大丈夫だ」

「洗脳系とかに脳を見られてないよな？」

「・・・見られそうになったが、俺の脳には“洗脳防止魔法”の魔方陣が埋め込まれている。その魔方陣が破壊されてたら、俺は死ぬようになっているから、脳から漏れていないはずだ」

「確証は？」

「信じてくれ・・・としか言えないな」

苦笑いをするレイス。だが、目が笑っていない。心から信じてくれという目でハルバードを捉えていた。

ため息を吐いて、レイスを起こしてそのまま歩く。レイスも、ゆっくりとした歩調でハルバードの後ろを歩いた。

「・・・あの娘は？」

「学校の独房に閉じ込めた。お前の名前を出してあっちこっちに布令を出していたし、スフィア自身に耳が入る可能性があったからね。しばらくはあそこに閉じ込めて、都の様子を見なくちゃいけない」

それを聞いて、レイスは俯く。自分のせいで、彼女をそんな目に合わせなくてはいけなくなってしまったことに。

「それと・・・今日から“レイス・フェン・ローグ・ダークネス”は死んだ。“虚無の死神”に殺されたんだ。それは、俺とお前とマリー校長とアンネ先生にしか知らないことだ。お前が生きていることは、スフィアは勿論・・・誰にも口を割るなよ」

「・・・わかってるさ」

その言葉をハルバードが放つと、二人は黙って歩いた。

長い間の沈黙の後、ぼつりつとハルバードは呟いた。

「一番、アイツが辛く感じているのは・・・お前が死んだってコ

トだからな。それだけは、覚えておけよ」

その言葉に、レイスは黙って頷こうとした。だが、顔が俯いたまま、上がらなかった

ぼろぼろと流した涙は、結局、彼女を守ろうとしたのに、傷つけてしまった自責の思いからだった。

## Step・17 追手

(・・・これは・・・)

ふと、ハルバードは気付いた。下水道を歩いている二人の後ろから、五人ほどの人数がついてきていることに。

ローワン・ナイッ  
龍王騎士団

宰相直属の王国騎士団。王国一の団員数を誇る騎士団は、王都軍の主勢力となっている。それは、宰相の力もあるが、一番の要因が団長である。

ローワン・ナイッ  
龍王騎士団の団長は、切れ者でもあり豪傑でもある。そして彼には忠誠心はなく、金でしか動かない。

だが、金さえ払えば仕事はするのだ。手は抜かない。相手を捕まえたり始末すれば、それ相応の報酬が出る。そのため団長は無知で愚かだと思っている宰相とは別に動いていたのだ。

東都を昼間を人目に気にせず動くとしたら、下水道しかないのだ。人材はいくらでもある。だから下水道に数部隊を配置したのである。

王国騎士団だとハルバードは気づき、レイスに闇の魔力を纏わせて体を癒す。徐々に彼らを検索する騎士の数が増えていることに気づき、危機感を持つ。

(ま、これで終わるとは思わなかったけどさっ！)

舌打ちをし、迷宮のような下水道を走り回る。地理的には不利だが、こちらには闇の力がある。隠れるのは得意だ。

だが、逃げるのとはまた違う。見つからないように学校に逃げ帰るか、東都から離れることが出来ればいいのだが・・・徐々に東都の中心に追い込まれていることは、二人は気付いている。

「どっする？」

「どっするにも・・・」

すでに、彼らの周りを走り回る騎士の姿が見えた。上手く二人は魔法によって隠れているが、騎士は鉄の鎧や剣を所持している。彼らのような“魔法使い”では勝てる要素が無い。

「突破は無理だな」

レイスの呟きに、ハルバードは頷く。表を出る出口は近くにはあるが、出てしまえばそれこそ格好の獲物だ。表には、すでに百単位の部隊が警備をしているからだ。

「一応、俺は“神の祭具”を持つてるからな。相手が鉄を持っていても、それに対応するから問題ないはずだ」

セイクリッド・ツール

“神の祭具”は魔法ではない。神の力だ。だから、金属に相性が悪いというものは無い。

「それはどこにある?」

「騎士団司令部にあるが・・・呼べば来る。お前は?」

「俺も一応“神の祭具”を持つてはいるが・・・都を焦土にしちまう可能性があるから迂闊に扱えん」

一瞬、レイスは冗談かと思ったが、真剣な目で苦笑いをしているハルバードを見て本当のことだとわかる。

「ま、レイスから貰った剣を使うさ。それより、レイスはそれを呼び出すときに何か問題は無いか?」

「魔力が半分くらい奪われるくらいだな・・・ま、焦土にしたり死体を撒き散らしたりしないから、特に問題は無い」

レイス自身も、魔力は非常に高い。半分くらい奪われていても、多少戦えるまでの魔力量は持っていると自負していた。

「ならよし。東都を出るために突破しちまえっ!」

「・・・正気か?」

軽く言うハルバードに、レイスは呆れるような声を出す。

「大丈夫大丈夫、俺らなら出来るさ。学校へは正体がばれるから逃げられないから、東都から脱出する形で行こう」

細めのブレスレッドを撫でると、銀色のレイピアに形を変形した。軽く振るって「扱いやすい剣だな、いい剣だよ」とその剣の製作者

をほめる。

「ま、作ってもらおう剣を楽しみにしていてくれ」

それだけ言うと、レイスは二人を囲もうとしている騎士団を睨みつける。

「ああ、楽しみにしておくよ。あと、ホレ」

ハルバードは、自分が持っていた髑髏の仮面と黒のローブをレイスに渡す。自分自身はもう一枚着込んでいた灰色の薄いローブに、その辺から拾った布を顔に巻く。

そして・・・

「《死の国の使者よ、罪深き魂を狩る祭具を我に託せ》・・・《  
デスサイズ  
死神の大鎌》！」

黒い力が働き、黒の大鎌が表れる。その力に気付き、騎士団が騒ぎこちらに近づいてきているのがわかる。

「よし、行こうか！」

「応っ！」

ハルバードの掛け声に応じるレイス。そして、二人は下水道の奥へと走っていった。

「・・・スフィアちゃん！」

ベットの上で足を抱えるようにして腕を組み、じっと動かないスフィアに誰かが呼ぶ声が聞こえた。俯いていた顔を上げると、独房の厚い扉の窓から覗く顔。その顔に見覚えがある。

「な、なんで・・・ここに？」

「スフィアちゃんが独房に入れられたって聞いたから。助けに来たよ！」

栗色の長い髪。窓を覗くために、一生懸命に背伸びして覗いている丸く可愛らしい顔・・・レティルだ。

「あ、待ってて！今あけるから・・・お願いね？」

誰かにあけるよう指示すると、かちやかちやと金属を弄る音が聞こえる。

最後に、がちやんと大きな音と共に独房の扉が開き、飛び出してきた小さな人影はスフィアに抱き付いた。

「よかつた！無事で！酷い事されてない？怪我は？大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ・・・レティ、どうしてここにいてるってわか

ったの？」

「フィーネちゃんが教えてくれたんだよ。スフィアちゃんが呼び出されて独房に入れられているのを見て、助けようといったのもあの子だし」

スフィアは独房の入り口を見る。すると、そこには薄緑の髪に碧眼の・・・スフィアのルームメイトの少女がそこにいた。

「あ、アナタは・・・」

「・・・・・・・・」

黙ったまま、目を閉じている少女にスフィアは近づき、頭を下げた。

「ありがとう」

「・・・勘違いしないでよ、アンタを助けるつもりでレティに言っただけじゃないから」

そういつて、スフィアの前で屈み、スフィアの足についていた枷をはずす。紅く傷ついた足を見てすぐさまレティルは治療を施す。

「それで・・・なんでこんなところに閉じ込められたの？ なにか悪いことしたの？」

「それは・・・」

言えなかった。彼女たちを巻き込むことは出来ないからだ。

言えば、彼女たちを巻き込む可能性がある。最悪、幼い頃に遊んでいた黒髪の少年と同じ末路になってしまう。

「『ごめん、言えない・・・』とは言わせないぞ？」

口を開こうとしたスフィアにナイフを向けたのは薄緑の髪の少女。殺気を放つその姿に、スフィアは怯む。

「ちょ、ファイー」

「レテイ、少し黙ってる！あたしは、単純にこの魔法学校の“裏”を知りたいだけ。アンタが黙ってるなら、この場で切り刻んでも聞くだけだよ」

二人はしばらくの間睨み合い。っといっても、薄緑の髪の少女が一方的に睨んでいるのだが。

「・・・わかった、言うよ。でも、代わりにお願いがあるの」

その言葉に、薄緑色の髪の少女はナイフを降ろした。それをみて少し一息ついて、スフィアは一言だけ声を発する。

「私を・・・この学校の外に連れ出して欲しい」

「・・・うん、やっぱそのまま閉じ込めておけばよかったな」

「フィーネちゃん、それを言わない。私も思っていることなんだから」

二人はため息をつきながら、学校の裏口に立っていた。彼女の正体も、なんで閉じ込められていたかを聞いて、しまったと思った。

スフィアを閉じ込めていた理由は、彼女自身を守るためなのだ。

学校の校長は色々隠し事をしているのは気付いていたが、まさか勇者を守るために動いているとは思わなかったからだ。多少、荒いことはしているが。

「このままどうする？ 絶対についてこないで！！」って言われただけ……」

「あのまま放っておくのも……そしたら、絶対にあたし等悪者だぞ」

ため息をつくフィーネ。レティルも、苦笑いしながら呟く。

「授業、一時限だけサボるつもりが……一日分になっちゃったね」

「グループの召集はしたほうがいいよな」

フィーネがネットクレスに魔力を通そうとしたとき、首を振って静止する。

「しないほうがいいよ、変に巻き込んだじゃうのも悪いし。フィーネは死刑にされかかっている男の子の情報を集めて。私は……ス

「ファイアちゃんを追っから」

「わかった・・・無理するなよ」

「お互いだね」

## Step・18 下水道の戦い

染め粉の魔法を解き、学生服から私服の黒ケープとワンピースに着替えた金髪になった少女は、建物の影で息を整えて騎士団の様子を伺っていた。

染め粉を解き、着替えたのは、魔法学校の人たちに迷惑がかからないように。

現在、騎士団は突如現れた“虚無の死神”の搜索のために騎士団を増員して警備をしているのだが……そんなことをまったく知らないスフィアは、自身を捕らえるための警備だと思っていた。

それでも、行かなくてはいかなかった。

処刑がいつ執行されるのか、すでに執行されているのさえもわからないのに。

「……マリー校長、アンネローゼ先生……ハル、ごめんね」

俯き加減で呟き、騎士団の目の前に姿を現そうとした時だった。手を捉まれ、物陰に引き込まれる。

「わっ!?!」

「静かに!!」

物陰に引き込まれ、息絶え絶えの自分より小さい小柄な少女を見て、苦虫を噛んだような表情を浮かべる。

「レティ！なんで来たの！」

「あの話を聞いて、そのまま放っておくことが出来ないよっ！」

ギツと睨むレティルをみて、スフィアはため息を吐く。これで、捕まることは出来なくなった。レティルを巻き込むことは出来ない。

「……っ！……ねえ、私がどこに、どういう意図で行こうとしているか知って」

「勿論知ってる！！でも、それじゃああまりにもスフィアちゃんが不憫で……」

拳を強く握り、スフィアに強い意志の目で捕らえる。スフィアの手を握っていた手も、必然と力が強くなる。

「今、スフィアちゃんの友達的情報をフィーネちゃんに調べてもらってるから」

少し驚いたスフィア。あの少女は、自分のためには動かなそうだったのに。そんなことを知ってか、レティルは「フィーネちゃん、面倒見はいいんだよ」と微笑む。

「とりあえず、スフィアちゃんが動くのは待って。どうしてもっていうなら……スフィアちゃんを守ろうと動いていた人たちの思いを踏み躪るのを知ってでも動くのなら、どうぞご自由に」

その言葉に、ギツと睨むスフィア。その目に怯まず、レティルはスフィアの手を話した後に、自分の首に掲げているネックレスに魔

力を通して声をかける。

「フィーネちゃん、そっちはどう?」

レティルが所持している魔具。通信用の魔具で、発した音声と画像を相手に送り届けることが出来るもの。王都の軍施設で使われているもので、結構貴重なもの。

『……うん、大丈夫だよ。別にアタシ達が追われているわけじゃないからね。ただ、処刑場だけど……妙なことが起きてるんだ。アイツそこにいる?』

その言葉を聴いて、自分のことだと気付いたスフィアは、身を乗り出してネックレスに問いかける。

「何っ!? どうしたの!? あの人は……」

『落ち着いて聞けよ……アンタの幼馴染は……“殺された”』

フィーネの言葉を聞いて、呆然とするスフィア。なんで? どうして? という言葉が頭を巡り、ぺたんつと腰が降りる。

「また……助けられなかった……」

スフィアの様子を見ていられず目を背け、そのままフィーネに疑問を問いかける。

「フィーネちゃん、殺されたってどういこと?」

『本当は処刑されるはずだったんだけど……“虚無の死神”って

ヤツに殺されたらしいんだ。殺され方も酷くて……残ったのが、アイツの幼馴染の頭蓋骨だけらしい』

その言葉を聞いて、驚く。処刑されたわけではなく、殺されたからだ。

『その“虚無の死神”ってのは、どんなヤツだか知っているか？』

「知ってるよ。王都の軍隊や王国騎士団からは結構忌み嫌われてるらしいね。殺しはしないけど、<sup>スパイ</sup>工作員ってことで賞金首扱いになってるよ。確か、金貨五枚程度だったね」

『へえ……でも、なんか凄い一生懸命になって王都の騎士団が行方を追ってるからさ。何か、アイツと関係あるのかな』

「……“虚無の死神”なんて、知らない」

ぼつり、と呟くスフィア。顔が見えないため、スフィアの表情が見えないが……震えている肩から、泣いていると容易に想像できた。

「とりあえず、学校に帰りましょう。今はここにいるのは危険すぎる」

『了解……っと、今どこにいる？とりあえず合流するわ』

「東門通りから少し外れたところ。私のお気に入りの喫茶店わかるよね？あそこの裏通り」

『了解』

「はっ！」

「シッ！」

一閃。また一閃と、二人は騎士団の集団を突っ切っていく。

「こいつ等……」

「早く団長を呼べ！！」

騎士達の怒号が聞こえる中、また一人と吹っ飛ばして囲いを突破する。一人たりとも殺されていないため、騎士達の士気は落ちない。

だが、確実にレイスとハルバードの二人は体力を削られていた。最初は余裕を見せていたハルバードも、徐々に疲労の色が見える。

「どうしたっ！？そんなものかつ！？」

レイスの挑発に、にやりと笑う。「お前こそ、顔色悪いぞ」と返すと、突然現れた騎士を殴り飛ばす。

「くそっ！この餓鬼がああ！！」

「餓鬼を舐めんじゃねえぞ!!」

目の前に現れた騎士をレイスは大鎌で足を切り払い。倒れたところを柄にて鳩尾に突き立てる。悲鳴を上げること出来ぬまま意識を失った騎士を蹴り飛ばし、走り去る。

「ハアツ!!」

ハルバードはレイピアを巧みに操り、騎士が持っている剣を叩き落とす。呆然とする騎士を蹴り、下水道に溜まった汚水へと突き飛ばす。

「いつまでコイツ等の相手をしなくちゃいけないんだっ？」

「あと少しで外に出られる箇所がある！それまで頑張れっ！」

ハルバードが先導して走る。レイスも、鏢競り合っていた騎士を弾き飛ばすと、それに黙って走る。

「ま、待て!!」

がちやがちやと音を立てて走る騎士達。重い鎧を装備しているために、軽装備のハルバード達を追うのは困難だ。

だが、確実に人海戦術で追い込まれているのは二人は良くわかっていた。おそらく、外に出たら大量の騎士隊に囲まれるだろう。

……っとそのとき、ハルバードはある気配を察知する。

それは、上で大量に蠢く騎士達と……見覚えのある気配がぼつんと。

その気配は、紛れも無く自分達を守るうとしてしている少女の気配だった。

「……ンの馬鹿!!」

急ブレーキのちに反転。そして掌を後ろからやってくる騎士達に向けて。

「グルーム・ビューベル《暗黒の瞳!》」

大きな瞳が現れ、それが騎士達に向かっていく。騎士達は金属製の盾を構え、魔法を防ごうとするが……

「ランチャー《破裂せよ》」

瞳が破裂し、闇の爆発を生む。純粋な闇の爆発に巻き込まれたものは、物体を崩壊する。金属製の物にはそこまで期待する効果はないが、それでも“周囲一帯”の物体を破壊することが出来る。

ここは下水道だ。そして、地下だ。

崩れた天井により、後ろから追っていた騎士隊は巻き込まれ、瓦礫により背後の道は閉ざされた。

代わりに、上への道が出来上がる。

「おい、なにやって」

「スフィアが、上にいる！」

その言葉に、耳を疑った。ハルバードの話では、独房に閉じ込められているという話を聞いていたからだ。

「たぶん騎士隊に囲まれているが、気付いてない！！お前が騎士隊を誘導して、アイツを助けてやってくれ！」

「それはいいが……お前は？」

「このまま進む。たぶん、王国騎士団の団長がいるだろ。そいつを倒せば、暫くはなんとかなるかもしれない」

「倒すって……ロワン・ナイツ 龍王騎士団の団長だぞ！？あの“ソードマスター 剣聖”に次ぐ剣術を持っているヤツを、どうやって……」

「気合い」

「気合って……おい、真面目に」

「別に倒すのが目的じゃない。少しでも俺のところには騎士隊が集まってくれば、アイツ等逃がせるだろ？それよりも、早くあいつ等を助けてやれ！」

レイスの返事も聞かず、そのまま奥へと走り去る。すぐに見えな

くなり、声をかける暇さえ与えられなかったレイスは、「クソッ、どうなっても俺は知らんぞ」と呟いて上に上る。

目指すは、守ると決めた金色の髪の少女の場所だ。

「ほう……ずいぶんと若い剣士だな」

ハルバードは声がした方向へ目を向ける。そして、にやりと笑いながら、呟いた。

「へえ、思ったよりも細いんだな。てっきり、どっかの騎士団のおっちゃんみたくゴツイ体をしていると思ったよ」

ハルバードが下水道を抜けて対峙していたのは、“南の国の戦士”と現せるくらいの大膽な装備をした男だ。その後ろには、数人の王国騎士団が槍を構えて男の後ろからハルバードを睨む。細いが、無駄の無い筋肉の男の装備は、皮の肩当てに薄い金属で出来た胸当てに、皮製の腰頭巾。腰には皮製の布に巻いてあるだけの、無骨な剣が垂れ下がっている。

### カツツバルゲル

その剣の最大の特徴は鍔で、Sの字になって腰に引っかかるようになっている。よく傭兵が使用する剣でもあり、それから荒くれ者が扱うイメージがこの国では浸透している。

使用するにも結構なクセがあるが、扱いなれば強力な相棒となる武器だ。

独特な橙色の短い髪をくしゃりとかきあげると、獲物を見つけたような目でハルバードを凝視する。

「最近暇していたんだ。お前は……少しは楽しめそうだな」

「そんなこと言っていると、後悔するぜ？」

ハルバードが銀色のレイピアを構える。突きを意識した、攻撃的な構えだ。

対する黄金騎士団の団長も、カツツバルゲルを手に持ち、皮製の布を放り、大きく振りかぶる。腰を低くし、独特な構えはまるで“ベルセルク狂戦士”のようだ。

「さて、殺し合おうか。始めようか俺の名前は“カイル・ソード・ロゼスタ”」。お前は？」

「悪いけど、名乗るほど出ない」

ハルバードが地面を蹴る。その刹那にカイルに斬りかかり、激しい剣の応酬が二人の間に続いた。



Step・19 敵（カタキ）

「フツ！！」

突き。突き突き突き突き。

ひたすら、突きを繰り返す。たまに振るわれる一閃を避け、ひたすら突きを出す。

「ほう……筋はいいな。だが、その剣じゃ使い慣れてなさそうだわ」

チーン、と弾かれる。気付けば、ハルバードの首下にはカツツバルゲルの剣先が向けられていた。

「ほざけっ！」

油断しているので、そのままカツツバルゲルの剣先をずらし、団長カイルの懐へ入る。

「元気がいいな」

懐に入ったところを、蹴飛ばされて吹っ飛ぶ。着地に少し失敗しながらも、受身を取り剣を構えなおす。その様子を見てカイルはにやりと笑い、乾いた自分の唇を舐めて、ハルバードを睨む。

「ほっ！」

「動きはいいんだがなあ……ほれっ！！！」

一閃。明らかに急所を目掛けたその一閃だったが、振るわれた剣は空を斬った。屈み込んだハルバードは、体のバネを使って再び突きを繰り出す。

「単調だなあ……っ!？」

にやりと笑うハルバード。レイピアはタックやエストクのように完璧な刺突攻撃特化型の武器ではない。斬りもできる。タックやエストクは戦場では騎馬隊の補助武器として活躍しているが、レイピアはそうではない、上流のおぼっちゃま貴族が持っている護身用であり、ほぼ装飾品扱いだ。そのため、このように戦場にいる騎士では滅多に戦わない。

だから、このように斬り付けられるとは思ってはいなかっただろう。レイピアも刺突攻撃用の武器と覚えていただけだから。

斬り付けるといっても、斬るのが専門の剣ではないため、皮製の籠手ごと腕を叩ききるほどの能力はないが。カイルも、咄嗟に防いだため、動揺くらいしか誘えなかった。

「シッ!」

だが、主導権は握れた。突きと時折斬り付ける攻撃により、少し戦闘のリズムを狂わされたカイル。少しずつだが、確実に傷を負わせていく。

「チッ……メンドイな」

「ハア！！」

ツイン！と金属音が響く。綺麗な音が鳴るのは、ハルバードが持つ質の良い魔鉱石を使った剣だからだ。そして、この剣は魔法で鍛え上げられた剣だ。多少無茶しても折れることは無いだろう。切っ先に重量がないため、斬り付けた時のダメージは期待できないが。

鏑迫り合いから弾き出され、ふっと一息。カイルは多少切り傷を負ったが、決定打となるダメージは追ってない。むしろ、体力がなくなってきたているハルバードが不利だ。

早く決着をつけなくては……そう思ったときだった。

「仕方ねえ……“本気”出すか」

ずん、と下腹部に響くような殺気。金で雇われた傭兵崩れだって、

歴戦の猛者だ。ハルバードみたいに、訓練だけしてきた“お子ちゃま剣術”ではない。修羅の剣だ。

“殺す覚悟”を持った剣と、“殺す覚悟”を持たない剣では……  
相手にならない。

(やばっ!?)

自身の本能が、警戒の鐘を鳴らす。すぐさま自分等を囲む騎士隊を跳ね除け、脱出路を確保しようとしたときだった。

「逃がさネエよ!!」

背後から風斬り音。その音と共に、吹っ飛んだ。

立ち上がろうと、左手を使って起きようとする。……だが

(あ、あれ……動かない!?)

左肩を見る。そこには、血が滝のように流れ出ていた。深く肩を切り裂かれているため、普通ならもう“使い物”にならない。

「ッがあっ!？」

「もう、左手は使えなくなったな」

剣に付着した血を払い、徐々に近づいてくるカイルに恐怖する。

(くっそっ!! 《デジエネレイション変質化!!)

ハルバードの身体を闇の魔力が包み、瞬時に治癒を開始する。そしてすぐに剣を構え、体勢を整えようと

ぐちゃり

「ひぎゃあ!？」

「へえ、お前“魔法使い”か。闇と治療のセットかな？」

体が治る前に、傷口にもう一度突き刺す。先ほどの変質による治療が、金属の剣にて斬られた為に、その箇所が散ってしまう。

剣で防ごうにも、片手では大人の力を防ぐことは無理。魔法で反撃するも、金属の剣にて防がれ、再び蹴られる。

「あが!？」

「まだ再生するか。化け物みたいだな」

手首を吹っ飛ばされ、剣を落としてしまう。もう無理だ、とあきらめの色がハルバードの瞳に現れる。

(……俺、死ぬのか?)

「やつと魔力が尽きたか？」

ハルバードの身体の再生が止まる。そこでにやりと笑い、ハルバードをじっくりと見る。そこでふと気付くと、さらに口元を歪めた。

それは、探していた獲物だからだ。

「そういえば、宰相が探していた灰色の髪の餓鬼じゃないか。勇者の居場所を聞くのに丁度いいかもな」

残っていた右肩に剣を突かれ、呻き声を上げる。少しずつ剣を横に捻り、苦痛を与えていく。

「勇者の居場所を教えてくれれば……楽にしてやるが？」

その言葉に、怒りを覚えるハルバード。その矜持の目をみて、ふうとため息をはくカイル。

「やつぱりな。ま、いいや……“あばよ”」

肩から剣を引き抜き、高々と剣を構える。

(……死にたくない！)

……なら唱えよ

頭に響く声。その声と共に、記憶の欠片が頭の中へと入り込んでくる。

我が剣の名を……唱えよ 選ばれし“魂”よ

異常なまでの魔力がハルバードを包む。その様子に、カイルはすぐに飛び退く。

「チイツ！」

「《神から与えられし王の剣よ、絶対王なる我の名の下に集え》」

闇の力がハルバードを包み、体が徐々に再生していく。その光景に、ハルバードに攻撃しようとしていた騎士達に怯えが走る。

「来い！！《絶対王の剣》」  
カレトガルフ

「な、何！っ？」

スフィアの腰に差してあった《絶対王の剣》カレトガルフが突如震え始める。引っ張られる力に耐えられずにベルトから外すと、そのまま黒い力にて引っ張られてしまい……どこかへ消えてしまった。

「な、なんなのアレ」

「わからない……お母さんの剣がなんなになって飛ぶの、初めて見たから」

フィーネが呆然と剣が飛んでいった方角を見て、「追いかける？」とレティルがフィーネに聞く。フィーネは「やめたほうがいい、あつちの方向は騎士団の団長が陣を張ってたから」と言って止める。

「とりあえず、学校に戻ろう。……っ!!」

フィーネがそういつて学校までの道のりを先導しようとしたときだった。

目の前に、三人の騎士が現れる。

「なっ!?!」

「勇者がここにいるぞ!!」

その声を聞いて、わらわらと集まる騎士の気配を感じ取る。不味い、とフィーネは感じ取る。

「ウィンド・カーテン  
《風の幕》!!」

強い風と共に、周囲に土埃が舞い上がる。その瞬間に、フィーネはレティルに合図を送り走る。レティルはスフィアの手を引いて走る。

「逃げるよ！」

「どこに……っ!？」

「わからない!！」

飛び出した先。そこでは、フィーネが立ち止まっていた。青ざめた顔で立ち尽くすその周りには、弓を持った騎士隊が隊列を組み、こちらに向かって構えている姿だ。

「なっ!？」

「……っ!？」

レティルは驚愕の表情を浮かべる。囲まれていると気付かなかつた少女たちにとっては、待ち伏せされていた感覚に陥っていた。

そんなレティルやフィーネとは別に、スフィアは目を離せない人がいた。それは鉢合わせた騎士隊を指揮する人物が、スフィアの良く見る人だからだ。

「マールス宰相……っ!！」

「おやおや、こんなところで何しているのかな? “処刑”のほうは終わりましたぞ、勇者殿」

厭らしい態度でスフィアを見る。それに負けじと睨みつけるが、ふっとスフィアを笑うマールス。

「お友達かい? 魔法学校の制服を着ているってコトはその生徒

なのかな？いいね、多少なり戦えそうだから……そのまま勇者殿と一緒に北の戦線にでも付いて行ってくれるかもしれないね」

その言葉に、スフィアの顔色が変わる。拳を握り締め、ギツと睨みつける。

「まあ、勇者殿が大人しく付いてくるなら……その他の者には手を足すつもりは無いが？」

そういつが、勇者にかかわった者は見逃さない。必ず、勇者と関わりのある者を排除しようと動く宰相の毎度のやり方に、苛立ちを覚えるスフィア。だが、他に手は無く……

「私がそちらに行けば……本当に手を出さないのですか？」

「ああ、約束しよう。“私は”その子らには手を出さない」

ああ、やっぱり。とスフィアは俯く。前回も同じ手に引っかかったのを覚えている。

「……ごめん。せめて、二人は見つからないように……逃げて」

「スフィアちゃん！」

レティルの声に、振り向こうと思うがやめた。振り向いたら、進めない気がして。

「ごめん……っ……！」

宰相の方へ、スフィアは歩き出した。

「へえ、こんなところでなにやってんのマールス宰相。俺を追っかけてたんでしょ？浮気するなよ」

不意に、スフィアの頭上から声が聞こえる。

スフィアの前にふらっと降りてきたその姿は、まるで“死者の国の案内人”のような出で立ちだ。真つ黒な大鎌に髑髏の仮面。その姿に、騎士隊の指揮が駄々下がる。スフィアは呆然と死神の姿を眺めた後、ギツと睨みつける。

「貴様……よくも抜けぬけと現れたな！」

「いや、別に逃げていた訳じゃないしな。俺に会いたそうにしてたから、態々来てやっただけだぜ？」

本当は、こんなに喋らないはずの“虚無の死神”。ただハルバードがあんな口調で話してしまったため、合わせて喋っているのだが……なんともやり切れない感じ。

だが、目の前にあの“賢者”<sup>セイジ</sup>の称号を持つ者相手に、どうやって戦おうかと考える。一度あの闇の魔法でやられているため、なんとか上手くスフィア達から騎士隊を逃がさなくてはならない。

（一度、ハルバードが上手く対峙してくれたから……なんとか誤魔化せるかな）

先ほどから警戒して襲ってこないことから、ハルバードと対峙したことが上手く効いている様だ。

（宰相に、どうやって勝つか……だな）

手には、ハルバードが学校から持ってきてくれた予備の魔方陣カードの束。少ないが、これが無ければレイスは魔法が扱えない。それは、自身の属性が“無”という極めて珍しい属性なことだからだ。

本来は属性に“色”が付いているはずだ。光なり闇なり、人によって様々だが……レイスは違う。色が無いのだ。それは現在も、今後も色が付くことはない。それにより、普通の魔法は扱えない。このように、魔方陣というフィルターを通して魔法を行使しなくてはならない。魔方陣を用意する必要があるし、属性を持つ者よりも弱い魔法しか扱えないが……詠唱がいらないので一長一短だが。

だが、最近東都では注目されている属性でもある。無の属性は魔具の職人に極めて向いている属性なのだ。

ハルバードが持ってきてくれたのは、カードだけではない。レイスが作っておいた魔具を一通り持ってきては袋ごと渡してきたので、戦略に幅が出る。どれもあまり精巧なものではないので、使い捨てるつもりだが。

「さて、どうする？俺に会いたかったんだろ？あの餓鬼のように溶かしてやるうか？」

その言葉に、宰相の周りの魔力が高まる。魔法を行使しようとしているのがすぐにわかり、ローブで魔方陣のカードを隠しながら魔

法を行使する。

「《ラット・アイス腐敗する瞳》！」

「《イーゼス・ウォール絶対防御障壁》！」

宰相の闇の魔法に対して、光の防御魔法を行使し、防いだ。ほぼ切り札的な魔法陣だったのだが、これでやりやすくなったとレイスと思う。騎士隊の目が、怯えに変わっているからだ。

「チッ！」

下手に魔法を撃つのは、宰相は不利だ。お互いの魔法量がわからないのに下手を打てば、自分がやられてしまう。これは魔法使い同士の戦いでは当たり前のこと。

もし、自分が無くなってしまえば……あとは相手の為すがまま。

レイスもその思いからか、下手に手を出さない。相手を馬鹿にするような話をしてなんとかこの場を繋いでいるが、そろそろ限界だった。

早く、スフィア達を安全な箇所へ移動させなくてはいけないのに。

だが、そんな思いとは別に……一人の少女が、死神の背後から近づいてきた。

親の敵を見るような目つきで死神を睨み、詠唱を唱える。

「《原始の光よ、邪悪なる存在を打ち滅ぼす聖なる剣を作りたま  
え》……《ライトソード光の剣》っ！」

(……まじかよ、おい)

Step・20 “狂戦士”と“鬼神”

「…………お前…………何者だ？」

異常な魔力を纏うハルバード。その姿に、騎士隊に怯えが伺えた。

おにいちゃん

頭に響く声。懐かしい、だが同時に恐怖を感じる。なにか、忘れてはいけないことを忘れていた気がした。それと共に、忘れたい気持ちがある。

あした、やくそくの日だね

(約束？なんの？)

頭を抱えるハルバード。その姿に、隙があると感じたカイルはすぐ様部下に命令を下す。

「矢を射ろ！絶対に奴に近づくなよ！！」

その言葉を聞いて、隊員たちは各々の指揮系統通りに動き、クロスポウで狙う。

そして

「ハナテエ！！！」

部下の声と共に、騎士達は一斉に矢を放つ。それぞれが放った矢は雨のようにハルバードの身体に注いだ。

……筈だった。

ハルバードの身体から漏れる魔力にて矢は腐り落ちる。勢いを失った木の棒はハルバードの足元に転がる。

たのしみにしてるよっ

「や、め、ろ……」

徐々に漏れていく膨大な魔力。記憶の欠片に溺れる感覚。自分が自分でなくなるような恐怖に襲われ、必死にもがく。

……おい、ちゃん……

ざつ、と周りの景色が変わる。場所は、夢で見ていた“科学が進歩した世界”。そこで見えるは、黒い車。俯く茶髪の少女。厭らしい笑みを浮かべる男。父親。神社。ロープ。揺れる物体。そして…

…血の海。

「でやあああー!!」

一人の騎士がハルバードに斬りかかる。それは勇敢に、ではなく、ただ目の前の恐怖に我慢が出来なかっただけだ。

だが、今までの動きとは全く違う……明らかに“殺気を放った一閃”を放つと、騎士の胴体が鎧ごと離れていった。

声にならない悲鳴。その姿に目を覆いたくなる光景。だが、一人の少年はそのまま黒い剣を見て……にやりと笑みを浮かべる。

「……そうだ、思い出したぞ」

カイルはその姿に、嫌な予感がした。このときは早めにケリをつけるか……逃げるかだ。

「全員撤退だー!!」

カイルの言葉に、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う騎士達。だが、それを逃がすほど“彼”は甘くは無かった。

一瞬だった。

剣を振りぬいた直後、そこにあったのは

残骸。死体とはとてもいえるものではなかった。かろうじて生きているのはカイルと数名の騎士。それもカイル以外は瀕死の重傷だ。

「なんつー化け物だ」

カイルは、このような人物と一度だけ戦ったことがある。傭兵時代、自分の腕に過信しすぎていた時期だ。300ほどの傭兵団を率いて“悪魔”の討伐のため東のサンフェンケル大森林の奥に遠征したときのことだった。一人の悪魔に、瞬きの間に全滅だ。かろうじて、生き残ったカイルを王国騎士団に拾われたのだが……それでももう、あんな思いはこりこりだった。

(まさか、また“異界人”に鉢合つとはな)

“異界人”

この世界の者ではないこと。主に“悪魔”や“天使”を指す。外の世界からやってきた者は、大量の魔力と特殊な属性を持つといわれている。そのため、天使や悪魔と戦うにはそれなりの力が必要なのだ。

カイルは、魔法は扱えない。だが、この威圧的な魔力は感じ取れた。

「ま、拙い……っ!!」

ハルバードから力が放出される。それと共に、ハルバードはカイルとの間合いを一気につめた。

「グッ!!」

カツツバルゲルが悲鳴を上げる。もう一撃を食らえば、耐えられないだろう。だが、その時はすぐに来た。二撃目をすぐさま斬り返し、放ってきたためにカツツバルゲルは碎ける。

「なっ!!」

思いもしない剣術の力量。10歳前半が扱う剣術ではなつた。だがカイルは侮っていたわけではない。全力でも、それを裁ききれるかどうかわからなかった。

(……こいつっ!!)

剣の腕では、“ソドマスター 剣聖”の域を超えていた。明らかに、人間の力ではない。

「やはり、お前…… “異界人” だったか……」

剣を大きく振りかぶる。その動作に呆然と見つめ、カイルは目を瞑った。

そして、激しい鉄の臭いと共に、闇に意識が落ちていった。

『おい、何があった?!』

重症を負って朦朧としている騎士は、自らの上司の最後を目撃してしまふ。

「あ、ああ……」

『おい、どうした?!』

「カイル隊……は壊滅……した……」

『なっ?!?!? 誰にだ?!?!?』

再び、瀕死の騎士は団長を殺した少年を見る。最初は灰色に見えたが……良く見れば銀の髪に見える。紅の混じった銀髪に恐ろしいほど黒い瞳。その姿はまるで……

「……デーモン鬼神……」

その一言を発すると、騎士は息を引き取った。



Step・21 敵（カタキ）……？

（　　）　　なんで、ここにいるのよ……っ！）

目の前の死神の姿を見て、肩を振るわせるスフィア。それは、本来幼馴染の“敵”<sup>カタキ</sup>と聞いていた者の姿だ。

“光の剣”<sup>ライトソード</sup>を手に、死神を睨む。なぜか、自分に怯える節があるその姿に疑問を持ったが……それはどうでもよかった。

スフィアは、人生で初めて、“殺気を籠った一閃”を死神に振るう。

「　　っ！？」

重い金属音が響く。スフィアの一閃を大鎌の柄で防ぎ、そのまま鏝迫り合いをする。だが、死神はかなり動揺しているのか、反撃すらない。

そんな様子に、スフィア以外の全員が疑問に思う。

……何故？つと。

「おいっ！！やめろ！！」

「スフィアちゃん！！」

フィーネとレティルの言葉も、スフィアの耳には届かず……鬼気迫る雰囲気のまま死神を追い込む。

しばらくの鏢迫り合いから、スフィアは死神を押し出し、飛び掛って切りつける。

何度かの応酬。そこで徐々に自分を取り戻してきた死神。冷静になり、一番良い方法を考え付く。

「……仕方ねえ」

舌打ちをし、再び野鏢迫り合いからいきなり力を抜いてバランスを崩させる。そして一步下がった後に大鎌を切り上げ、スフィアの光の剣を弾く。

驚愕の表情をするスフィア。そこへ、トドメに鳩尾に柄の先端で突く。

「くはっ」と息を吐き出し、スフィアは昏倒させられる。地面に伏せる前に死神はスフィアを抱え、ホルスターから2枚の魔方陣カードを取り出す。

「お前ら、ついて来いよ！」

一枚をレイルに投げる。それは音声転送用の魔方陣で、対となるもう一枚と交信ができる魔法陣だ。それともう一枚を、警戒して攻めてこなかった宰相達に投げる。

「ファントム・フレイルム　「まやかしのの炎」」

激しい炎がこの場にいた全員を包む。慌てふためく騎士団を尻目に、スフィアを肩で担ぐように抱えなおすと、路地へと入ってしまう

った。

「っ!?!?」

「スファイアちゃん!?!」

『そこから左だ』

レティルが持つ魔方陣カードから声が聞こえた。二人は顔を見合わせ、軽く頷いた。フィーネにカードを渡し、フィーネを先頭に走り出す。

『そこは右だ』

『そこで呼吸十回分待機しろ。……いいぞ、そのまま真っ直ぐだ』

死神の指示通り、二人は路地を走り抜ける。後ろからは何人かの騎士が追いかけてきていたが、学徒でも軽装のフィーネ達を追いかける速さは無い。戦えば一瞬でやられてしまうが。

『そこに入れ』

しばらく進む。すると、そこは行き止まりになっていた。袋路地の奥には、一軒の廃屋。三階建てで、かなり雨風に曝されたのか…ぼろぼろになっている。すぐにでも崩れ落ちてしまいそうなその建物に一瞬躊躇したが、その周辺には明らかに騎士が血走って探す様子が感じられた。

『早く!?!』

その声と共に、廃屋の扉が開く。背後から騎士の気配がするので、急いで二人はその中に入った。

がちやり、と扉の鍵が自動で閉じられる。一層警戒して二人は各々の武器を構えた。

レティルは可愛らしい短杖。安物の学生用の杖だが、使いやすい品物。魔力の燃費は良く、最近の女子学生には人気の一品だ。

それに対し、フィーネは無骨な対となっているソードブレイカー二本。本来サブ武器扱いの通常のソードブレイカーとは違い、少し大きめに作られているその剣は、主武器として扱える。勿論、こんな使い方はフィーネと、フィーネに剣術を教えた人物しか扱わないのだが。因みに、一応魔鉱石製なため、魔法を使うには問題はない。

前衛にフィーネ、後衛にレティルが得物を構えて廃屋へと進む。まだ最近まで使われていたのか、外見とは違い綺麗だ。

一階ずつ順番に調べていく。二階、三階へと進むが特に何も無かった。あったのは、人が住むだけの最低限の品物だけ。勿論、ほとんどが使いものになるかは不明だが。

そして、三階の奥の部屋までたどり着く。一番大きな部屋だけに、二人はより一層警戒して中に入ると……

部屋の中心に、スフィアが横たわっていた。

「スフィアちゃん!!」

レティルが叫び、近づこうとする。……が、それを静止すると部

屋の隅を睨みつける。そこにいるのは、先ほどの死神だ。

「おい、どういっつもりだ？」

フィーネは、死神を睨みつけて両手のソードブレイカーを構える。

だが、死神は踵を返し、さらに続く奥の部屋へと進もうとする。

「おい！」

「そいつを頼む。俺は仲間を助けなきゃいけない」

その一言を言い放つと、そのまま奥へと進んでいく。

『そこから動くな。後で魔法学校の関係者が迎えに来るはずだ。そのときはお前らが知っている者が来るはずだから、見覚えの無いやつが来たら問答無用で攻撃しろ』

カードから声が聞こえると、ぽんつと軽い空気の破裂音が聞こえると共に燃え上がった。驚いたフィーネとレティルだが、それよりも死神の素性が気になっていてそれどころではなかった。

「本当に……スファイアちゃんの幼馴染の敵なのかしら？」

「…………先ほどの魔法は…………なるほどな」

幻影の炎に惑わされず、炎の中心でただ頷くマールス宰相。一応、彼は“賢者”<sup>セイジ</sup>の称号を持つ魔法使い。魔法が行使されれば、その魔法の公式など検討がつく。

死神は、カードに書かれた魔方陣に魔力を通し、魔法を行使するという珍しい魔法使いだ。魔方陣自体を扱うにはそう珍しいことではないが、死神ほど上手く扱うには同じ“無属性”の魔法でなくてはいけない。

魔方陣は、属性を持った魔力を流すと、威力が半減してしまったりするのだ。

そのため、レイス「死神ということがわかったのだが…………処刑の件でその根拠が失われつつあった。だから今まで下手に手を出せなかったのだが…………処刑場と今の魔法では明らかに違う魔法のタイプということがはっきりとわかったのだ。

つまり…………

「カイル団長は今どこに？」

宰相の隣にいた騎士に問う。いつもと変わらずな感じで、「はっ！」と返事をする。背筋を伸ばす。

「死神の仲間と思われる者と交戦中とのことです」

「ふむ……その仲間はどうな風貌だ？」

「フードにローブで全く顔が見えず……体格からして子供のと  
としかわかりません」

「ふむ、また勇者に関係する餓鬼か……なら早く“処理”してこ  
ちらに來いと伝える。こちらはあの“クソ魔法学校”周辺に陣を引  
け」

「はっ！」と答える騎士。すぐさま部下に音声転送用魔具にて伝  
える……が。

「あ、あの……」

「どうした？」

しどろもどろで、顔が真っ青になる騎士。

「……団長が率いていた隊が……壊滅したそうです……！！」

「なっ！？」

龍王騎士団の団長。ソードマスター “劍聖”と堂々と戦える唯一の人物。ベルセ “狂戦  
士”との異名を持つ傭兵で、彼に勝つには“異界人”か“劍聖”し  
かないと誰もが信じていた。

ローワン・ナイッ 龍王騎士団の軸である団長の隊が壊滅。それは今後の士気に関  
わる重大なことだった。

“王都組”と“従者組”。双方どちらも、大切なモノが崩れ始める。それは、今まで止まっていた“勇者”<sup>スライア</sup>の運命の歯車がやっと廻り始めたためだった。

そして、もう一つの歯車も動き始める。

双方が本格的に廻り始め、噛み合うには……まだ時間が足りない。



二人の女性の影が、独房がある回廊を歩く。最初は二人とも暗い気持ちで独房へと向かっていたが、ふと最奥の扉が開かれていることに気付いた。

「まさかつ!!」

マリーは急いで独房に入るが、そこで呆然と立ち尽くす。目の前には、閉じ込められている人がいないからだ。空になった独房には、彼女の制服の他に、渡しておいた髪染め粉の除去剤のケースが空となってぽつんと放置してある。

「マリー校長……」

「これは私のミスです。後でハルバード君に何て言えば……」

意識を学校全体を覆い、スフィアを探す。それでも、彼女が見つからないところを見ると、彼女は外に行つたと理解する。

「すぐに冒険者組合と傭兵組合に連絡して探してもらわないとっ  
！」

アンネローゼがすぐに地下の回廊を走る。マリーも同じように後を追うが、ふとポケットに入れていたカードが光りだす。

「……これは……！」

そこには、魔方陣が書かれているカード。魔方陣が淡く光り、ま

るで呼びかけるように弱く点滅する。

それを見て、ふうとため息を吐く。とある人物が生きていることが確認できたからだ。そして、マリーは真剣な趣でそのカードに、慎重に魔力を流した。

灰色の少年は、全身真っ黒な血に染まっていた。その血は、ほぼ騎士団の血だ。彼の周りにいた騎士団員はほぼ、原型をとどめないで死んでいる。

(……思い出した、全部……いや、全部……か?)

自分には、“前世”で妹がいた。父親とも暮らしていたが、それは父親ではないとの意識があった。そして、記憶の最後の日に……妹となにかの約束をしていた。そして……それが父親によって破られてしまったため……“端瑠”は父親を殺したのだ。

その“殺した”ところだけが、どうも生々しく覚えていた。

(……頭が、痛い)

ふらふらと頭を抱えながら、流れてくる記憶の欠片に気を失いそうになるのをこらえて、必死に都から離れていく。

(スフィア……大丈夫だっただろうか……)

ふと、見知った魔力を感じる。水のような透明感のある魔力だ。

今のところ、ハルバードの記憶ではこの魔力の持ち主は彼しかいなかった。

「おい、大丈夫か？」

現れたのは、真っ黒なローブに髑髏の仮面。……レイス虚無の死神だ。騎士団の惨状と見て、顔が引きつる。

「うわ、これはヒデエ………いったい、どうしたんだ？」

「俺が全員殺した」

「は？」

淡々と答えるハルバード。その姿に、レイスは驚きの声を上げる。

「………全員、殺したのか？」

「ああ」

ひとつ返事をする、ハルバードはふらふらと都から離れ、森へと入っていく。その様子に、レイスは黙ってついていく。

少しほど、血なまぐさい臭いが届かなくなるまで歩き続けると、

ハルバードは崩れるように腰を下ろした。

「お、おい！」

「大丈夫だ。それよりも、スフィアは？」

「あ、ああ。今は隠れ家にいるよ。マリー校長に連絡を入れてお  
いから、すぐに迎えに来てくれると思う。隠れ家は特定人物以外の  
進入不可の魔方阵があるし、入ろうとしたらすぐに俺へ連絡が入る  
から、とりあえずは大丈夫だ」

それをきくと、ふうとため息をつく。とりあえずは、両方とも安  
全だ。

「ところで……お前、人を殺せるのか？」

突然の質問。一瞬目を開いて驚くが、すぐに目を瞑って返答する。

「……俺とは違う人の記憶の中”でね、一度殺したことがある  
んだ。だから、人を殺すのに迷いがなかった」

まあ、どちらかといえば、ほぼ意識が飛んでたから迷う余裕すら  
なかったけど。そう付け足すと、レイスは不思議そうに聞き返す。

「違う人の記憶？」

その問いに、少し苦笑いのハルバード。

「気にするな。それよりも、俺らこれからどうする？この周りに  
は、騎士団がうようよしているけど」

「ん……マリー校長に連絡する手段もないし……魔具も魔方阵カードも使えそうなの何もないし……」

「使えない奴」

「……はは……」

力なく苦笑。そんなレイスを尻目に、ハルバードは《絶対王の剣<sup>カレトウエルフ</sup>》を鞘にしまい、呟く。

「仕方ない……あまり使いたくなかったけど、最終手段。真夜中、闇にまぎれて学校に侵入するしかないか」

「まあ、それしか方法はないと思うけど……真夜中でも、騎士団は多いと思うぞ。大丈夫か？」

「それはまあ、最終手段とやらだよ」

ハルバードは空を見上げる。そこには、真っ赤に染まった夕日があった。

夜まで、あと少し。

(……………)

スフィアが目を覚ます。それとともに、見慣れた顔が自身を覗いているのに気づいた。

レテイルだ。

「スフィアちゃん、大丈夫？」

「あ、うん……ここは？」

起き上がり、綺麗な部屋の中心で寝かされていることに気づく。この場所はスフィアの記憶にはない。

「ここは……隠れ家よ。“死神”のね」

「……は？今なんて……」

「“虚無の死神”の隠れ家だよ」

スフィアの後ろから、少しキツめの女性の声が聞こえる。振り向くと、そこには薄緑の髪の少女……フィーネが、窓から警戒するよう外を覗いていた。

窓の外は、夕暮れに近く……陽が沈みかけていた。

「な、なんで……そんな奴の隠れ家に……」

「ここから下手に動くこともできないからね。一応、“死神”が後で学校の人間が来るよう手配してくれてるらしいけど……」

「……それ、信用できるの？」

「できるわけじゃない。だからこうして見張ってるのよ。ってか、起きたのならいつでも逃げるよう準備しなさいよ」

「……ごめん」

不機嫌そうに話すフィーネ。スフィアはその原因に見当がついていたので、とりあえず謝っておいた。

謝罪の言葉を聞いて、さらに不機嫌そうになるフィーネ。鼻を鳴らし、窓の方向へそっぽを向いた。

その様子に、あえてその間に入ろうとしないレティル。スフィアを弁解できないからだ。

二人を危険に巻き込んでまで、あの死神に切りかかったことに。

気まずい雰囲気の中、三人の足元から魔方陣が浮かび上がる。

「うわっ！」

「きゃっ!?!」

「えっ?」

それは、“転移”の魔方陣。学校へとつながる、抜け穴。

本来は有事のときに、生徒を学校外へ逃がすためのものだが。

眩い光に包まれた後……そこは、三人とも見たことがある場所であつた。

「……第三訓練所？」

剣や槍などの武術を学ぶための訓練場。学校地下一階にある訓練場だ。

その訓練場の中心に浮かび上がっているのは、あの足元から現れた魔方陣と同じもの。そして、三人の前に一つの影……

「……マリー校長っ」

スフィアがつぶやく。非常に厳しい表情のマリーに、三人はただ顔が強張る。

魔方陣の光が消え、三人をマリーが確認すると、マリーは一步步三人へ歩き出す。正確には、スフィアへ。

スフィアへ近づぐことにマリーの表情が厳しくなり、眉間に力が入る。

そして、スフィアの目の前に立つと……乾いた音とともに、スフィアの頬を引つ叩いた。

「貴女……ホンツツットに身の状況を理解していないようですねっ！……一体、何のために貴女を独房なんかに入れたか理解しているのですか!？」

叩かれたことを理解するのに時間がかかったスフィアだが、それに理解すると拳に力を込める。

「……嫌なの！私の友達が、私の所為で犠牲になるのは！」

「だから、友達でないその二人はどうでもいいのですか！？貴女が行った行動の所為で、その二人は命の危険に巻き込まれたのですよっ！私の仲間が気付かなかつたら……その二人は確実に“北の戦線”行きになってたでしょうね！」

「そ、それは……っ！！」

「それと、貴女が出て行った所為でかなりの人間が貴女の為に“命を張って”動いたの、気付いてます！？貴女の身勝手な行動の所為で何人死傷者が出たと？」

「っ！」

死傷者。その言葉が出た時点で、今まで顔を真っ赤にしていたのが一気に青ざめるスフィア。

「……誰か、死んだの……？」

「今回の騒動で怪我人が五人。連絡を取れないのが二人。その二人のうち一人は……ハルバード君です」

「えっ……なんでハルまで！？」

「ハルバード君が一番適任だったからです。闇魔法の実力は教師を含めても、この学校でトップレベル。そして何より、“死神”と

背格好が似てたのが理由ですね」

「い、意味がわからない……なんでハルを巻き込んだの！」

ふう、とため息をつくマリィ。レイスからは黙っておくように、といわれていたのだが……この場合、言ったほうがスフィアのためだと考えて。

「死神の格好をさせて、レイス君を殺すために」

一瞬、話していることがスフィアにはよくわからなかった。

マリィは丁寧に、今までの作戦を話す。

レイスが死神をやっていること。そのことがばれて、現在大変なことになっていること。

そのため、ハルバードに死神の格好をさせて闇魔法の幻術にてレイスを殺すのを周囲に見せ付ける。レイスは死神でない事とともに、レイスはこの世の者でないということにして騎士団の目を欺くため。

レイスを助け出したら、二人は上手く地下下水道を使って逃げる筈だったが……スフィアを見つけて、レイスとハルバードはスフィアを助ける為に動き……そして現在行方不明なことを告げた。

「そ、そんな……じゃあ、死神が……レイス？」

「そう。意味わかりましたか？貴女の行動の所為で二人が行方不明なのを」

ぺたん、と腰が降りる。うわごとのように、「ハル……レイス……」と呟く。

その様子を尻目に、呆然と立ち尽くす薄緑と栗色の少女に目を向ける。

「さて、貴女方二人の処遇ですが……」

突然の言葉に、二人は背筋をぴしっと伸ばし、緊張させる。それをみて、表情を変えずに淡々と告げる。

「今回の件にて、騎士団は貴女方を指名手配としました。見つけ次第、北方戦線に送り込まれてしまうでしょう。そのため、しばらくは学校領内外出如何なる理由でも禁止です。異論は聞きません。わかりましたか？」

「……はい」

「……」

フィーネは小さく頷き、レティルはなにか言いたそうな顔でにらむ。

「例え、“貴女”でも異論は認めませんよレティル様。早く寮に戻り……ん？」

ふいに、結界を通り抜ける二つの影を感じ取った。本来は、あり

えない筈の通り抜け方。でも、それを実行できそうな人間は一人。

直後、地下まで響く音と共にガラスや物が大きく破損する音が聞こえる。その音を聞いて、マリーはため息をついた。

「全く……結界を力づくで通り抜けるとは……さて」

上の空になった意識を戻すため、軽くスフィアを引っ叩く。急に引っ叩かれた理由はわからず、少しマリーをにらみつける。

「ほら、行きますよ。説教はまだまだ足りないのですが……“思ったよりも”帰るのが早かったので」

「おまっ、もう少し慎重になれよ！かなり大きな音がしたぞ！！」

「んなこといったって、力加減が難しいんだよ、コレ」

闇の力を纏い、力任せに都外から飛んで結界を力づくで突っ切り、学校へ飛んできたハルバードとレイス。といっても、闇の魔法でそんなことは本来できないので、ほぼ無理やりの行使の仕方。夜だからそこまで目立たずに飛んでこれたのだが、かなり無茶した二人。

学校の壁をぶち破り、校長室へ突っ込んだのだ。

「ま、これでマリー校長も感ずいてくるでしょ」

「そんなことをしなくても気付くわよ。貴方は気配を消すのを勉強したほうがいいわね」

苦笑いをしているアンネローゼ。校長室で書類整理をしていた最中だが、ハルバード達が突っ込んだ所為でぐちゃぐちゃになっている。

「あ、いたんですか先生」

「……君、何気に酷いよね」



Step・23 若い者に任せましょ

「さて、スフィアは？」

「無事だよ。さっき、隠れ家からここに転移させたところ。今マリイ校長が嚴重に叱り付けてるから」

アンネローゼは、瓦礫に埋まった資料を見てため息を吐く。それを見てみぬ不利をしながら、少し安堵した表情でレイスへ視線を送る。

「わかってるよな？」

「ああ、わかってるよ。俺は先に部屋へ戻るわ。その話はマリイ校長には話しておいたから、何とかしてるだろ」

そう言っつて、レイスは校長室から出ようとして……とまる。

「あゝあ……思ったよりも酷いなコレは……アンネ先生、少しは俺も手伝う……あ」

ハルバードも、崩れた瓦礫をみて呟いた後にアンネローゼへ向くが……途中部屋の入り口を見てしまったと思う。

そこにいたのは、マリイ校長と自分と同じくらいの少女3人。

「マリイ校長……黙っとく約束、破りましたね？」

「ごめんなさいね。でも、黙っておくとまた同じ事を起こしちゃうと思って。真実を言ったほうが、多少なり効果がありますから」

ため息を吐くハルバードに、今すぐにでもこの場から逃げ出した  
いレイス。その二人の視線は、一人の少女だ。

「ハル……レイス……？」

「よっ」

「……おう」

口元を隠していた布をはずして、軽く手を上げて返事をするハルバード。そして髑髏の仮面をはずして答えるレイスの顔を確認して……ぼろぼろと涙をこぼして、レイスへと駆け寄った。

「……レイス、無事で良かったっ！」

「うわっ!？」

レイスに抱きつくスフィア。驚き、戸惑うレイスを見て、にやにやと笑うハルバード。途中、アンネローゼは「ハル君の馬鹿!なにやってるのよっ!盗られちゃうわよっ!」と呟いていた気がしたが、聞かなかつた事にする。

「ごめんね、あの時気付かなくて……っ!斬りつけちゃって……っ!」

「いや、7年振りだから仕方ないさ」

やっと、覚悟をしたのかレイスも腕に力を込める。その様子を見て、ハルバードはマリーとアンネローゼにアイコンタクトして部屋へと出る。

「あとは、若いもん任せましようや」

「君、何歳なのよ」

スパン、とアンネローゼに軽く叩かれた。

「さて、どうしてスフィアが独房から出たのか詳しく教えて」

校長室から少し離れた、図書室にてハルバードは話を切り出す。その場には、アンネローゼとマリー、そして女生徒2人がいる。女生徒2人はその辺から椅子を引っ張り出して座らされている。

「その2人が、脱走に手を貸したのですよ。全く、どこから聞いたのやら……」

ぎっと2人をにらむ。薄緑の髪の少女はビクツと体を震わせ、栗色の髪の少女は目を伏せて黙っている。

その2人の顔を覗き込むように近づき、ゆっくりとハルバードは質問する。

「名前は？」

「……フィーネよ」

「レテイルです。というか、同じクラスですよ？」

薄緑の髪に碧眼の少女。目つきは非常に悪いが、少し震えながら答えたのがフィーネ。そして、栗色の長い髪に、体系は細めで小柄な女の子がレテイルと名乗る。レテイルは、落ち着かない様子のフィーネと違って、堂々とした態度で答えた。

「あ、ごめん。あんまり人の名前や顔覚えるの得意じゃないんだ。……本題だけど、レテイルにフィーネ……“どこまで知ってる？”」

ピリピリとした場の緊張感に、一層フィーネが顔を強張らせる。ただ、女の子みたいな感じで覚えているわけではなく、子猫がボス猫に怯えながら威嚇しているようか感じが正しい。

「スフィアちゃんが“勇者”で、学校に保護されているってのと……幼馴染のレイス君を助けに行きたい……ってくらいかな。あと、王国騎士団に追われていて、親と一緒に逃げてるのか」

「ん〜結構知っちゃってるな……マリー校長……こいつらどうする？」

どうする？の言葉に、少し反応を見せるフィーネ。秘密を知ったために、一瞬殺されるかと感じた。

そう思ったのは、微かに香った血の臭いから……少しだけフィー

ネは血の臭いに敏感なため、そう連想したのだ。

「なんか、悪役っぽいですよハルバード君……あ、大丈夫ですよ、生徒にそんな悪い扱いはしません。まあ、授業をサボって学校郊外に抜け出し、問題を起こしていたのだから少しは罰則を与えますがね。それもあくまで、学校の教育に沿った罰則ですので多少なり若者にとっては面倒事ですが……」

それを言うと、少しだけフィーネの緊張がやわらかくなったのを感じた。それでも、まだガチガチの緊張感が場を包み込んでいるし、レティルは目を伏せたままだ。

「でも、この件については黙ってほしいのですよ。彼女を危険に晒すのは私たちにとっては避けなければいけません。もちろん、生徒である貴女方も守らなくてはいけませんから。……さて、両方両立できてお互いが一番都合がいい状態……レティル様なら、分かりますよね？」

「……味方に、引き込もつてことでしょうか？」

レティルが今まで伏せていた目を、マリーへと向ける。その目は、警戒心に満ちている。

「ちょっと違いますね。仲間というよりこちらの保護に入ってほしいだけです。不自由はしますが、安全は保障します」

「断ることは？」

「もちろん、貴女方に拒否権は……あ、レティル様はありますね。ですが、フィーネちゃんも元貴族とはいえ、守ってくれる家族がい

ませんから。レティル様一人なら家族が守ってくれるかもしれませんが、一緒にフィーネちゃんを庇うことは無理ですからね」

その言葉を聞くと、レティルはフィーネを一瞬見る。どうすれば分らず、フィーネは狼狽しているだけだったが……その様子を見て、「仕方ないですね」と呟くと軽く頷いた。

「保護対象って事は……私たちは、なにか仕事は任されたりしないですよね？」

「スフィアちゃんの遊び相手くらいですかね。それくらいは大丈夫でしょう？あ、グループ活動も少し抑えてほしいのですが……」

「それは……少し無理ですね。私たち2人が始めたことですから」

「ふむ……」と少し考えるそぶりをするマリィ。ふと、ハルバードと目が合った気がした。嫌な予感がしたハルバードは、少しの間視線を窓へ向けようとすると……

「ああ、ならハルバード君がレティル様のグループに入れればOKとしましょう。そのついでに、スフィアちゃんも入れれば監視がしやすいわ。それに、スフィアちゃんとハルバード君にはチームワークを覚えてほしいと思っていたから、ちょうどいい機会です」

案の定、嫌な予感が的中した。

結局、そのままマリーとアンネローゼが話を進めていき、ハルバードとスフィアのグループ参加は決定してしまった。

グループで依頼を受けるとき、必ずマリーかアンネローゼに連絡をすること。いざとなったらいつでも連絡が取れるよう、全員には緊急連絡用の音声転送用の魔具を持つておくことを約束させられる。あとは、しばらくは王国騎士団がうるうるしているから自粛するよう言われる。

「これだけで済むとは……思ってなかったよ」

図書館で退出間際、レティルがそう呟いた。学校が裏で何かをしていることを感じていた2人は、もっと悪いことをしていると思っていたらしい。最悪、外国へ売り飛ばされることを覚悟していたとか。

「馬鹿だよなあ……学校がそんなことしてれば、すぐに問題になるっのに」

「う、うるさいわよっ！……というか、まだハルバード君のことが謎のままなんだけど」

女生徒2人を寮まで一緒に歩いているときにそんな話をされ、ぷ



お休み」

手を振り、さっさと部屋に入ってしまった。それだけ、今日の出来事で疲れ果てているのだから、仕方ない。

「おう」とだけ返事をし、先ほどから無言だった少女に話しかける。

「フィーネはこの廊下の置くだろ？ここでいいよな。……んじゃ、お休み」

手を振り、反対方向である自分の部屋へと進む。

フィーネ自身は、何もせずただ去っていくハルバードの背中を見て……舌打ちをして、踵を返した。

## Step・24 罰則。そして保護活動

処刑から翌日。

とある三人の少女と、とある一人の少年は校長室にいた。

何をやっているかというと……

「……なんでこれを生徒にやらせるかなあ……」

「しかも、ハルが壊したのに……なんで私たちに……」

「……………」

レティルとスフィアがぶつぶつと文句を言う。彼女等が行っていることは、前にハルバードとレイスが学校に帰還した時に壊した壁の瓦礫の除去、及び埋もれている書類等の洗浄・整理。

今日からしばらくの間、朝と放課後に罰則として指示されたものだ。ちなみに、魔法禁止令も出されているのでほぼ手作業。

スフィアとレティルはほぼ肉体労働派ではないので、少し辛そうに瓦礫から書類を掘り起こす。それでも、結構慣れてきたのか作業は捗っていた。先ほどから一言もしゃべらないフィーネは、器用に瓦礫を撤去してバケツの中に入れていき、外へと運び出す。そして

……もう一人、ぶつぶつと文句言いながら瓦礫を運ぶ少年の姿があった。

「……なんで俺なんだ？なんでハルバードの奴は罰則に含まれてないんだ？」

黒髪に黒い瞳。背は高く、比較的細めな体つき。……“虚無の死神”と呼ばれている少年レイスだ。

あの後、マリーに呼び出されて……嚴重にお叱りを受けた。原因は、勝手に行動して、さらに捕まった所為で多数の人たちに迷惑をかけてしまったからだ。

本来は、彼も学校側にとっては“保護”の対象となっている。実は“虚無”と名づけられた意味……それは、意味もなく間諜活動をしている者という、ほぼ“存在価値無し”の密偵。だが、かなり重要な情報も手に入れていたためにあちこちでは頻繁に命を狙われていたのだ。

それを知らずして、なんとなく格好付けでそのまま“虚無の死神”と名乗っているのだが……それを知るのはまだ先のこと。

学校に保護される前から活動していたのだが、学校に忍び込んだときにマリーに捕まってしまい……そのまま保護された。だが、それ以降も何度も抜け出しては……間諜活動をしているのだという。

「ま、勝手に抜け出したんだから……仕方ないよね」

「……」

レティルのその突っ込みに、黙って瓦礫を外に運ぶことにした。

「呼び出してごめんなさいね、ハルバード君」

「いえ、別にかまわないですよ」

仮の校長室として……現在の多目的室を校長室として使っている。多目的室といっても、魔力検査や健康診断などに使うくらいなので、そこを占領しても特に問題がない。

強いて言うのなら……無駄に広いため、変な空間がなんとなくだが部屋の寂しさをかもし出している。

「それで、用事とは？」

「あ、いえ………たいしたことはないのですが、とりあえず報告でローワン・ナイツ“龍王騎士団”の動向ですが、やはりあの4人を草の根分けて探しているようです。暫くは外出禁止ですね」

「では、当分はグループ活動どころか……課外授業は禁止ですね」

「そうですね。後ついでに、魔法学校への立ち入り捜査を行うと

の報告を間諜から連絡が来ました。その間ですが、ハルバード君にはあの子たちを隠れ家に連れ出してもらおうよう頼みたいのです」

「隠れ家って言うのは……この前使ったやつですね？」

「いえ、別の隠れ家です。いつ来るかまでは分かりませんでした。が……いつでもいけるよう準備しておいてください。いざというとき、貴方だけが頼りですから」

「……頼り？俺がですか？」

その言葉に、少し疑問を浮かべて言葉を返す。

「ええ、スファイアちゃんを都まで守り、つれてきた件といい、レイス君の救助の件といい……貴方は、少し戦いなれてますよね？」

「まあ、一応自警団でしたから……もうどうなってしまったか分かりませんが……」

そういつて少し顔を曇らせるハルバード。それをみてマリーは一枚の書類をハルバードに見せる。

「辺境の自警団は、やはり全滅しているようです。遺体も、若干数確認できていませんが……大多数の遺体が森から発見されました。ですが、彼らのおかげで大多数の村の者たちが助かっています。彼らの死は決して無駄ではないですよ」

その言葉で、「やつぱり……」と声を荒げるが……が、すぐに顔を上げて、マリーを見る。

「わかりました。できる限りがんばってみます。連れ出すルートはどうするのですか？」

「もう下水道は使えないですし、転移魔方陣も妨害魔法で上手く作動しないでしょう。ですが、貴方には姿を消す闇の魔法がありますよね？」

「確かに、ありますが……あれは若干、姿を見えにくくさせるだけです。そこまで見えなくは無理ですよ」

「それで十分です。私が捜査の妨害として、騎士団と戦いますから、その隙に逃げてください」

「……えと、それって大丈夫なんですか？騎士団と戦ったら、王都に本格的に逆らうって事ですよ？ってことは……」

少し不安げに質問してくるハルバード。にこやかに微笑み、ハルバードに渡していた“自警団生存報告書”を取り上げ、新たに羊皮紙を渡す。

「大丈夫ですよ。子供がそんなこと心配しなくても、私たち大人が全部片付けます。それよりも、いざとなったらお願いしますね？いつ捜査が行われるかわかりませんから。あ、これが脱出ルートです。学校の裏庭からこの道を、貧困街へ出ます。そのままこのルートで行けば隠れ家へつきますので、暫くはここに隠れていてください」

「わかりました。では、俺は剣術の鍛錬に行きますのでこれ……」

「あ、待ちなさい！」

部屋を出ようとするハルバード。それを引き止められ、少し不機嫌気味に引き返す。

「貴方、模擬戦サボる気でしょ？一応貴方も生徒なんですから、絶対に参加してくださいね？」

「……まあ、サボろうとはしてましたけど……なんでですか？」

「貴方の一番の役割、忘れてませんよね？」

「……役割って、なんでしたっけ？」

はあ、とため息をついて片腕で頭を抑えるマリィ。

「今のスフィアちゃんの“従者候補”探しです。忘れましたか？」

「……模擬戦で、見つけると？」

「模擬戦で決めるとはいいいませんが、良い素材が見つければとりあえず唾をつけるのがスカウトマンの基本動作です。実際に手合わせしたほうが、色々と感じるところもあるでしょう？」

「……分かりましたよ、出ますよ。ほかに用件は？」

「もうないですね。剣の鍛錬、がんばってください」

微笑むマリィに、少しだけ苦笑いのハルバード。仮設の校長室か

ら出ると、ため息を吐いて……

「……ま、がんばりますか」

そう呟き、いつもの中庭へと歩き出した。

「アイタタタ……」

筋肉痛で動けないスフィアとレティル。ソファーであちこちを揉み解しながら、湿布薬が塗られた葉を体中に張る。アンネローゼからもらった物で、結構効果があるから、と渡されたものだ。

フィーネは腕や足に無言で張っていくが……特段、疲れた表情は見せない。

「さすが、フィーネちゃんね。あれだけ動いても特に疲れた表情がないって言うか……ん？」

「……………」

無言で、腕や足をさすっているところを見て……レティルは少し苦笑い。

「そういえば、フィーネちゃんって弱みを見せるのが嫌いな性格だったね」

「……………」

黙って俯くフィーネ。その姿を見て、少々声をかけ辛いが……

「あ、あの……フィーネさん」

「フィーネでいい」

「…………じゃ、フィーネと……レティ。……昨日は、巻き込んで本当にゴメンっ！」

立ち上がり、二人に頭を下げるスフィア。その姿に、フウとため息混じりにフィーネを見るレティル。フィーネも、少しだけ表情は柔らかい。

「ま、私たちから首を突っ込んだものだし。ね？」

「…………アタシ達の実力不足もあるしね」

2人の言葉に、顔をあげる。その目から、少し涙ぐんで……

「その代わりに、もう無関係じゃなくなったんだから……遠慮なく私たちに相談してね？」

「むしろ、黙って動かれると面倒だから……言えよ？」

「フィーネちゃんは素直じゃないなあ……これでも、真っ先にス

フィアちゃんを心配してたの、フィーネちゃんなのよ？」

「ちょ、それを言うな!!！」

「いいじゃない、いいじゃない。減るものじゃないし」

「増える減るの問題じゃないのよ!!！」

あーだこーだ、2人のやり取りを見て最初は呆然としていたが…  
…少し涙を浮かべながら、2人に向かって微笑んで…

「……………ありがとうっ」

小さく、呟いた。

その夜、スフィアは友達ができたような気がしたのだった。

「……………けどさ、あのハルバードって奴……………何者なんだろ。アイツ、絶対に素人じゃないわよ」

「ん……………ただの保護つてわけじゃなくて、色々と仕事を任せられてるよね。本当に、何者なんだろ……………スフィアちゃん、分かる？」

「えっと……………そういえば、ハルのことぜんぜん知らないなあ……………  
村で、ハルのお師匠に剣と魔法を教わった……………てくらいしか」

「  
師匠？  
」

Step・25 黒い剣

「あーっ！お母さんの剣！！」

「ごめん、少し借りてたんだ」

夜、ハルバードはスフィアの部屋に黒い剣を渡しにやってきた。もちろん、剣や鞘にこびり付いた血を綺麗に拭い取って。

だが、それでも黙ったままではスフィアに悪い気がしたので……ハルバードは今日、正直に話そうと考えていた。

「……すこし話したいことがあるんだが、今大丈夫か？」

「大丈夫だよ。どうしたの？」

剣を渡し、少しハルバードは黙る。心配になって顔を伺うスフィア。その顔を見て、何かを決意したかのように顔をスフィアに向けて、一言。

「……ごめん、それで人斬った」

「……そっか」

ハルバードは、狂戦士と戦ったときの話を簡単に話す。もちろん、人をどれだけ切ったこともだ。

だが、それに特に驚きもせず、呟くスフィアを見て驚くハルバード。

「知ってたのか？」

「アレだけ、血の臭いさせてたからね。私、戦場にいたからちよつと血の臭いとか敏感なんだ」

苦笑いしながら、剣を握り、見つめるスフィア。その顔には、懐かしい思い出に浸るような表情を浮かべて……。

「気にしないで。お母さんでも、この剣で人を斬ったことあるっというし……私だって、人も魔物も斬ったことあるよ。ハルは……今回が初めて？」

「……魔物はいくらでも斬ってきたけどなあ。でも、まだ実感わかないよ。初めて魔物を殺したときのほうが覚えてるし」

「そっか……そうだ。ハルはこれから暇？お母さんの剣の話とかしたいし、大丈夫？」

「俺は大丈夫だけど……ルームメイトは平気なのか？仮にも女子の部屋に入るのはどうかと思うけど」

「あ……うん、ちょっとまって」

部屋の奥へ入っていくスフィア。それを見届け、ふと、ハルバードが名前が載っている札を見た。

「……フィーネ、少しハルバードを部屋に上げて大丈夫？」

（ああ、フィーネって確か薄緑の髪の毛……釣り目の、あの時の女の子か）

ハルバードは、そこまで女子たち……いや、クラスメイトたちと親しくないで名前は殆ど覚えていない。

「別にかまわないわ、煩くしなければ」

「有難う……さ、ハル。入って」

手招きして、リビングへとスフィアは入っていく。ハルバードもそれにしたがって入るが、そこで見たのはソファーで寝そべりながら本を読んでいる薄緑の髪の少女。スフィアのルームメイトであるフィーネだ。

スフィアの小部屋に入ろうとしたそのとき……何故だかフィーネから視線……いや、睨み付けられた。

「なんだ？」

「……なんでもないわよ」

ハルバードに向けられていた視線を本へと戻す。

その動作に少し疑問を持ちながら……スフィアの部屋へと入っていった。

スフィアの部屋は、年頃の女の子の部屋というわけでもなく、だからといって散らかっても無い。というよりも、部屋には必要最低限以外のものは何も無かった。

まるで、いつでも出ていけるような……そんな部屋のような感じをハルバードは受けた。

（ま、入ってまだ一週間も経っていないからだろうが……）

スフィアはというと、ベッドの上にちょこんと座って、ハルバードを見ていた。不思議そうな顔をして。

「……そういえば、なんで制服着てるの？学校終わったの、大分前だよ？」

「え？……ああ、外で剣の鍛錬をしていたんだ。ってか、スフィアだって制服じゃないか」

「私は、勝手に学校外へ出た罰則で遅くなったからね。ほら、ハルが壊した壁……派手に壊したからね」

少しだけ、ジト目でハルバードのことを見る。「あ、あはは」と

苦笑して目を逸らしたハルバードにため息をしながらも、「元を辿ればわたしが悪いんだから良いんだけどね」と付け加えて、自分の横を空ける。

少し戸惑ったが、他人がベッドに座ることを意識していなさそうだし、座るところが特に無かったので、それに従い、黙ってベッドの上に座る。

「……本題だけど、私が勇者の娘だつて事は知ってるよね。この剣は、私の母親……勇者が使っていた“セイクリッド・ツール神の祭具”なの。神の祭具については、知ってる？」

「……まあ、多少なりは」

「そつか。一応、お互いの認識があつてるか分からないから、説明だけさせてもらうね。“セイクリッド・ツール神の祭具”は、よく王都内の童話とかに出てくるのだけど……遺跡から発掘された“大魔法具辞典”には、こつ説明されているの。《神の祭具とは、神が、神達の神を崇めるために作られた祭具。神達が円滑に世界を治めるために作られたといわれている。神の力の一部が封じられた武器であり、その一つでも手にすれば世界を手にすることも、滅ぼすこともできる》。つまり、神様の道具ね。それが何かしらの事故により、紛失。あちこちの世界に落ちてしまった。このお母さんの剣……名前は“カレストヴ絶対王の剣”といつて、手にすれば“王なる力”を手に入れられる。ここまではOK？」

「……王なる力つて？」

「それは、これから説明するところ。王なる力は、“世界の王”としてふさわしい力を手に入れられるの。詳しくは書かれていない

けど、それを手にすると“絶対的な力”を引き出せるらしい。実際は、その剣に認められて“真の使用者”になつたら……らしいけど、認められなくても振るうだけで圧倒的な切れ味と使用者の身体能力や魔力の純度を極限まで高め、悪魔達を圧倒してきた……つてのがこの剣」

「へえ……どおりで、この剣を使うと魔法の威力が上がったり、体の動きが良くなつたりするわけか」

「あまりいいことばかりじゃないけどね。実際、お母さんが使ったときは反動が凄かつたらしいから。あ、そういえば色が変色してるんだよね。私の記憶では、銀色の綺麗な剣だったのに……今も綺麗だけど、真つ黒でまるで……」

「力が消えかかつてる？」

「ううん、違う。むしろ、真つ黒い力がこの剣を支配している感じかな。まるで……」

そういいながら、ハルバードを見つめるスフィア。そして、その後黒い剣に視線を移した。

「……そういえば、私が学校から脱走したとき、この剣を呼び出したりした？」

「ああ……ほぼ無意識下だったけど、ね。その剣から声が聞こえて」

「声？」

「ああ、ちよっとピンチだったときにね。確か……」

我が剣の名を……唱えよ 選ばれし“魂”よ

「魂？なにそれ」

「んー……よくわからん。ただ、何かに選ばれてるってことは確かだよなあ……」

面倒事だったらいやだな、と呟くハルバードに、少し笑ってしま  
うスフィア。だがすぐに笑みを止め、黒い剣をハルバードに差し出  
す。

「これ、さ。ハルが持ってたほうがいいと思うんだよね。どうせ  
私には使えないし、私には“< r u b y > < r b >魔法の剣< / r  
b > < r p > (< / r p > < r t >  
ルーンソード< / r t > < r p > ) < / r p > < / r u b y > ”の  
呪文があるから必要ないんだよね」

「いや、でも……これ、母親の形見なんだろう？そんな大切なもの  
……」

「使えない人が持っていて、その剣がかわいそうだからね。そ  
れに、持つてるだけで魔力ガンガン持つてかれる武器なんて、正直

邪魔だし」

「……形見の扱い、雑じゃね？」

「と、とにかく！ハルに持っってもらいたいの！良い！？」

そう言っつて顔を真っ赤にして黒い剣を無理やり渡す。それを受け取ると、ハルバードは苦笑い。

「わかったよ。とりあえず、スフィアが使えるようになるまで預かってるつて事で。……つと、もう大分時間が経っちゃったな。明日早いから、もう寝ちまうな」

「え？明日なにか行事あったっけ？」

「んにゃ、ちよいつとな」

早朝。庭にて剣を振るう一人の少年の姿があるのを、スフィアは見つけた。

別に彼には用はないし、彼自身も自分のことは言っていない。

だが、どうしても昨日言っていた“ちょっと”が少し気になり、様子を見に来たのだが……

(……別に、それっぽい用事をしてないじゃん)

特段、誰かと待ち合わせしている様子はないし、何かをやっている様子もない(剣の鍛錬や風魔法の特訓をしている以外はだが)。

そして、そろそろ学校の授業が始まる時刻となっているので、これからどうするということもなさそうだった。

(早起き損……? ってか、こっそり見てないで聞けばいいのに……私なにやってるんだろ)

昨日の罰則でヨレヨレな体に鞭を打って早く起きては、なんとなく“ルームメイト  
フィーネ

”に見つかからないように部屋を抜け出し(気配でバレてはいたが)、こそこそと木陰から覗いていた自分になんとなく恥ずかしくなってきた。

後ろからこっそりと出てきて、たまたますれ違ったように見せかけて声を掛けようとしたが……

「ん？どうしたスフィア？さっきからジロジロ見てて……」

「きゃっ！」

声掛けようとした手前で急に振り向いたハルバードに吃驚して声を上げる。

「き、気付いてたの？いつから？」

「うん。木陰から覗き始めたところから」

「それって大分前だよね！？気付いてたなら声かけてよ！」

「いやあ……必死そうに見てたから、声掛けるのに少し躊躇いがあつたんだよ。気配どころか全く姿を隠せてないところが、なんていうか……可愛いくて？」

「~~~~っ！……もういいや。それよりも、なんでこんな朝早くから稽古？」

絶対に馬鹿にしているような微笑を向けたハルバードに、色々ときらめたスフィアは近くのベンチへと座った。

困った顔をしながら、ハルバードもその隣に座り、少しだけため息を吐いて話し始めた。

「あと一週間後に、模擬戦があるだろ？あれに備えてるんだよ」

「それくらいの嘘、私にも分かりますよ」

ジト目でにらまれ、苦笑いするハルバード。

「まあ、嘘じゃないよ。相手の人に、怪我させないような技術をつけないと校長に怒られるからね」

「……それ、なんか稽古の本質から外れてるような気が……んで、本当の意味は？」

その問いに、言っていないのかなあと呟くハルバード。確か口止めはされていないが、また暴走しても困る。

だが、あまり口止めしていても後で動けないのは困るので、少しだけ話すことにした。

「ん……まあ、“龍王騎士団

ローワン・ナイツ

”の動きは活発化してるよな？限りなく可能性が無いが、万が一の対応として俺が任されているんだ。だが、今の剣の技術ではもしかしたら守りきれないかもしれないからな。今できることをしてるのさ」

「それで、朝から稽古してるってわけね。でもさ、ハルって結構強いよね。下手な騎士隊が束になってもそう負けない気が」

「……負けたから特訓してるんだよ。それも、ボッコボコにね」

狂戦士

ベルセルク

。スフィアを助けるために、囷となって戦った“龍王騎士団

ローワン・ナイツ

”の団長。生粋な殺し合いでは確実にやられていた。

絶対王の剣

カレトヴルツフ

にてなんとか勝てたものの、あれ以上の強い者などいくらでもいる。ましては、悪魔などと対峙したときはそれ以上の強さを持つのに、

神の祭具

セイクリッドツール

頼りではいざというときに対処できない場合もある。

そして、一番の理由が……

「敵でも、簡単にあしらえるほどの力が欲しいんだ。そうすれば、あまり殺さなくても済む様になるだろ」

一番の理由。それは、人を殺したくないからこそその、特訓だった。

それを聞いたスフィアは、少しだけ固まった。それは、自分の過去にも会った。

今まで、戦場だけでなく日常でも刺客が送られ、人と殺し合いも多かったスフィア。殺されなければ、自分か親しい人が殺される。そんな場面が多かったために、今では殺意を持つ者を殺すことはそこまで躊躇せずに殺すことに慣れてしまった。

一方、最近になって人を何人が殺してしまったハルバードは、それでもまだ人を殺したくないと考える。戦場において、それはいかに甘く厳しいことをかき、スフィアは知っているのだが……

ハルバードのその目は、ただ絵空事を夢見ている目ではなく、真剣そのものだった。

「ぷっ」

「……なんで笑うんだよ」

戦場ではそんなもの邪魔になるだけ。それを教えようと思ったが、その真剣な表情に負けてしまった。それよりも、彼なら“殺せず、殺さず”ができるほどの高みに到達できそうな気がしてしまい、そう思う自分に思わず笑ってしまった。

「いや、なんでもないよ」

ハルバードに微笑みながら、ふとあることに気付いた。「あっ！」と声を発して、急いでスフィアはメインルームに小走りで走る様子を見て、ため息を吐く。

「……なんなんだよ、一体」

なんだか少し馬鹿にされた感じを受けて、少し頬を膨らませて再び剣を振るう……と、あることに気付いた。

「あ、ホームルームの時間……！」

結局、スフィアも間に合わなかったらしく……二人仲良く廊下に立っていたという。

そして、二人には分からなかったが……栗色の髪の少女が、にやにやしながら二人を見ていたという。

Step・26 模擬戦・・・？

スフィアは魔法学校領内にある競技場の端っこにて、静かにため息を吐いた。

喧騒のような声が上がると、不機嫌そうにその方向へ視線を送る。その先には、女子学生が男子学生を下して喜んでいる姿が見えた。不機嫌な理由は、特にやる事が無く暇をつぶしていることだ。

今日は模擬戦の日。今日のために少しだけ必死になって魔法の勉強をしてきたが、“自然系属性”ネイチャー・リネージュの全ての魔法が使えなくなってしまった。才能が無いわけではなく、逆にありすぎてしまった。

今のスフィアでは、今まで使っていた“光”ですら一発で護符の魔方陣ごと蒸発させてしまうので、うかつに魔法を繰り返せない。繰り返すときは……相手を殺すときだろう。

（まさか、自分の魔法がこんなに威力が高いなんて……思えなかったね）

とにかく、今は魔力を調節する練習をすること。そういわれて渡されたのが、魔法石。魔法石に魔力を通して一定の光を保たせる練習をしていた。

(……はあ、なんか詰まらないな)

他の生徒が楽しそうにしているから……ではなく、純粹に戦ってみたい人がひた。

命の恩人であり、今現在自分を守ってくれている護衛の一人。ひっそりと校長と話したときに、“彼はもっとも従者としての素質がある者”と教えてくれた人。

そのことを聞いてから、一度でいいから戦ってみたくて、戦える属性を一つでも見つけようとして……全属性失敗した。

(……そういえば、マリー校長は私にもう何個か、“ナチュラル・リネージュ天然系属性”を持つてる可能性があるって言ってたなあ……)

勇者・セリカは“ナチュラル・リネージュ天然系”の属性をいくつも操っていたと聞く。ならば、自分も他に使える属性があるのではないか。そう思い始めた。

(もしも、“殺したくない相手”が出たときに、このままじゃあだめだよな。最悪、光の属性だけでもコントロールを覚えなきゃ……)

そう呟きながら、ふと一人の学生を見つめる。灰色の髪に神秘的な黒い瞳。そこまで体格は良くは無いものの、非常に引き締まった体。よく言えば、無駄がない体格とも言える。

ハルバードも、全“ネイチャー・リネージュ自然系属性”を全てこなした。だが、スフィアとは違いコントロールできている状態で。

さらに、剣術の特訓を朝から晩まで行っていたおかげか、“人を傷つけずに倒す”剣術を確立させてきている。今もまた、相手の力の流れを上手く使って倒し、降参させている。

(……ハルはまた腕を上げてきてる。私は……上がってる?)

その疑問を首を振って消し去る。いざというとき、力を出し切れずにいつも大切な人を殺してきたのは、自分だ。その思いから、ハルバードを見てきていかに自分が甘かったかを思い知る。

(……ハルに、負けてられない!!)

今までの不機嫌そうな表情から一変して、真剣な表情で魔法石に向き合い、すごい勢いで集中するスファイア。

その集中の勢いは、現在自分のことで大事になっている外野の声が全く耳に入らないくらいだった。

「うん……いないなあ……」

「ん？スフィアちゃんならあそこにいるよ？」

「いや、スフィアを探してるわけじゃないんだけど……」

端のほうで石とにらめっこしているスフィアを指差して、「早く言ってきたよ」という表情でハルバードを見るレティル。それを軽く流して、次の対戦相手を見る。

今回の模擬戦は、校長の指示からトーナメント戦となった。なるべく多く戦わせて、ハルバードに“従者候補”となる者を見つけやすくするため。

といっても、それを見つかる作業はハルバードだけではなく、アンネローゼやマリー校長……他にも多数の先生が動いているらしく、常に生徒のことに目を光らせているので正直あまり必要はない。

だが、その目は即戦力となる、なるべく上級生に向けたもので、ハルバードには下級生……それも“ファースト・ナンバー一年目の学生”の生徒に向けさせたいのがマリー校長の意図というのは気付いている。

……だが、正直ここで戦場に放り込んでも戦えるどころか、生き残れそうな者は一人しかいない。あのフィーネという少女だが、今のフィーネでは従者に向かないというハルバードの独自の考えで外している。

(ん……誰かいないかなあ……)

だからこうして、次の獲物を品定めしていた。

相手の女子生徒は、「ひっ！」と小さく悲鳴を上げておびえていたが、あえて無視した。

それを見たレティルは、何か言いたそうだったが……。

ふと、ハルバードの背後からざわめきが起こる。それと同時に、ステージに上がる一人の男。

「よう、ハルバードくん。ちよいつと失礼するよ」

ステージが上がったかというと、獲物だった女子生徒に耳打ちする。すると、首がもげるほど高速に何度も頷いたかと思うと、そそくさとステージから降りてしまった。

「彼女じゃ不満だろ？それよりも、僕と一勝負しないかい？」

真っ白の貴族用の手袋を嵌めて、金色の細剣を構えてハルバードと対峙する男。金色の髪にあちこちアクセサリーがついた細い体の男。気品がある動きから貴族だというのが分かる。

「……この模擬戦で武器を使う際は、模擬刀の筈だけど？」

「合ってるぞ？これは“模擬戦”じゃなくて、“本物の決闘”だからな」

「……は？」

呆気にとられているハルバードをよそに、「早く武器を構えろよ」と隠してあるはずの腰の剣を顎で指す。

ステージの周りには、何故だか周りの学生が集まりつつあった。

「どゆこと?」

ハルバードが戸惑っているところに、もう一人ステージに上がってくる影があった。……アンネローゼだ。

「あ、アンネ先生……どういうこと?」

「うん、レセント君がハル君に決闘したいってことだから受諾しました」

「いや、意味分らないんですけど?」

「だから、スフィアちゃんを賭けて? だっけ?」

「正確には、スフィアちゃんに告白する権利を賭けてですよ、アンネローゼ先生」

そういって、先ほどの金色の細剣を握り締めた男が、剣を振わせて続ける。

「君と勝負がしたい。どちらかが、スフィアちゃんにふさわしいかどうか?」

「……………はい?」

スフィアに視線を送る。あちらはあちらで、この騒ぎにも気付かずに、石に集中している姿が見えた。

(何だか……泣けてくる)

よくわからない状況に、思わず心が折れそうになった。

「ルールは簡単。相手を戦闘不能にさせれば勝ち。あとは自由です。ただ、今回は一年目の学生同士ということで、殺しは無し。破っても罰則自体はありませんが、この学校にはいられないことは覚悟しておいてください。これで大丈夫ですか？」

「はい、構いませんよ」

「いや、了承していないのですけど……ってか、本人は石につ

「両者の了承が得られましたので、これより開始します。では…  
…始め!!」

「問答無用ーっ!?!」

ハルバードの悲痛な叫びも届かず、勝手に始まった決闘。レセン

トは挨拶代わりとハルバードに切りかかる。とつさに、レイスから貰った魔具の腕輪を片手半剣のだんぴらに変形させて対応する。

「腰の剣は使わないのか？」

「これを使うには、もつと俺を本気にさせなっ！」

レセントの剣を受けた後に、くるりと体を反転させて横一線になりぎ払う。バックステップにてぎりぎりに回避したレセントは、すばやく後退して距離を置く。

「そういえば名乗ってなかったな。僕の名前はレセント・ギル・ソード・アーキテクト・グレジャー。Sクラスだ。一応、“七大貴族”の“光”の次期当主だ。よろしくな！！」

一通り名乗りあげると、再び勢いよくハルバードに斬りかかる。軽くだんぴらで去なす。続けざまに縦・横・縦と斬りつけるが、難なく回避する。

「俺はハルバードだ。悪かったな、名乗るような家名は持っていない……」

体内の陣を構築し、手を地面に置く。すると、二人の足元を土属性の魔法で崩れはじめた。

「《神聖なる光よ、正義のため、阻む源を封じ、我に道を作りましたまえ》！」

とつさに詠唱を繋ぎ、“道なき道”を作る。さまざまな色の光で彩られ、虹のように綺麗な橋がハルバードへ向かって一直線に現れ

る。

ハルバードも体内の陣を構築し、風を操って着地。そして直後にその風を再利用して相手に向けて発射した。

「はあー!!」

金色の剣を振るい、風を斬る。ハルバードはその剣が魔法を斬ったことに驚きつつ、慌てて横へ飛び出してよけた。

他の生徒もその剣が魔法を切ったことに驚いているようだ。なぜなら、本来ならありえないことなのだ。

鉄の剣なら、魔法との相性が悪い鉄を使われているので触れた瞬間魔法が拡散する。だが、あの剣を所持しているだけで“魔法が持つてかれてしまう”ので、金属製の剣を持つと魔法自体使えない。

だが、レセントは先ほど魔法を放った。だから魔法とは相性が言い魔鉱石などの金属でできているかと思っていた。だが、魔法も斬った。

アンネローゼもかなり驚いている様子だった。本来ありえない、魔法を斬り、自身は魔法を扱えると言っ反則くさい剣を持っているからだ。

ハルバード自身は、それが何だか知っている。そして、自分も“今”それを持っているのだ。

「……やっと、見つけたよ!!」

セイクリッド・ツール  
“ 神の祭具 ”

どんな名前かは知らないが、金色に光る剣を見てそれが“ 神の祭具 ”<sup>ツール</sup>というのを確信した。  
セイクリッド・

異常なほどの魔力が、彼から剣に流れ込んでいるのが、欲観察することで分かったからだ。

ヤル気が、何倍へと跳ね上がるのをハルバードは感じた。

そのころ、ようやく騒ぎを聞きつけたスフィアだが、二人が何のために戦っているのを聞いたのは……戦いが終わってからだそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8838u/>

---

BackStage The Hero

2011年11月18日04時50分発行